

# 日本への回帰

第19集





大学教官有志協議会  
社団法人 国民文化研究会  
編

日本への回帰  
(第十九集)

—第二十八回学生青年合宿教室(雲仙)の記録より—





## は し が き

この数ヶ月間に起きた衝撃的な事件を見ると、この世界は依然としてパワー・ポリティックスのせめぎあふ修羅場だといふ感を深くする。昨年九月一日未明、ソビエト領空内に迷ひこんだ大韓航空機が、サハリン西方モネロン島（海馬島）近くで、ソビエト軍用機スホイ15によって撃墜された。同機の塔載してゐるAA3ミサイルによって一瞬にして空中分解したものと推測される。邦人をふくむ二百六十九名の遺体は、その毛髪一本すら還つて来ない。ソビエトは意図的なスパイ行為として非を認めないどころか、居直つて撃墜の正当性を主張さへしてゐる。しかし、自衛隊の傍受したソ連機交信記録の解読から、残酷極まる無警告撃墜であることが世界の眼前にさらけ出された。ソビエトといふ軍事国家の無気味な体質を垣間見させたこの大事件も、邦人の脳裏からはや薄れかけてゐる。そして、「ソビエトは脅威でない」といふ不思議な言挙げが、依然としてジャーナリズムに横行してゐる。

今一つの国際的大事件は、昨年十月九日、ビルマ、ラングーンの国立墓地アウンサン廟で起きた、リモコン爆弾による韓国閣僚ら二十一人の爆殺テロである。この事件の犯人はラングーン港に停泊してゐた北朝鮮の貨物船トンゴン号から上陸した国軍将校三名によるものであり、

彼らは犯行現場との往復に大使館の公用車を使用してゐた。外交特権をフルに活用した驚くべき犯罪である。そこにはタテマエとしての人道主義などに一顧も与へないやうな、酷薄極まる共産国家の実態がある。

ヨーロッパでは、ソビエトのSS20に対抗して、アメリカのパーシングII、巡航ミサイルの配備が始まった。東側に国境を接する西独では、昨年六月から十月にかけて、参加者二百万人といはれる反核デモが荒れに荒れた。これらの運動にKGBが深くかかはってゐるであらうことは、素人の眼にも明白であるのに、日本の大新聞は常に「反核」側の味方であった。核バラスンにおいて、アメリカを劣勢に追ひこむことが、日本に有利であるといふ判断がどこから出てくるのだらうか。意図的な世論誘導であることは弁明の余地がない。

一方、国内では十月十二日、田中元首相のロッキード汚職に対して実刑懲役四年といふ判決が出た。「政治倫理」といふ曖昧な争点を中心に、解散、総選挙が行はれ、自民党は大敗した。「倫理」が政争の具に供せられるほどに、日本人は墮落してしまつたのか。本来、政治といふものは、権力と利害をめぐる展開される人間間の角逐といふ一面を持つてゐるから、さういふ相対世界を起えたものへの忠誠心なくしては「倫理」はあり得ない。キリスト教圏において、元首や大統領の就任式に、神への宣誓が厳粛に行はれる所以であらう。かつての日本の政治家たちは、天皇の無私の御心に応へてゐるかどうか、「倫理」の基準であつた。天皇の臨席され

る国会の開会式に、意図的に欠席を続けてゐる共産党には、彼らが愛用する「憲法違反」のレツテルがふさはしい。今や、保革を問はず「倫理」はない。閣僚の資産公開が「政治倫理」とは何とうそ寒い風景ではないか。昨年一年間の少年非行は二〇万人に迫るといふ。

われわれの合宿教室も、茲に二十八回を迎へた。三回目の御出講である齋藤忠先生の「急変するアジア・太平洋世界」から、われわれは祖国防衛の意志を教へられたし、小堀桂一郎先生の「古典と私たち」から、日本人の精神世界の広さと豊かさを教へられた。両先生とも御講義要旨の掲載を快くお許しいただいたが、小堀先生には要約に御加筆いただき、齋藤先生には全文を御自筆で書きおろしていただくなどなみなならぬ御力添へを賜はった。ここに紙上をかりて深く感謝の意を表する次第である。

昭和五十九年二月十日

大学教官有志協議会  
国民文化研究会

# 目次

はしがき	1
一、学問と人生	
詩と哲学の恢復を―現代青年の課題として―	
福岡県立水産高等学校教諭	占部賢志
占部賢志	3
知行の誠ならんことを思ふは人の道なり―吉田松陰を中心に―	
亜細亜大学助教授	東中野修
東中野修	29
国家は“文化”の単位である	
国民文化研究会理事長・亜細亜大学教授	小田村寅二郎
小田村寅二郎	49
いのち蘇る日を!	
福岡県立修猷館高等学校講師	小柳陽太郎
小柳陽太郎	77
一、講義	
急変するアジア・太平洋世界―祖国の明日への祈り―	
国際政治評論家	齋藤忠
齋藤忠	105
古典と私たち	
東京大学助教授	小堀桂一郎
小堀桂一郎	139

一、古典輪読と短歌創作

「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」——班別輪読のための導入講義——

…………… 開発電子技術 榎 取締役 長内俊平…………… 173

短歌創作導入講義…………… 福岡教育大学教授 山田輝彦…………… 203

創作和歌全体批評…………… 亜細亜大学教授 夜久正雄…………… 223

一、青年研究発表

教育現場で思ふこと…………… 熊本県立八代高等学校教諭 白浜裕…………… 247

合宿教室を通して学んだこと…………… 関西熱化学 榎勤務 天本和馬…………… 257

戦後の国語改革について…………… 榎講談社勤務 藤井貢…………… 267

一年のあゆみ…………… 九州大学工学部三年 北浜道…………… 277

合宿教室のあらまし…………… 亜細亜大学法学部四年 冢知浩…………… 283

合宿詠草…………… 福岡教育大学四年 是松秀文…………… 327

あとがき…………… 344

△国民文化研究会関係図書目録▽



■ 学問と人生





# 詩と哲学の恢復を

—現代青年の課題として—

福岡県立水産高等学校教諭 占部賢志



吉田松陰誕生地道標

は　じ　め　に

國語と國家像の喪失

哲學―「價値の學問」といふこと

「詩」と「哲學」の體現者

―遊歴の中の吉田松陰―

はじめに

先程皆さんは、めいめい自己紹介のひとゝきを過ぎました。初見の相手に交々己が名前を告げて、参加の動機なりを語り合ひ聴き合ふ。至極當り前の禮儀であります。先づその意味するところについて一言觸れさせていたゞきます。初めて顔を合せた相手を前に自分の名前を名乗るといふことは、端的に申しますと、己れの獨立した主體を截然と示すといふことになりません。初見の者同士が己が魂の所在を晒し合ふところから眞の對話が胎動するといふ事實に着目したいと思ふのです。

人生の大事といふものは、何か大仰な構へ、肩を怒らした氣負ひから生まれるものではない。それは自分が何時の間にか纏まとつて了つてゐる一切の意匠を剥ぎ取つて、祖國を同じくする同朋として素朴に名乗り合ふさゝやかな世界の實現を前提としてはじめて萌すものと言ひたいのです。共通の祖國を戴く同朋であるといふ紛れもない事實は、私達が自らの意思で選択した結果ではありません。宿命づけられてゐるといふ言ひ方がふさはしいでせう。従つて名乗り合ふことに依つて同朋としての胸襟を開く。さう思へば本合宿の幕明けに自己紹介のひとゝきを持った意味は、國民同朋としての素顔を示し合つたことに他ならないのです。

そのことを最初に確認し合つて、本日掲げました「詩と哲學の恢復を」といふ標題をめぐつてお話し上げようと思ひます。「詩」と「哲學」の「恢復」といふのは大袈裟な標題かもしれない。だがこの「詩と哲學」は、私を含めまして現代青年層の中から欲落して了つた象徴であり、私達青年の胸に甦らせるべき最たる課題だと思つてをります。

### 國語と國家像の喪失

皆さんは本合宿に参加されるに際して、合宿申込書の裏面のアンケートにそれぞれ所懐を書き綴つていらつしゃいます。その全てを讀ませて戴きましたが、その中にかういふ意味のことが書かれてをりました。曰く、「自分の言葉を、自前の生きた言葉を持ちたい。實體のないおざなりの言葉が今の大學には餘りに多過ぎる。さういふ世界から脱け出して、魂の入つた日本語を持てる日本人になりたい。」と切々と訴へていらつしゃいました。日本語の衰退を嘆く眞率なものでした。全部のアンケートにふれてみて、この参加學生の想ひは、角度は違へ全参加者の等しく痛感される訴へだな、と思はれてなりませんでした。

言葉といふものは、私達の精神の活動と緊密に結びついてゐる。言葉の衰退は精神そのものの衰退であり、言葉の隆盛は横溢なる精神の活性を示すものでありませう。さう考へますと、



たしまして、凡そ一箇月の視察の結果、日本教學の重大な變革を強制したのです。その重大な一つが、「個人の知性」の徹底した人格化であり、さらに吾が國語國字のローマ字化であったのです。後者の國語の改革については永久の平和のためには是が非でもローマ字を採用すべきであるといふやうなまことに啞然とする内容を記してをります。勿論その後ローマ字化は採用されませんでした。國語解體の占領政策の意圖は、漢字の略式化と現代假名遣ひの裡に着々と

今取り上げました一人の參加學生の指摘は、言葉のみならず私達の精神の鈍さへの指摘でもあるのではないかと言へる。では、さういった恐るべき事態は如何にして蔓延して來たのでせうか。その由來の一つに私は占領政策の影響が多分にあると考へます。吾國の教學の行くへを決定づけたと言はれるものに、「米國教育使節團報告書」と呼ばれる文書があります。この使節團一行は、昭和廿一年三月初旬に來日い

現實化されてをります。この國語の改革解體の背景には、この報告書が如實に示す通り、獨立國家としての日本の國柄を國民の胸から抹消するといふ思想があつたのです。その爲の恰好の材料が日本語であると看破して改革を斷行していったのであります。私達はこの徹底した占領政策に今日もなほ拘束されてゐる。この拘束に順應して來た結果が、當今の大學に見受けられる言葉の衰退を齎らした元凶であると思ふのです。

そして、かういつた言葉の衰退が、自然に精神の衰退を招き、その結果日本人の胸からいつしか日本本來の國家像が消え去っていつたやうに思はれます。さらに重大だと思ひますのは、さういふ經緯を辿って、次第に私たちの學問の領域の中に、「日本」といふ視野が失はれ、爲に日本教學の「價値の學問」迄も紛失する羽目に陥つたといふことです。

そこで、この「價値の學問」について、或る科學者の指摘をみてみませう。

### 哲學―「價値の學問」といふこと

私は科學の世界については全くの門外漢ですから、こゝで科學論をする積りは毫もありません。たゞ、科學の達人の書き著した物を讀む事は、私のやうな科學の素人は素人なりに閃きが得られるものです。こゝに採り上げた一文は、工學博士である奥田克己氏の學問觀の結晶とも

いふべきものです。

「科學は外界を見る學問、したがって、すべてを物として客觀的に冷静に見る學問であり、存在の學問であるが、教學は主觀的に、すなはち感情をも含めて我を内省する學問、したがって心の學問、または價値の學問である。」(『科學の限界と日本の教學』)

本文を一讀すると篤と了解されるのですが、奥田博士は理屈を説かれてゐるのではないのです。積年の科學の仕事を通じて得た勘所を、在るが儘の事實に即して淡々と在るが儘に語つてゐるだけなのです。學問にもそれぞれ分といふものがあるのだ。この分を離れて了へば學問は學問とは言へないのだ、とさゝやく聲が聴こえるやうでした。私はすっかり魅了されました。

「客觀的に冷静に見る」といふ視力の純化は、勿論大事なことでせう。よく觀測を誤るとか手元が狂ふとかいふが、さういふ場合は概してぼんやりしてゐたり興奮してゐたりすることが多いものです。だから失敗をする。勿論體調や感情に左右されることなく正確に「見る」といふ「客觀的態度」は堅持されねばならない。さういふ世界が科學の世界なのです。それは言はゞ觀測の世界といつてもいい。この觀測の世界では、寸分の狂ひのない視力の純化は不可缺の條件だと言へます。存在する物の性質を誤まらずに握むといふ觀察の力を鍛へる學問の領域、それが科學だとこの達人は言つてゐるのです。

ところが奥田博士は、もう一つ、觀察では扱へぬ學問の領域が存在するといふ事實を示唆さ



れてゐるのです。その領域こそ「價値の學問」だと言ひ切つてをられます。實に瑞々しい斷言ではありませんか。目が覺めるやうな指摘です。私が演題に掲げました「哲學」とはまさに、この「價値の學問」だったのです。價値とは一生における値打ちでせう。さうしますと、この「價値の學問」といふことを私なりの表現で言へば「綜合的的人生觀」と言つてもいいのではないかと。人生觀ならば、人生を「觀察する」ところから得られるものではない。人生といふ舞臺には、踊り込むほかに術はないのです。

では、「綜合的的人生觀」なるものは、人生に踊り込みさへすればたちどころに自得出来る代物でせうか。さうではないことぐらゐ誰でも知つてゐますね。何もないとところから降つて湧くものではない。それはやはり人から人へと傳承されてゆくものだと思います。その傳承を私は學問と名づけていゝと思ふ。私は未だ確乎とした「綜合的的人生觀」を體得してゐるわけではありませんが、一瞬、人生の値打ちらしきものを垣間見る感じは經驗したことがあります。人生の決斷を迫られる時、あるいは難局に立ち向ふ時、さういふ土壇場は誰しも經驗するものです。私にもさういふ人生の緊張の一瞬といふものがありました。人生が人生である以上、これからも幾度か訪れるものと覺悟してゐますが、さういふ二進も三進も行かぬ閉塞状態に陥つた時に、其處から脱け出したいと願ふのは、誰憚ることのない人間の本然の欲求でせう。私の場合、脱け出したいといふあへぎの極限に天啓のやうに浮んで來たものは、或る確かな人生を



全うした人の姿でした。一つの決斷を下し己が人生を選択してゆく獨りの男の背中が見えて來たのです。そして、あの人ならどうするだらう、どういふ決斷を下すだらうか、さう自問自答を繰返してゐますと、吾知らず一つの決斷が促されてくるのでした。かういふ經驗を顧みますと、その核心には、己が人生の範とするに足りる先達の人生から洩れてくる囁きに知らず識らず聴き入ってゐる自分の姿があるのです。この囁く聲の聴き方、聴こえ方は、誰しも一様でないことは言ふ迄ありません。人生の體驗の仕方が皆違ふやうに、囁く肉聲の色彩りもやっぱり違ふものです。全く自分流の聴き方で聴きとって人生を復原してゆくのです。私は自身の經驗を顧みてさう思ふ。

確かに心の深部に囁く聲といふものは、「客觀的に冷静に見る」ことは出來ない。これはまさしく簡明な主觀の世界なのだ。徹底した主觀の世界であつて、客觀的に普遍的に正しいのかどうか、判斷の加へやうのない世界です。従つてそれは、詮ずるところ、信ずる力の強弱に關するものとしか言ひやうはないのです。見て確めることは不可能なのですから、行き着くところは、信ずるかどうか、といふ精神の勁さのほかにない。信じた瞬間、何ものにも換へ難い力となつて私を突き動かす。ところがさういふ世界が學問の領域の中に存在すると奥田博士は言はれるのです。博士は、この學問を「日本の教學」に求めてをられる。日本の教學とは、さういふものだと言はれてゐる。その學問の世界、それは、もっと端的に言ふならば、精神の歴史的傳承の世界とも言へませう。

ではその學問のありやうを、それを體現した一人の人間像に即して考へてみたいと思ひます。

「詩」と「哲學」の體現者—遊歴の中の吉田松陰—

吉田松陰は、天保庚寅元年（一八三〇年）八月四日、長門國萩の東郊松本村に、父杉百合之助常道、母瀧の次男として誕生。松陰五歳の時、父の弟吉田大助賢良に世嗣がゐなかつたので、吉田家の養子となり家督を繼ぐこととなります。この吉田家は、代々山鹿流兵學を以つて三十七萬石の毛利氏に軍學師範として仕へ、家傳の兵學を藩學明倫館で講ずることが主な任務でした。天保六年、叔父吉田大助の死後、六歳の幼童たる松陰は、もう一人の叔父の薰陶の間に家學復興のための一心不亂の少年時代を送つてをります。このやうな松陰の緊張した成長に併せる如く、吾國を圍む時勢は次第に急を告げてゆく。十一歳の幼少乍ら藩主の前に「武教全書」戦法篇三戦を講じて藩主毛利敬親を驚嘆せしめてゐた頃、隣國清ではアヘン戦争が勃發し翌年清は敗北を喫し、列強の波は亞細亞全體を震撼させ吾國に迄押し寄せてくる勢ひを示し始めてゐました。松陰十五歳から十七歳の三年間にも、佛船琉球に來航、露船松前に來航、英船琉球に來航、さらに孝明天皇踐祚の弘化三年（一八四六年）には、米使浦賀に來り通商を求め、佛船も再び長崎に來航するといふ動亂の兆候が見えて來るのです。松陰の一生を通覧します

と、まさに迫りくる國難に符合する様に成長してゆく人生であると思はれる。私は歴史の不可思議さをつくづくと感じないではをられません。

いづれにしても國防の任を意識し自覺的に成長を續ける少年松陰の胸には、海外諸蛮の有様が如何なるものであるか、熟知したい欲求がふつふつと湧き上つてゐたといへませう。かうして松陰は胸に充滿する欲求に堪へられなくなって、つひに意を決して遊歴の途に上るのです。折しも松陰廿一歳の時であります。爾來、全國津々浦々に至る迄凡そ五年間の遊歴を續けますが、各地歴訪の折々に書きつけた日記を中心に松陰の「詩」と「哲學」の自得の仕方をしのんでみたいと思ひます。

嘉永三年（一八五〇年）八月廿五日、廿一歳を迎へたばかりの多感なる青年松陰は、陋村、萩の松本村を發して九州遊學の途に上るのです。私はとりわけこの頃の松陰が無性に好きです。遠路を遠しとせず、心の赴く儘に小倉、佐賀、大村、長崎、平戸、天草、島原、熊本、柳川、久留米等の旅程を健脚で歴訪、十二月廿九日に帰宅してをります。この間に認めた紀行文が『西遊日記』として現在に傳へられてゐます。三十歳で生涯を閉ぢた松陰の年譜を御覽いたゞくと判ります通り、廿代後半を殆ど幽囚の身に過した松陰にとりましてその前半生の五年間は、恰も後の幽囚を予感してゐたやうに祖國の各地を普く訪ねてゐるとも言へるのです。

ところで、當時の徳川時代は同時代のヨオロッパの文明國に勝る程の知識人口の層がありま

したし、賢者は江戸に集中してゐる譯ではなく、全國津々浦々に學を講じてをったのです。従つて學に志す俊秀は自然遊歴の旅を試みて、己が志を鍛練するといふ次第でした。だが、藩外への留學は、その滞在期間がやかましく、とりわけ家督を繼いでゐる者には、容易に許可は降りないのが實情だったのです。松陰自身もその一人であり遊學の許可を貰ふのは並大抵のことではありませんでした。「藩臬嚴重なるに羈絆せらる。」（『葉山鑑軒に與ふる書』嘉永二年）と自ら申してをりますやうに藩の允許を得るまでいぶん難渋したやうであります。

さてかうした經緯を経て勇躍出發する松陰の胸には、二つの目的が秘められてゐました。一つは、平戸を訪ね、山鹿流兵學の宗家の一人山鹿萬介並びに以前から欽慕してゐた佐藤一斎の高弟葉山左内（號を鎧軒といふ）の門を叩くことであり、今一つは、吾國が唯一海外に窓を開いてゐた長崎に赴いて是が非でも動乱する海外諸邊の事情を自分の眼で具さに調査したい、といふことです。この燃えるやうな期待感に胸を弾ませ乍ら、松陰は『西遊日記』の序にかう書きつけてをります。

道を學び己れを成すには、古今の跡、天下の事、陋室黃卷にて固より足れり。豈に他に求むることあらんや。顧ふに、人の病は思はざるのみ。則ち四方に周遊すとも何の取る所ぞと。曰く「心はもと活きたり、活きたるものには必ず機あり、機なるものは觸に従ひて發し、感

に遇ひて動く。發動の機は周遊の益なり」と。西遊日記を作る。（『西遊日記』一序）

松陰は「自己一身を鍛へるといふ方策としては、自分の部屋にあって先賢の書を徹底して讀破してゆくことで充分である。この基本的な地道な勉學を離れて他に何を求めるといふのか。だが思ふに、人はこの地道な勉學の世界にゐて遙かに天下を想ふ心の働きをしないやうだ。さういふ停滞した精神の病に陥つたままで、徒らに師や友を求めて四方に遊學したところで一體何が得られるといふのか」と先づ自問してをります。たしかにそれは一理ある、だがさうはいつでも心中やはり已むに已まれぬものがあるのだ、松陰はさういふ己れの發心を書き記すのです。

「心はもと活きたり」、心といふものの本然の姿は生きて働くところにある、生命の躍動する姿こそ心ではないか、と松陰は喝破するのです。生命感あふるゝ心の活動には、必ずや「機」、人生のチャンスが訪れる筈だと言ふのです。否、チャンスといふものは、與へられるものではない。心の躍動の中におのづから生れるものだと言つてもいゝでせう。心がピチピチと躍動さへしてゐれば、手應へある物に觸れた瞬間人生は大きく勇躍する。さういふ予感を籠めて「機なるものは觸に従ひて發し、感に遇ひて動く」と信じて已まないのです。ですから松陰にとって、この遊歴の眞意は、新奇の學問を他郷に求めるといふことではないのです。學問以前の、學問に生命を與へる心情の豊かな「發動の機」を周遊によって體得するといふところにあるのです。



それこそ周遊の最大の益だと言つてゐるのです。

學問とそれを支へる心情が乖離する危さ、そのことを松陰は一番想つたのでありますまいか。學問が活學問となるもならぬも一に懸つて「觸に従ひて發し、感に遇ひて動く」己が心の發動次第である。かくして嘉永三年八月廿五日の早朝、初秋の澄み透つた大氣を胸に吸ひ込み乍ら獨りの青年は、一步を踏み出したのだと思ふのです。

さてかうした松陰の初志は九州滞在中見事に稔つてゆきます。こゝでは精しい消息は省きますが、二人の傑物との出會を通して松陰の發動の機をみたいと思ふのです。

山坂嶮岨の地を越えて平戸に着いた松陰は、旅装を解く寸暇も惜んで宿願の葉山佐内（鎧軒）訪問を果し、平戸滞在中足繁く通つてをります。「鎧軒先生を訪ふ」といふ一篇の漢詩に松陰の心情が見事に表現されてゐます。

經を説き史を論じ又兵を談ず 着實の工夫細評を得たり

侍坐端なく閑話久し 月輪來り照らす此の心の明

（「西遊詩文」）

宿願の師に見えた静謐な感動は、詩句の隈々に確かに鳴つてゐますね。「侍坐端なく閑話久し」、鎧軒先生の傍らに親しく坐して學問の在り方を淡々と語り過す一刻、まさに松陰の歡びを聴く思ひです。「月輪來り照らす此の心の明」、師と語らふうちにいつしか明月が秋の夜空に

間近く昇り静澄な吾が心を照してゆく。美しい詩情を湛へた言葉ではありませんか。「發動の機」を求めた松陰は、「侍坐端なく閑話久し」といふ貴重な體驗を得る。といふより「發動の機」なるものが松陰にこの上もない體驗を與へたと言ふ方が正確かも知れません。それは何も松陰だけに限るものではない筈です。「侍坐端なく閑話久し」といふ師との交流は、時代を越えて在るべき眞實の學問の原型ではないでせうか。

かうして松陰は師弟の交流を結び、果敢なる研鑽を積み乍ら予定外の熊本へ足を延ばします。この熊本の地で終生の友宮部鼎藏と邂逅することになるのです。松陰はこの初めての出會ひの心持をかう綴つてをります。

十二月十二日晴。池部に至る。宮部來る。相伴ひて莊村に至る。談話深夜に至る。是の夜、月明朗、単行して清正公に詣づ。豪氣甚し。宿に還れば人定しづまる後なり。（『西遊日記』）

實に簡素な日記ではありますが、宮部鼎藏との初對面の様子が行間に立ち現れてくる感じがです。宮部鼎藏は松陰と同じく山鹿流兵學の師範で、質實醇厚で義に勇む卅歳の士でした。この後江戸にて再會し生涯の深交を持つ二人の男の初見は此處に始まってゐるのです。松陰は、この日を迎へる迄、同學の友とかくも意氣が溶け合ふ鮮烈な經驗はなかつたでありませう。打てば響くが如き談論風發する様、それはまさに魂の呼應する世界だつたと思ふのです。ふと氣

づくはすつきり更けてゐた。別れを告げて戸外に出ると寒月は皓々と輝いてゐる。高鳴る昂揚抑へ難く、自然清正公の廟所に詣でる。その道すがら沸々とこみ上げてくる胸の高鳴りを「豪氣甚し。」と言ひ表してをります。凍てつく眞冬の夜氣の中を歩む松陰の體內は眞赤に熾おこった炭火の如く滾たぎつてゐたことでありませう。己が心の本然の姿をその儘發露せんことを願ひ、つひに千載一遇の「發動の機」に立ち合へた歡び、その明朗な歡びの聲が、實に簡明な言葉にはちきれんばかりに含蓄されてゐるではありませんか。

「宿に還れば人定る後なり。」、止宿に戻ると、ものみな寢静まり寂として聲なし。邊りは深閑としてゐる。だが床に就いても松陰の胸中には、魂と魂が交流し合ふ内的體驗の鼓動がびんびんと反響してゐた筈です。

青年松陰は、この初の九州遊歴によって學問知識の獲得ばかりではなく、出發に際して自ら誓つた通り、吾が心が「觸に従ひて發し、感に遇ひて動く」様をまさまさとみたことでせう。一旦發動し始めた活きた心の躍動はやむことなきつねりとなつて一筋の道を開いてゆくことになる。さういふ意味で、この「發動」實驗の旅は松陰の人生を人生たらしむる一里塚となるのです。

私は、こゝで、皆さんに向かつて、松陰に習へ、と構へて言つてゐる積りは毛頭ございません。たゞ、本合宿研鑽の主頭として掲げる「學問」「祖國」「人生」といふ退り引きならぬ課題もそれに取り組む自主主題との中に「心はもと活きたり。」と翻然として自覺し得ねば、課題



が熟す機は見えて來ないではないか、と思ふのです。合宿への參加動機は各人各様に違ふでせう。違ふのが當然でせう。だが如何なる參加動機であれ、申込書を認める時の胸の奥には、何かを求めようとする一種の發心と予感が兆してゐた筈だと思ふのです。勿論不安もあつたでせう。松陰にだつてなかつたとは言へません。併し、多少の不安はよぎつたかも知れませんが、それにも増して鬱勃と發心が湧くからこそ松陰は遊歴の途についたのだし、皆さんは一通の申込書を投函してこの雲仙に登つて來られた譯でありませう。その動機に形を與へたものが、松陰にとつては『西遊日記』の序文であり、四ヶ月の旅程の體驗告白なのです。「心はもと活きたり。」といふ自覺の原型は、すでに皆さんの身體に宿つてゐるのです。この原型を顕在化せしめ形を與へてゆく旅程が、私達にとつては本合宿の日程の一コマ一コマであると私は思つてをります。其處で鎧軒先生に出會ふか、宮部鼎藏を相識るか、一に懸つて「觸に従ひて發し感に遇ひて動く」吾が心の發動にあるのです。

ところで、活きた心といふものは昂揚感だけで満たされてゐるものでもありません。時には挫けて嘆いたり、苦しんだり、はた錯乱したりするものでもあります。だがそれは本來心が生きて動いてゐる紛れもない證左ではないでせうか。さういふ時機は何も私達ばかりでなく、松陰自身にも訪れてゐるのです。たゞ松陰の場合如何なる事態であれ、心が空白になつて了ふことがないのです。つまり空想の世界に心を委ねることだけはしないのです。常住坐臥、

具體的課題の前でのみ嘆き苦悩し喘ぐ、それが松陰の人生なのです。さて、さういった内心の千變萬化する流動のいや果てに如何なる發見をするのか、しばらくみてゆきたいと思ひます。

年の瀬もいよいよ押し迫った十二月廿九日に帰萩した松陰は、程なく「軍學稽古のため江戸差登され候」といふ辞令（嘉永四年正月廿八日付）を受けます。願つてもない藩費による江戸留學が決定したのです。嘉永四年（一八五一年）三月五日、藩主參府に扈從して萩を發ち、四月九日江戸に到着してゐます。爾來櫻田の長州藩邸を居所と定めてすさまじいばかり刻苦勉勵に寧日なく努めてゆきます。經學、兵學の師についての聴講、輪講は月に三十回、その上月二回藩主へ進講、さらに同藩同輩の爲に大學論語の會讀を主宰し、或は再會した宮部その他の同志と兵書會讀研究會を開く、亦一方では劍術や馬術にまで手を染める有様で、家兄梅太郎に宛て、「何分會を減じ候はではさばけ申さず候。」（五月廿日付）と書き送る程の實に猛烈果敢なる獅子奮迅ぶりでした。

併し、學に努めれば努める程、松陰の眼には、「江戸にて兵學者と申すものは噂程には之れなき様」（六月二日付家兄宛書簡）に映じて來るのです。六月下旬に至りますと、「江戸の地には師とすべき人なし。」（友人中村道太郎宛書簡）と斷ずるやうになり、九州遊歴の折の、あの澎湃として湧いた感奮は見る影もなく、寂寥とでもいふべき心境に達してをります。

そしてつひに「方寸錯乱」の事態に立ち至るのです。八月十七日付で家兄に宛た書簡にその

苦惱の様子が有りありと綴られてゐます。一部抄録（抽出）してみませう。

是れ迄學問<sup>と</sup>逆も何一つ出来候事之れなく、僅かに字を識り候迄に御座候。夫れ故方寸錯亂如何ぞや。

先づ歴史は一つも知り申さず、此れを以て大家の説を聞き候處、本史を讀まざれば成らず、通鑑<sup>つうかん</sup>や綱目<sup>きやうもく</sup>位にては垢ぬけ申さざる由、二十一史亦浩漭なるかな。頃日<sup>このころ</sup>とぼとぼ史記より始め申し候。——（中略）——

矩<sup>のりかた</sup>方も兵學をば大概に致し置き、全力を經學に注ぎ候はゞ一手段之れあるべく候へども、兵學は誠に大事業にて經學の比に非ず。且つ代々相傳の業を恢復する事を圖らずして顧<sup>かへ</sup>つて他に求むる段、何とも口惜しき次第申さん方もなし。方寸錯亂如何ぞや。——（中略）——僕學ぶ所未だ要領を得ざるか、一言を得て而して斯の心の動揺を定めんと欲す。萬祈萬祈。

松陰は萬感の期待を籠めて江戸の多岐に互る學問に、渾身の力で臨んだのですが、とゞの詰り「方寸（胸中）錯亂」の状態に陥つてゆくのです。歴史を首<sup>はじ</sup>め多岐に互る學問を未だ統べ修めることの出来ない喘ぎ、次いで經學との相剋の中で「代々相傳の業」であるところの山鹿流兵學の恢復に専心し得なかつた自省と名状し難い口惜しさ、これら渾然となつた嘆きは、行間から聴こえてくるやうな氣がしてなりません。勿論、松陰の激しい苦惱と動揺の振幅は、たゞ

漫然と坐してゐて生まれ出たものではありません。當代學風の懷に自ら飛び込んで初めて経験する、のるか反るかの土壇場に來たのであつて、放心の状態からはかかる正念場に到達すべくもないのです。

松陰は、初めて見舞つた學問の難局の渦の眞つ只中にゐて、己れの心の動揺をしっかりと見詰めてゐるのです。「方寸錯亂如何ぞや。」と書きつける松陰の心情は、痛覺を伴つて迫つて來ます。無難に難局から身を躲かばす男ではありません。誤魔化すことの出來ない程多岐に互る學問に立ち向かつたからこそ自己一身の危機が到來したのだと言つていゝでせう。敢へて申しますと、「方寸錯亂如何ぞや。」といふ地點に迄至り得ないやうな脆弱な精神では、見えてくるべき筈の「發動の機」はいつかな訪づれることもないでせう。松陰は、「方寸錯亂」の土壇場から眼を反らさず、見据ゑるうちに「僕學ぶ所未だ要領を得ざるか」といふ風に氣づいて來るのです。こゝで言ふ「要領」とは、網の目のやうに込み入る學問百般を巧みに體系化する學問方法だけを指すのではありますまい。それはやはり、學問の勘所と呼ぶべきもの、種々の學問を束ねて活かす求心力の如きものが得たい、といふことではないだらうか。文脈上さう思はれてなりません。「哲學」つまり総合的的人生觀の希求ではないのかと思はれて來るのです。人には危機に陥れば本能的に復原力が働くやうに、學問を深化すればする程、復原力としての総合的的人生觀が自然要請されて來るのではないか。奥田博士の言葉に倣なまつて言へば、「存在の學問」と同時に翻然

として「價値の學問」を自己一身の内部に打ち立てねば人としての本領は完成に向はない、人間らしい生き方は出来ない、と斷じていゝのであるまいか。本合宿がかうやって營まれることになったのも、参加者全員のさういふ眼に見えぬ人間本然の復原力の然らしむるところに依るものと思はれてなりません。

さて其處で松陰は如何なる姿勢をとらうとするか。結びに言ふやうに、「一言を得て而して斯の心の動揺を定めんと欲す。萬祈萬祈。」と願ふのです。錯亂の渦の中で、自分の行く末を截然と示してくれる一言の囁きを聴きとるべく、精神を一點に集中し始めるのであります。松陰は、江戸滞在の數ヶ月、幾多の學問の様子を垣間見たことでありませう。未知の學問の集積をうんざりする程その兩眼に焼きつけた。だがさういふ觀察の初體驗は、刻苦勉強したとはいへ、「方寸錯亂」を齎すばかりとなつた。觀察の學、存在の學といふものは、この男には無縁の筈なのですが、知らず識らずの裡にさういふ態度に陥ってゆき始めてゐた、と言つても過言ではないでせう。識らうと焦る（力む）餘り「觀察」の傾向のみに走つて了ふ。これでは駄目だ、といふ意識を、松陰の人間としての本能が目覺めさせるのです。この瞬間、「西遊日記」に自ら誌した序をはたと思ひ出したかも知れません。「發動の機」それは何處からかそつと囁きかける一言を「聴く」ことだ、聴いてたちまち信ずる、さういふ内的經驗が吾が學問の中心ではないか。勿論松陰は其處迄は言つてをりません。勝手な私の付度に過ぎませんが、さういふ松陰自身の



反芻をこの書簡の餘韻として感じないではをられないのです。

かくして松陰は、再び、「一言」を聴かうとするところに新たな「發動の機」を求めて立上がるのです。その機縁を得たのが、九州遊歴の折り知己となった宮部鼎藏なのです。宮部と共に兵學者として露艦頻りに出没する東北踏査を決意します。「自力遊歴」を藩府に願ひ出て、許可を貰ひましたが、丁度その折、これも江戸滞在中相識った知己江幡五郎が南部藩の内訌で獄死した兄の敵討のため同行を求めて來たのです。三人は赤穂義士討入りの十二月十五日を以って出發の日と約します。ところが松陰は許可は降りてゐるものの關所通過證である「過書」の交付を未だ受けてはゐませんでした。熟慮の末、松陰は脱藩を斷行するのです。當時、脱藩は先づ死罪が相場です。松陰にも藩にとりましても一大事件となつたことは申す迄もありません。この事件の核心を松陰自らかう明かしてをります。曰く、「余は則ち自ら誓ひし所を行ふ。國家に負くを顧みざるには非ず、誠に丈夫の一諾いちだくゆるが忽せにすべからざればなり。」（嘉永五年一月十七日『東北遊日記』と。

非業の最期を遂げた亡兄の仇敵を討たんとする獨りの知己の哀切な迄の眞情に松陰は胸を突かれたのです。千々に亂れてゐた松陰の心の濁りを拂ふやうに知己の語る言葉は鮮烈に響いて來たこととせう。まさしくそれは「觸に従ひて發し、感に遇ひて動く」紛れもない體驗だつたと思はれます。たとひ如何なる處罰が待ち受けてゐようと、この共感に依る「丈夫の一諾」は、

忽せに出来るものではなかつたのです。この時松陰は、區々たる一身の罪を想ふより、「方寸の錯亂」を脱け出してゆく吾が心の「發動の機」に歎びを見出したこととせう。顧みますと、人生には、選擇に迷ひ逡巡する時といふものが誰しもあると思ふのです。ためらひを激しく覺える事態は必ずや訪づれる。併し、どうであれ、自らの責任において選擇の斷を下してゆかねばならないのです。それが、「生きる」といふことではないか。松陰は、その選擇を「丈夫の一諾」に求めたのです。この勁い決斷の意志、それは心の動揺を定める「一言」の囁きを信じたからだとも言ひ得ると思ひます。

かうして松陰一行は相前後して先づ水戸に赴くのです。水戸藩は、二代藩主水戸光圀以來この時の藩主水戸斉昭に至る間、藩主を中心に日本の歴史を明らかにする『大日本史』の編輯を繼續してをり水戸學と呼ばれる國學の中心地でした。亦、當時吾國に迫りつゝあつた列強の波に對して敢然と對處しようとする姿勢が最も強い藩でもあり、諸國有志の士にとつては渴望の地だったのです。松陰はこの水戸に一箇月餘り滞在してゐまして、後に此處での強然な思想體験を回想してをります。

客冬水府に遊ぶや、<sup>は</sup>初めて會澤・豊田の諸子に<sup>いた</sup>躍りて、其の語る所を聴き、<sup>すなは</sup>輒ち嘆じて曰く、「身皇國に生れて、皇國の皇國たる所以を知らざれば、何を以てか天地に立たん」と。帰

るや急に六國史を取りて之れを讀む。古聖天子蛮夷を懾服するの雄略を觀る毎に、又嘆じて曰く、「是れ固に皇國の皇國たる所以なり」と。（「來原良三に復する書」嘉永五年六、七月頃）

「會澤・豊田」と申しますのは、ともに水戸學の中心人物である會澤正志齋と豊田彦次郎を指します。水戸學雙璧の傑物に見えた松陰は、その語る言葉の一言一句に身を乗り出して聴き入ったと思はれます。しっかりと傾聴して松陰は重大な示唆を與へられたと思ひ知った。「身皇國に生れて、皇國の皇國たる所以」を知るといふ大事、自分のこれ迄の學問にはこの大事が缺落してゐたと翻然として悟るのです。松陰は、新たな學問の一つとして水戸學を學んだといふことでは勿論ありません。さうではなく、水戸學といふ學風を素材に乍ら日本が日本たる所以であるところの國柄を學ぶ大事こそ學問の勘所、「要領」ではないか、と駭然として開眼するのであります。

國史に學び、吾國の國柄を知る、といふ事は、自分の正體を知るといふことではありませんか。松陰は、水戸學の傑物と語るうちに、何處からとなくさう呼びかけて來る囁きを、聴いたのだと私は信じます。

私は、松陰の遊歴を素描しながら、「心はもと活きたり。」と信じて遊歴を續けて心蹟百變のいや果に、「學問」と「人生」の要諦である「祖國」への開眼に至る迄の遍歴の一端に觸れまし



た。其處には、感激もあれば錯亂もある、そして、甦る道もあるのです。それは松陰の心のうねりに發してをります。

先程申しました通り、嘉永三年、松陰はこの長崎を訪れてをりますが、その松陰の魂を籠めた遊歴の道筋を、皆さんは今、確かに踏みしめてこの雲仙に辿り着かれたのです。であれば私達も私達一人一人の流儀で吾が心をうねらせながら、私達を拘束する「戦後」から甦る道を求めようではありませんか。

標題の「詩」と「哲學」について不十分な言及になりましたが、「詩」とは、心の發動であり、そこから直下に直叙される言葉であります。「哲學」とは、日本人としての総合的的人生觀だと言っている、でせう。その體現者としての松陰像を皆さんの前に示したといふことを以って本合宿の導入講義に代へさせて戴きます。



知行の誠ならんことを

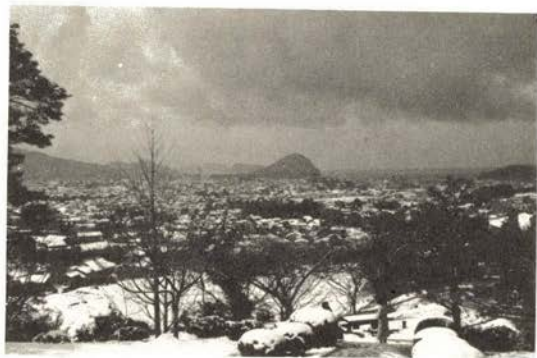
思ふは人の道なり

—吉田松陰を中心に—

亜細亜大学助教授

東中野

修



松陰生誕の地より萩市街遠望

松陰寸描

用猛五回の生涯

至誠の実験

松陰における至誠の解釈

松陰寸描

これからの一時間、「知行の誠を思ふは人の道なり」といふ演題で吉田松陰についてお話をさせていただきます。

幕末の志士として餘りにも有名な吉田松陰については、既に皆さんもよくご存じのことと思ひます。生涯の間に、二十一回、「猛を用ゐる」といふ決意を宣明して、松陰は好んで二十一回猛士と稱しました。猛を用ゐると言つても、それは決して激言することではなかつた。後年になつて松下村塾のかつての塾生天野御民が語つてをりますやうに、松陰といふ人は、決して激言したことのない人でした。そのことは松陰が刑死八ヶ月前、安政六年の二月に野山獄の中から諸友宛てに書いた次の書簡によつても知られます。

△平時喋々たるは、事に臨んで必ず唾。平時炎々たるは事に臨んで必ず滅す。（中略）八十送行の日、諸友劍を抜く者あり。又聞く、暢のぶ夫そ江戸に在りて犬を斬るの事あり。是れ等の事にて諸友氣魄きはく衰す恭てつの由を知るべし。僕今死生念頭全く絶えぬ。頭斷場へ登り候はば血色敢へて諸友の下にあらず。然れども平時は大抵用事の外一言せず、一言する時は必ず温然和氣婦人好女の如し。是れが氣魄の源なり。慎言謹行卑言低聲になくは大氣魄の出るものに非ず。▽

佐世八十郎（のちの前原一誠）の送行会するとき諸友のなかには劍を抜いたものがゐた。又高杉晋作は江戸にゐたとき劍を抜いて犬を斬ったといふが、これらのことから諸友の氣魄が衰へ切つてゐる事が知られると言ふのです。何でもない時に劍を抜いて怪氣炎をあげてゐる者、或いは大いに喋りまくつてゐる者、彼らはいざといふ時になつたら必ず言葉が出なくなつて、自滅する。さうでなく、平時は用事の外は一言も話さず、話す時は和氣藹藹と穏やかに婦人の語るやうに話すのでなくて、いざといふ時に大氣魄は出るものではない。そのやうに、松陰は、つね日頃から自己を見つめてゐた人でした。慎言謹行卑言低聲——言を慎み、行ひを謹しみ、辞を低くして、力まず語る、といふ言葉から、一般に考へられてゐる松陰像とは全く違つた和やかな松陰の姿が偲ばれて参ります。

猛を用ゐるとは激言することではない。とすれば、松陰の言ふ用猛とは一體何を指すのか。推し量つてみるに、用猛とは、己むに己まれぬ至誠の發現を、自己の全責任において、いのちを賭して遂行するといふ意味に理解してよいでせう。松陰は三十年の生涯の間、しかも二十代の青年時代に、五回、猛を用ゐたと言つてをります。この五回の用猛は、松陰の人となりを知る上で、大事なことと思ひますので、簡単に辿つてみたいと思ひます。

## 用猛五回の生涯



第一回目の用猛は、松陰二十二歳の年の嘉永四年（一八五二）十二月、東北亡命の敢行でした。肥後藩士で無二の親友であった宮部鼎蔵と東北地方の視察旅行を計画し、藩庁の許可も得られ、仇討に行く南部藩士江幡五郎の同行願ひをも快諾して、赤穂義士が本懐を遂げた十二月十五日を出発の日として準備は万端ととのった。ところが、出発直前となっても過書（関所通行許可書）が国元から届かない。過書なしに出発すれば亡命の罪に問はれるといふことを百も承知の上で、十二月十四日、松陰は江戸櫻田の藩邸を亡命し、東北遊學に旅立つのです。「男子の一諾は、ゆるが忽せにできない」といふ一念が、松陰をして、さうさせたのでした。松陰の亡命を耳にした藩主毛利慶親は、松陰の將來に大きな期待を寄せてゐただけに、國の寶を失ったともりました。松陰は、東北亡命の罪により、土籍

を削られ、世禄を奪はれ、浪々の身となりますが、藩主から特に十ヶ年の諸國遊學の機会を与へられることとなります。

第二回目の用猛は、松陰が再び江戸に上って十日が経った嘉永六年（一八五三）六月三日、ペリーの率ゐる米艦四隻が、浦賀に突如現はれ、日本国中が大混亂に陥ったその時、江戸に出て来てゐた松陰は、目前の急に對する建策を「將及私言」と題して上書する。これは藩主の上覧に達することを得、そして又、幸にして罪を問はれることもなかった。しかし松陰は、いかなる罪に問はれようとも甘んじて受けるといふ覺悟のもと、黙止しがたい微衷を上書する舉に出たのでした。

第三回目は、その翌年の安政元年（一八五四）三月、松陰二十五歳の時のことです。アメリカのペリーがやって来て大騒ぎとなつてゐるが、日本ではワシントンがどこにあるのかさへ誰も知らない状態であつた。この時、松陰は、日本の将来のために欧米の事情——地理、人物、思想學術を明らかにしておきたいと願つて、同じく長州人で一歳だけ年少の金子重之助と共に、国禁を犯して、下田沖からペリーの軍艦に乗り込むのです。が、ペリーの拒絶にあつて、失敗に帰します。二人は自首して、最初江戸の伝馬町の獄に、次いで松陰は萩の野山獄に、重之助はその隣りの岩倉獄に移されるのですが、重之助はこの時の苦しい獄中生活の中で程なく病死してしまふ。松陰は、その死を深く悼むと共に、亡き友とあの世で再会しても恥かしくな



い生き方をして立派に死なうと心ひそかに深く期するところがあつたのです。そして又、国禁を犯して海外渡航の挙に出たからには必ず死罪になると覚悟してゐたにもかかはらず、入獄するだけで済んだので松陰は、これ以降の人生を「人生の餘命」と考へたのです。かうして松陰は二重の意味で、よく死なうとして生きることになるのです。すなはち下田踏海以降の松陰は、死所を求めるといふ一念を離れたことがなく、つねに、その一念に生きたのです。

第四回目の用猛は、安政五年（一八五八）松陰二十九歳の時のことでした。この年六月、大老の井伊直弼は、京都の孝明天皇の反対を押し切つて、日米通商條約に違勅調印し、次いで、反対する志士の弾圧にとりかかった。世に言ふ安政の大獄の始まりです。この時、松陰は、直弼の片腕として活動した老中の間部詮勝（まなべ、あきかつ）を要撃しようといふ計画するのですが、それを案じた藩当局の手で、この年の十二月、再び野山獄に、入獄させられるのです。勿論、刑期などはなかつた。従つて一生を獄で過して終るかもしれない。死刑を求めて生きてゐた松陰ですから、罪名のないまま入獄することは餘程無念だつたに違ひない。時事を憤慨する余り、入獄して凡そ一ヶ月の或る日、絶食して死なうとしてゐます。

第五回目は、安政六年（一八五九）五月、幕府は、取調べたいことがあるので松陰を野山獄から江戸の伝馬町の獄に移すやうにと長州藩に命じます。この時、江戸に送られた松陰は、幕吏の取調べに対し、猛を用ゐて入至誠の実験といふ行動に出る。前置きが少し長くなつてし

まひましたが、この時の松陰の心事を偲んでみたいといふのが、本日の主題であります。

### 至 誠 の 実 験

話が相前後してしまひますが、先程申しましたやうに、この年（安政六年）正月二十四日、松陰は時事に憤慨するあまり、同じく時事に憤慨して汨羅の淵に身を投じた屈平に倣つて、絶食しようとしたが、父母の諫めにより、絶食を思ひ止まりました。絶食して死ぬのは勿体ない、自分は不忠重罪の者ではあるが、かゝる時勢切迫の節に一命を捨てて御用に立ちたい、ただそれだけが自分の望みであると言つて「愚按の趣」（正月二十八日）といふ一文を認めました。松陰は東送の幕命を耳にした五月十四日の夜、この「愚按の趣」を取り出し、これに付け加へることは何もない、「一身を以て国難に代らねばならぬ事」はつとに決心してゐるところであると追記するのです。

同じその夜、獄中から妹に宛てた手紙の中でも、「此の度仮令一命差捨て候とも、国家の御為に相成る事に候はば本望と申すものに候」と心の内を語ります。そして更にその翌日、父杉百合之助に宛てた手紙のなかでも、「此の度の東行は国難に代るの存念に御座候へば、兼ての狂悖には随分出かしたると存じ奉り候。尤も幕吏対訳の事も御座候はば、正義と至誠とを以て

百折挫せず、機に随ひ応接<sup>つかまつ</sup>仕<sup>つかまつ</sup>るより外<sup>ほか</sup>之れなく、全く評<sup>けつちよく</sup>直<sup>ちよく</sup>激烈を宗とする訳には之れなく候」と決意の程を語るのです。

松陰は、江戸で取調べを受けるため幕吏と向ひ合ふその時を、絶好の好機到来と見た。では幕吏に対して何をしようといふのか。

「愚按の趣」にも書かれてゐるやうに、かねてから松陰は、国中の人士が諸侯を恐れ、諸侯は幕府を恐れ、幕府はハリスの恫喝と虚言の前に墨夷を恐れてゐるといふ日本の現状を、深く憂慮してをりました。もし幕府が、墨夷に降参してしまへば、国中がそのあとに従つて降参するより外はない。それは二千年来独立不羈を保つて来た日本の滅亡を意味する。従つてハリスの虚言を論駁する方法を、幕府に、指し示して教へる事が、日本を、滅亡の淵から救ふこととなる。幕府は好んで京都の朝廷に対立してゐる訳ではなく、ハリスに取りこまれてゐるだけのことなのだから、幕府が「対策一道」などに基いて、墨夷を逐一論駁すれば、墨夷は返す言葉もなく、必ずや信服して引き下がる筈だ。さうすれば、「神州中興の大機会」が到来するであらう。

しかし、そのためには、幕府から懸けられた疑ひを晴らして身を守るといふ努力は、一応横に置いておかねばならない。成る程、幕疑を晴らす事と、幕府に当今急務の大計を語つて、よく理解してもらふことが、同時に行へれば、それに越したことはない。しかし、幕吏と対する

時間は限られてゐることだらうし、何よりも二兎を追ふのではなく、一事に集中しなくてはならない。そこで、松陰は、一身を捨てて、幕吏に当今急務の大計を語る道を、猛を用ゐて選ぶのです。そして、その結果、一命を落すことになつても、一身を神州中興のために役立てることが出来るのであれば、却つて立派に死所を得ることが出来るから、「本望」だと言ふのです。そのことを、松陰は、「国難に代る」といふ言葉で表した、と思ひます。

先程申し上げましたやうに、用猛とは激言することではなかつた。松陰は、「評直激烈を宗とする」、即ち幕府の違勅調印を、悪として激しくあばきたて、自らは正しとするやうな、さういふ道は、自分は選ばないと言ふ。そして、どんなことがあつても正義と至誠とを以て、臨機応変に対処する、それが自分の生きる道だと宣言するのです。勿論松陰は、この時初めて、至誠といふ言葉を発したのではない。至誠といふことは、かねがね松陰が説いて来たところですから。松陰の説いた至誠と言へば、私には直ぐ、「議論浮泛はんにして、思慮粗浅、至誠中ちちよりするの言に非ず」(安政三年「久坂生の文を評す」とか、入江杉蔵に宛てた手紙のなかの「杉蔵往け。月白く風清し、飄然ひょうぜん馬に上りて、三百程、十数日、酒も飲むべし、詩も賦かすべし。今日の事誠に急なり。然れども天下は大物なり、一朝奮激の能く動かす所に非ず、其れ唯だ積誠之れを動かし、然る後のち動くあるのみ」(安政五年七月)といった比類なく美しい文章が思ひ出されて参ります。此の文の、何時いつ何度い口くちずさんでも尽きることはない味はひは、又、至誠といふ言

葉に寄せる、松陰の、尽きることのない深い思ひをも表してゐるやうです。さて東行の報せを受けてから二日経った五月十六日の夜、訪ねてきた門下生に対して一文を示して、この「至誠」といふ言葉を彼等の心に刻みこむのです。

△此の別れ、想へば當に永訣なるべし。已むなくんば、余に一の護身の符あり。孟子云はく、「至誠にして動かざる者は未だ之れ有らざるなり」と。其れ是れのみ。諸友、其れ是れを記せよ。其の他千萬の言語は、八十一鱗に至ると雖も、苟も一睛を点ずるに非ずんば、遂に是れ眞に非ざるなり。▽

この別れは、想ってみると、まさにこの世における永久の別れとなるであらう。江戸に赴いた以上万事休するといふごとき事態に直面するであらうが、その時には自分には、自分の身を護ってくれる護身のおふだがある。それは孟子の「至誠にして動かざる者は未だ之れ有らざるなり」といふ言葉だ。この言葉が、自分を守ってくれるであらう。友よ、どうか、この言葉を、肝に銘じてほしい。龍は、八十一の鱗を持つと言はれるが、その八十一の鱗を描いても最後に、龍の睛を描かなければ、眞に生きた龍とはならない。それと同じやうに、至誠といふ肝腎の一点が不十分であつたならば、たとへ千語万語の言葉を連ねたとしても、決して眞実の生きた言葉とはならないのである。——これはまさしく松陰の諸友に残す遺言であつた。



ところで、孟子の「至誠にして動かざる者は未だ之れ有らざるなり」といふ一句は、どのやうに現代語に訳せばよいのか。とりあへず、「善を明らかにし心力を尽して、人に接し物事に対処してゆけば、それを見て心を動かさないやうな者は未だかつて一人もゐない。誰しも心を動かすのだ。」と解釈しておきます。ただここで一寸脇道にそれますが、この解釈、乃至は現代語訳について一言補足しておきませう。と言ひますのは、私達は、或る言葉を、別の言葉に置きかへることで、知らず知らずのうちにその言葉の意味内容が理解できたといふ錯覚に、陥りがちです。今の場合でもさうでして、孟子の言葉を、別の言葉に置きかへると、それで孟子の言葉が解ったといふ氣になつてしまふ。しかし、古典の言葉は、どのやうに現代語に直さうとも、完璧に表現しきれないで取り残されてゐるものが必ずあるはずだ。古典の言葉にはどのやうに解釈されようと、少しも動じない美しい姿がある。汲めども尽きない、その美しい言葉の姿は、言はば靈峰のごとく、私達の眼前に聳そびえてゐる。一人一人の私見といふやうなものは一まず横に置いて、その高く聳そびえる美しい言葉の姿を、倦うむことなく眺めつづける事がなくては、古典は決して真の姿を私達の前に示さないのせう。これは、孟子、松陰の言葉に限らず、古典といはれるものは、凡てさうだと言へるのです。

扱て本題に戻ります。松陰は東送の知らせを受けて直ぐ、この「至誠にして動かざる者は未だ之れ有らざるなり」の一句を書簡や詩の中にくりかへし引用して心中の決意を表明してをり

ます。といふことは松陰の内部にはそれほど、強く決意するところがあつたといふことになりませう。その中で特に大切な一文、門下生小田村伊之助に與へた一文を読んでみます。

△小田村伊之助に與ふ

至誠にして動かざる者未だ之れ有らざるなり。

吾れ学問二十年、<sup>よほひ</sup>齡亦而立<sup>じりつ</sup>なり。然れども未だ能く斯の一語を解する能はず。今茲<sup>こゝ</sup>に関左の行、願はくは身を以て之れを驗<sup>たぬ</sup>さん。乃ち死生の大事の若<sup>ごと</sup>きは、姑<sup>しばらく</sup>これを置く。己未<sup>きび</sup>五月。▽

ここで松陰は、次のやうに言ふのです。私は学問を始めて二十年、年齢も又而立<sup>じりつ</sup>の年の三十歳となったが、「至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり」といふこの言葉は、未だ身を以て知ることが出来ないでゐる。そこで、江戸に行つて幕吏の取調べを受けるこの機会を利用して、どこまで至誠が身についてゐるか、実験してみたい。そして、どうすれば取調べを無事に切り抜けることが出来るかといふ事については、一まず横に置いて考へないことにしたい。今の自分にとってはどこまで幕吏に対し己が至誠を徹底させることが出来るか、そちらの方が人生の大事だ、と言ふのです。

ところで、文中の「未だ能く斯の一語を解する能はず」といふのは、この言葉の意味がよく理解できないでゐるといふこととは全く違ひます。さうではなく、松陰には、この言葉は人生の



眞実を語る言葉だといふことは勿論わかつてゐる。しかし、そのわかつてゐるといふことは、あくまで自己内心の問題にすぎないのであって、例へばここで松陰の至誠に触れて幕吏が身も心も揺り動かされたといふ現実の証左がなくては、この言葉を本当に自分のものにしたといふことにはならないのではないか。現実の証明なしに、身を以て知ることなしに、ただ觀念として之を理解してゐるだけでは一体どんな意味があらう。身を以て知って始めて、孟子の言葉を「解」したと言へるのです。しかし今はそのやうに身を以て知るに至つてゐないのだから、「解する能はず」と言ひ、身を以て験したいと言つてゐるのです。

松陰にとって、知るとは、知識として知る事ではなかつた。書を読むとは、知識を得ようとして読むことではなかつた。さうではなく、書を読むとは、身を以て知り、身に沁みて知ることであつた。身に沁みて、身を以て知ることが本当に知ることであつた。そして、そこから、「信」が生じるのです。

昭和四十九年のこの合宿教室で小林秀雄先生が「信ずることと知ること」と題してお話しされた折、信ずることがないから知が浅薄になるのだと仰言つたことが、今でも忘れられませぬ。私はこのやうな言葉に接してゐると、お前は生きる上でどうでもよい知識には満腹してゐるかもしれない、しかし、いったい何を、身に沁みて、身を以て知るに至つてゐるのか。さう松陰からきびしく問はれる心地がするのです。ここで少し本論から外れますが、私の貧しい経

験を申し上げておきたいと思ひます。

明治天皇に、「いかならむことある時もうつせみの人の心よゆたかならなむ」といふ御歌があります。この御歌には、難解な理論めいたものはなく、うつせみとなむを除いては平易な言葉ばかりです。うつせみは人にかかつていく枕詞です。なむとは、何々であつてほしいといふ意味です。そこで、この御歌の意味は、どのやうな事があつても、人の心よゆたかであつてほしい、となります。ごく平凡な御歌です。しかし、私は、二年前の合宿教室の折、この御歌に触れた時、人の心がゆたかであるとはどういふことなのか、全然解つてゐないといふことを痛切に思はされて何か茫然としたおもひにとらはれました。そして又、私といふ人間は心がゆたかなのか、貧しいのかと自問しつ、私の心のあまりのまづしさを知った時、全身の力が抜けていくやうなおもひでした。私はそのあとどうすれば心がゆたかになるのか、心がゆたかとは何なのかと、毎日毎日考へました。さうして、今日に至つてゐます。今にして思ふことですが、人々は心がまづしいと身に沁みて知つて始めて、そこから離れようとする意識的な努力も生じ、その努力の積み重ねにより、心の貧しさから、離れていくことが出来るのではないでせうか。私たちは心の豊かさを求めることは出来ない。ただその、心の貧しさから離れていかうとする姿を人が見たとき、人は、心がゆたかだと感ずるのではないでせうか。キリストも「幸なる哉、心まづしき者よ、天国は汝らのものなり」（山上の垂訓）と言つてをります。私はこの

やうな経験から、或る一つのことを身に沁みて知る、身を以て知るといふことがどういふことなのか、実に僅かながらわかつてきたやうなおもひがいたしました。

扨て再び本題に戻ります。松陰は、江戸の伝馬町の獄で幕吏に取調べられた折、かねてから「暗誦」してゐたといふ「対策一道」に基いて、アメリカの使節との外交交渉の在り方を説くのですが、反対者を徹底して弾圧してゐる幕府は、聞く耳をもたず、松陰を死地に措くのです。次に掲げる一文は、刑死を知った松陰が、刑死一週間前（安政六年十月二十日）に、父、叔父、兄に宛てた文字通りの永訣の書です。

△平生の学問淺薄にして至誠天地を感格すること出来申さず、非常の変に立到り申し候。嘸御愁傷も遊ばさるべく拜察仕り候。（中略）幕府正議は丸に御取用ひ之れなく、夷狄は縦横自在に御府内を跋扈致し候へども、神国未だ地に墜ち申さず、上に 聖天子あり、下に忠魂義魄充々致し候へば、天下の事も余り御力落し之れなく候様願ひ奉り候。△

冒頭の一文は、淡々としてゐて、しかも又なんと雄勁な文であらうかと思ひます。「人々を」ではなく「天地を」と言つて、至誠天地を感格すること出来申さずと一気に読み下してゆくその表現は、壯嚴であつて、しかも雄渾です。神国日本はまだまた地に墜ちない、祖国日本の国家生命は無窮であるといふ確かな手応へと、死してもなほ国家の永久生命のなかに生きつづけていく

のだといふ決意が、この雄渾な表現を生んだのでせう。しかし残念なことに、松陰の至誠は、遂に幕吏の心眼には映じなかつたやうです。しかしその代りに松陰の至誠は、松下村塾の塾生の心を、天地に轟く雷鳴のごとくに、揺り動かしたのです。直接幕吏の心を動かすことは出来なかつたものの、松陰の至誠は、久坂玄瑞や高杉晋作、小田村伊之助といった松下村塾の門下を通して遂に天下をゆるがして明治維新を招来する、かくして明治維新の原動力を生み出したのも、それは実に、松陰の至誠であつたのです。

### 松陰における至誠の解釈

松陰は、下田踏海に蹉跌して野山獄に入った時、獄囚と共に『孟子』を輪講しました。その記録が今日『講孟劄記』といふ不朽の大著となつて残つてゐます。そこで、最後に孟子の原文と、松陰の解釈とを、照し合はせながら、ここで問題になつてゐる「誠」の内容についてもう少し考へてみたいと思ひます。以下は孟子の「離婁上篇第十二章」の一部です。

△善に明かならざれば、其の身に誠ならず。是の故に誠は天の道なり。誠を思ふは人の道なり。至誠にして動かざる者は未だ之れあらざるなり。誠ならずして未だ能く動かす者はあらざ

るなり。》

次の文はこの孟子の言葉に対する松陰の解釈の一部です。

《我れ誠敬を尽せば、上其の誠敬を信じ、我れ忠貞を致せば、上其の忠貞を信じ、凡そ吾が心を尽す所、上皆是れを信ずれば、吾が心皆上の心と流通して、吾が心は上の物となり、上の心は又吾が物となる。》

「誠敬」とは、真心を以て事に当り敬ふこと、「忠貞」とは、まめやかで志操の正しいといふことです。松陰は、私が上（国君）を敬ひ真心を尽して事に当れば、それに対して上は、真心を尽して事に当ってゐる私を信じ、私が志操正しく忠実やかに事に処すれば、それに対して上は、私を、志操正しく真剣であると信じてくれるにちがひない。かうして凡そ私が心を尽して行ふことは、すべて上の信ずるところになるといふことになれば、上の心と私の心は、つねに眼に見えない流れをなして通ひ合ひ、その結果、私が心に思ふことは、又、上の思ふところともなり、上に心に思ふことは、又、私の思ふところともなる、と言ふのです。これは、孟子が「善を明かにし心力を尽して、人に接し物事に対処する時、それを見て心を動かさなかつた者は、未だかつて一人もゐないのである」と言つてゐる事の大切な脚註をなしてゐると思ふのです。すなはち孟子



が「至誠にして動かざる者は未だ之れあらざるなり」——心を動かさない者は一人もゐない、誰もが心を動かすのだと言ふところの其の心を動かすといふのを松陰は、上に信じられて、上の心と私の心が通ひ合ひ、私の思ふところはまた上の思ふところとなり、上の思ふところはまた私の思ふところとなる事だ、と説くのです。相手の心を動かすといつても結局は信じ合ふ者同士が、心を通はせ合ひながら、語り合ふこと、それが前提でなければなりません。すなはちその語らひの中で、相手の言った言葉に、ハッと心を動かされ、今まで気づかぬでゐた大きなことに、気づかされることになる。さういふ心の動きの中で相手の心は自ら動く。こちらが相手を信じて語り、相手もこちらを信じて語る、其処において始めて、物事は動き始め、さうして始めて、事態は、好転していく、松陰はさう言ふのです。心を動かすといふその前にお互ひに信じあふ世界がたしかめられなければならないといふのです。

しかし、私達の現実には、信ずることよりも信じないことの方が多い。いつの間にか疑ひ、相手を責めることが、しばしば起る。しかし、相手を責めることができるほど自分は正しいのかと自らを振り返る時、不思議と心が通ひ、心が働く。心と心が通ふ時、実に多くのことに気づかされる事も、又私達の現実ではないでせうか。

孟子は、「善に明かならざれば、其の身に誠ならず。是の故に誠は天の道なり。誠を思ふは人の道なり」と言ひ、松陰はまた別の箇所「誠を思ふは知行の誠ならんことを思ふなり」と



も言つてゐます。「知は行の本」、「行は知の実」といふのも松陰の言葉ですが、この知と行とが誠であること、それが松陰の切実な願ひでした。私はこの「知行の誠ならんことを思ふ」といふ松陰の言葉に接するごとに、私の心にもまた、物を見る眼とわが身の行ひが、（誠でないからこそ）誠でありたいといふ痛切な願ひがわきおこつてまゐります。そして又、「至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり」といふ孟子の言葉を、反復読誦するたびに、誠でありや否やときびしく問はれる心地がいたします。いづれにしても、物を見る眼と思ひを正して行きたい。それには、己れの信ずる先人の言葉を、信じ合ふ者同士が、心を開いて、読み語り合ふ、そのやうに高い精神に学びながら自己の体験を点検していくことが大事です。その繰り返しなのだから、物を見る眼と身の行ひが、正され鍛へられたものとなつていくのではないか。そのやうな思ひで、私は、この孟子と松陰の言葉を眺めつづけてをります。

国家は“文化”の単位である

國民文化研究會理事長・亞細亞大學教授 小田村 寅二郎



萩（指月）城跡

『世のため、人のため』

「修身」「齊家」について

「治国」「平天下」について

シドニーの海軍葬

「國家」の定義

「天皇」について

“世のため、人のため”

今日で合宿も四日目を迎へたわけですが、これまでにいろいろの方々が、いろいろな角度から、国とか、日本とかいふことについて私たちの心をどのやうに深めてゆくべきかといふことをお話いただいたやうに思ひます。ところで私はどちらかといふと、さういふ心の中身だけではなく、日本の国とか社会とかいふものを考へてみる、さういふ角度から入ってまゐりたいと思ひます。まず題名について一寸申し上げておきますが、「国家は文化の単位である」といふ題の中の「文化の単位」といふのは「文化を作る具体的母胎」といふ意味に解釈していただいいていかと思ひます。「国家は文化をつくる具体的な母胎である」、さういふことでお話をすすめてまゐりたいと存じます。

そこでお手許にさしあげたレジюмеに沿ってお話し申し上げたいと思ひますが、まずその最初のところを読んでみませう。

「一、一昔前までの日本の親たちは、自分の子供たちに、次のやうに論じてゐたものである。『おまへも、しっかり勉強して、立派な人物にならなければだめだよ。私がいふ立派な人物と

いふのは、自分のことばかりを念頭におかずに、いつも、世のため、人のためになるやう心がけ、子供の時からそれが実行できるやうになることなのだ」と。

これは所謂学歴のある家庭だけではない。どんな身分の低い庶民の家庭でもみんな言はれてきた言葉でした。要するに皆が自分のことだけを念頭に置かず、世のため人のためになれる、さういふ人になってほしいといふねがひが、全国のどの家庭にも漲ってゐたのです。そして家庭の中心には、必ず神棚と佛壇があつた。神棚には天照大神が祭られてゐるその横には天皇様や皇后様の新聞の切り抜きがあつた。佛壇にはいふまでもなく、御祖先の戒名がずっと書かれてゐる。それが当時の人々の精神生活の中心であつたし、それを中心に平和な家庭が営まれてきたのです。すなはち家といふものは単なるマイホームではなかつた。もっとひろやかな、日本人と一緒に住み合ふ社会、日本といふ国の平和を念ずるといふことと、わが家の幸福を祈るといふことが同じこととしてうけとめられ、営まれてきた。それが日本の家庭でした。さういふ家庭であつたからこそ、親が子供に教へていくのに、世のため、人のためになつてくれよといふ言葉が自然に出たのでせう。自分のことだけを考へる人間になるやうでは、この神棚と佛壇を大切にしてきた家風には合はない。さういふのが、これまでの日本の家庭でした。

「二、私はこの『世のため』『人のため』といふこの日本語が大変好きである。この言葉に籠められてある意味が、すばらしいと思ふから。——『世界人類のために』とか、『真理の探求を目指して』とかいふ言葉に較べて、何と活き活きしてをり、何と判り易い言葉か——」

『世界人類のために』などといふ言葉はたしかに美しい。しかしそれは言葉だけのことで、それと毎日の学生生活とどう結びついていくのか、誰にもわからぬ。ただたてまへとしてさう言っているだけでせう。そんな一見綺麗事にうつる言葉と違って一昔前の、『無学な親たちが、子供たちに伝えてきた』『世のため』『人のため』になる人間になれよといふ言葉の方が遥かに力がこもってはゐませんか。実感がこもってはゐませんか。さういふ言葉が長い間日本の家庭に伝えられて





きた。しかしそれが今ではなくなくなってしまつてゐるといふことを考へてみる必要があると思ふのです。その言葉が生きてゐた家庭、さういふ家庭には秩序があつた。秩序の中に安らぎがあつた。それを失つたところに教育の問題を中心に現在さまざまの問題が発生する原因があると思ふのです。

そのやうなことを言へば、逆コースだと非難する人がゐる。だがこのやうな秩序をとりもどし、家庭に平和をよみがへらせることがどうして逆コースでせう。

なほ、「世のため」といふ場合の「世」といふのは、横にひろがる世界といふ意味のほかにも一つ一つのニュアンスがある。すなはちそこには過去と未来がはいつてゐるのです。これまでこの日本に生きてきた人を、さらにこれから生まれてくる子孫、さういふ過去から未来にわたる人間の生活全体を含んでゐる。いはば立体的な時間の深さが含まれてゐる。横も縦も、人間が生きてゆくすべての場を含んだすばらしい言葉、それが「世」なのです。

### 「修身」「齊家」について

「三、古代シナの儒学の最も基本的な書物『大学』（論語、孟子、中庸とならぶ四書の一）の中に「修身、齊家、治國、平天下」といふ言葉がある。これは人生と社会の関連を簡潔に言

ひ得てゐる表現であり、そして永遠の眞実を衝いてゐる言葉でもある。身↓家↓国↓天下（世界）の相互関連について。」

この「修身、齊家、治國、平天下」といふ言葉はすでに御存知かと思ひますが実にすばらしいと思ふ。人間として生きてゆくためにはまづ身を修めなければ話になりますまい。だがその次にはその身が属してゐる家が齊（整）つてゐなければ、本当の活動の場は与へられないのでせう。次にそれが国、天下に及んでゆくわけです。ただここで言はれる「国」とは西暦紀元前の中国のことなので、中国の各地にあつた小さな国のことをさしますし、「天下」とは中国全体を指したものでせうから、原典の意味からはすこし無理かと思ひますが、ここでは国を現在の国家、天下を世界全体をさすものとして考へてゆきたいと思ひます。すなはちいかに家が整つても、自分が生活する社会全体としての国が治まつてゐなければ毎日不安に襲はれて能力も發揮出来ない。そして国が治まつてゆけば隣国との関係もスムーズに行くし、そして天下も平らかになる——これが「大学」といふ書物に示された社会の平安への道の教へなのです。この身↓家↓国↓天下といふ物事の順序は何時、いかなる時代においても變ることはありませんまい。非常に平凡な教へのやうですが、まさに「永遠の眞実を衝いてゐる」と思ふのです。

さて最初の「身を修める」といふことについてはここで改めて申しあげるまでもないことで

せうから、次の家の問題から少し考へてみたいと思ひます。

「四、『家』とは自己が生れ出た所、同時に死して帰り逝く所。『個』なる人間は、この世に実在し得ないことに気がつけば、人の、生”（生活も、生き甲斐も、生涯も）は家と離れてはあり得ないことに気づく。その、家”とは、不動産としての家屋敷を指すよりも、人間としてもっと本源的な血縁関係としての、親子・兄弟姉妹・その他肉親関係の中を往き来する、心”の、交はり”を指す。その、交はり”のある所に、家”が実在し、その、家”のために、人々は自分の生き甲斐を結実させる。」

最初の「家とは自己が生れ出た所、同時に死して帰り逝く所」といふのは当然のことのやうですが、この当然のことをしっかり心にとめていただきたいのです。その痛感がなければ結局、家といふものの意味は理解出来ないと思ふのです。

次に書いてをります。「『個』なる人間はこの世に実在しない」といふのは、前にもお話したことがございますが、個人といふのは言葉の上では存在する。しかし実在はしてゐないのです。すなはち私といふ一個の人間は親の前に立てば子供、妻の前に立てば夫、先生の前に立てば生徒といふやうに、他との関係が無数に自分の周辺に、くもの巣のやうにつながつてゐる自分が

あるだけです。昨日小堀先生が「個性といふものはあるけれども、個人はない」とおっしゃいましたが、私も全くさう思ふのです。

さういふことに気付いてくると、家といふものが大変な重みをもって、自分の生のよりどころとして感じられてくるのではないでせうか。勿論そのやうに感じられる家といふものは建物でもなければ、土地でもない。その土地や建物の中で、お互ひに心を通はせ合ひ、譲り合ひしながら生活する。その心が往き来する、交はりのある所に、家”は実在するのです。そしてその、家”のために人々は自分の生き甲斐を見出すのです。家の者皆が無事であるやうにと祈りながら、人々は家路につくのです。古来人間が大切にしてきた家といふのは決して家屋敷などといふ目に見える、有形的なものではなかった。ただど現在、人々は目に見える家をもってゐる。しかしここで申し上げてゐる、家”を失った人がいかに多いか、さういふ人にはもう一度人間に戻ってくれ、そして、家”を自分達の心の中に取り戻してくれと言ふ以外にはない。人間に戻るのには誰の力でもない。自分の力で、自分の意志で出来るのです。

### 「治国」「平天下」について

「五、この『家』の独立と平安と存続を願ふ所に、『家』の集团的、合目的的の社会としての

「国家」が生れ、人々は「家」に対する心を、そのまま「国家」の独立と平安と存続を願ふこととなる。「家」をないがしろにする人間を、人でなし」とさげすむならば、「国」を思はぬ人間もまた、人でなし」とさげすまなくては、をかしいことになる。」

それぞれの人々が「家」の独立と平安と、それが何時までも存続することを願ふ、その気持が一つに集って、その目的が達成出来るやうな社会を作らうと思つた時に、国家が形成されることになったのです。従つて国家に対しても、家の独立と平安と存続を願ふ同じ心が強く働くのです。従つて国をないがしろにする人は、家をないがしろにするのと同じく軽蔑されなくてはならないはずでせう。ところが家を粗末にする人は世間から無条件に非難されるのに、国を粗末にする人、国なんか壊してもいいのだといふやうなことを言ふ人については、それは自由だと言ふことになつてゐる。実におかしいと思ふのです、今の時代は。

皆さまはこの合宿に來られて、国のことばかり問題になるなと思つて反撥を感じてをられる方もあるかと思ふ。しかしもし家のことが問題になるなら、みんなすつとはいつてこれると思ふのです。だが国のことになるとさうはいかない。そこがをかしいと思ふのです。国を思ふことも家を思ふことも実は元來全く同じことなのです。

一体国といふのは元來惡に近いもの、国家は権力だと講義してゐる大学の先生も多い。たしか



に政府は権力をもつてゐる。権力をもたなければ行政秩序は保たれないでせう。しかし国家はちがふ。国家とはもつと内面的な、いはば生命体なのです。その国家を管理するのが政府です。だから政府は権力を握つてゐる。しかし国家は違ふ。その二つの違ひはこの際はっきりと心にとどめておいていただきたいのです。

「六、そこで、最後に残る問題は、『国』と『天下（世界）』との関係である。戦後の日本を風靡した社会思想は、この点をめぐつて大変に混乱を呈して今日に至つてゐる。——『国』を大切に思ひ過ぎると、国家主義、超国家主義といふ『国家エゴイズム』に陥るぞ、——との憂慮が風靡したからである。ではこれをどう説明すればよいのか。」

ここに書いておいた憂慮、国を大切にするのはいいが、あまり大切に思ひ過ぎると超国家主義になりはしないかといふ不安、皆さんすべてさういふことをお聞きになったことがあると思ふし自分でもかう考へてをられる方も多いと思ふ。それともう一つ、ここには書きませんでした。国といふのはやはり世界の一部ではないか、従つて国のことに力を入れれば世界のことがおろそかになりはしないかといふ不安もあると思ふのです。たしかに世界は国よりも大きい。だから人々は家とか国を飛び越えて、一番大きな世界に直結するといかにも生き甲斐のある、

有意義な人生を送ることが出来るやうな気持ちになるのでせう。小さなところにかかづらはないで、安心して生きてゆける、さう思ふのでせう。たしかに素朴な思考の中ではさうかもしれないけれど、現実には決してさうではないといふことを申し上げたいのです。

「七、『家』の集团的、合目的的社会としての『国家』であるのに対し、諸『国家』の同時的存在を意味するに過ぎないのが『世界』である。『家と国』の間には、『生命的一体感』といふ紐帯が実在するのに対して、『国と国』との間、ひいては、『国と世界』との間には、『相互理解と互譲と忍耐による共存意識』が実在するにとどまる。二つの間に本質的な相違があることに気づく必要がある。」

大体おわかりいただけると思ふから詳しくは申しませんが、『家と国』との関係は、同じやうな目的があるために、『生命的一体感』で結ばれてゐると考へられますが、『国と国』の間にはそのやうな一体感はあり得ないのです。もつとも宇宙から人類を滅ぼさうとする攻撃が始つたといふやうなことになるれば人類を守るために、人類が結束するといふ事態が来るかもしれないし、その時には国を越えた生命的な一体感ができるかもしれない。しかし少くとも現状では、自分の国は人類のために存在するのだと思つてゐる人もゐるかと思ふが本気でそんなことを考



へてゐるのは、日本の一部進歩的文化人だけではないか。さうではなく、どの国の人でも、自分の国が存在することによって、はじめて世界人類に貢献することが出来ると考へてゐるはず。であれば自分の国がなければ貢献する道そのものがなくなってしまう。国を基準にしなれば世界の役には立たない。それは人がゐなければ家も成立しないし、家がなければ国も成り立たないといふのと全く同じことです。ありのままに考へてゆけばさうなるのが当然ではないでせうか。

『大学』の最後の言葉の「平天下」はそのやうに積み上げてゆけば天下の人々が平和に生きてゆく基礎が出来るといふ意味でせう。だから「天下を平らかにす」とよむのです。武力で「天下を平げる」ではありません。だから世界が平和であるためには、まづ日本といふ国が厳然と独立心を守つてゐなければいけないのです。

### シドニーの海軍葬

ではここで国の独立と、独立した国同士のつきあひ方はどうあるべきかといふことについて、過去の例を一つ申し上げませう。それがレジュメの八、に書いてゐるところです。

これは昭和十七年五月、すなはち大東亜戦争が開始されてよりほぼ半年経ったところですが、

日本の特殊潜航艇が三隻、一隻に二人乗り組むわけですから計六人、遠くオーストラリアのシドニー港湾の入口東八マイルの地点で潜水艦より進発、湾内に潜入するのです。そのうち一隻（中馬兼四大尉と大森猛一等兵曹）は、湾の入口に張られてゐた防潜網に引っかかってしまひ、発見されるおそれがあるために自爆、次の一隻（伴勝久中尉と芦辺守一等兵曹）は湾内潜入に成功、碇泊中の軍艦クタルを撃沈しますが、遂に発見され湾外にのがれたあと沈没してしまひます。三隻目（松尾敬宇大尉と都竹正雄二等兵曹）も湾内で爆雷攻撃をうけて自沈、結局戦果としてはそれほどのもはなかつたのですが、実はここで特筆すべきことがあるのです。それは、その時シドニー地区海軍司令官にムアヘッド・グールド少将といふ方がをられたのですが、この人はこの特殊潜航艇の行動に対して大変に感動して、もってオーストラリアの軍人の範となるべき人々であると考へ、湾内で自爆した二隻を引き揚げて四人の遺体を収容、その四人の日本海軍軍人に対して、オーストラリア海軍葬をもって弔つたのです。葬儀は四人の戦死後十日目の六月九日、シドニー近郊のロックウッド・クリマトリアの齋場で厳かに執行されますが、その時四人の柩は丁寧に日章旗で覆はれ、中立国代表としてスイスの総領事もこれに列席したと伝えられてゐます。

なほその海軍葬の状況がラジオで実況放送されたのですが、その録音を、戦後「特潜会」の方々が入手され、それに日本語の訳を吹きこまれたテープがあります。そのテープを私どもの

会の理事であられる、高千穂歯科大学の教授、名越二荒之助先生がこの合宿に持って来てくださってゐますので、ここで皆さんにお聞かせしたいと思ひます。

どうかこのテープをお聞きになつて、世界中の人々が国を単位にして生きてゐる、それが世界の事実であつて、国といふものにすべての人間の生命のよりどころを求めてゐる、しかもその国を愛する心をお互ひに外国の人がはつきりと讃へあふことが出来る、さういふすばらしい心のむすびつきが現実としてあつたのだ。そこに、国と世界を結ぶ最高の姿があるといふことをしっかりと心にとどめていただきたいと思いますと思ふのです。

○

编者註・ここで講師は「特潜会」編集の「海軍葬」のテープを会場に流された。七分程の短い時間ではあつたが、参加者一同強い感動に誘はれたのである。葬儀の状況は次々にアナウンサーによって説明されていったが、その中に次のやうな言葉があつた。

「祖国日本のためにいのちを捧げた四人の勇敢な日本軍将兵の火葬の儀式が、間もなく行はれようとしてゐます。私たちは日本の政策をにくんでゐるのです。けれども、己れを捨てて祖国のために勇敢に死んだ人々は、世界のいづれの国でもほめたたへられてゐます。式場には、オーストラリア海軍の高級将校、従軍記者、新聞記者、それに一般市民も参列してゐます。そして、いづれも勇敢な四人の日本軍将兵に国境を越え、民族を越えた尊敬の念を拂つてゐます。」

「指揮官の号令によって、発射隊は正確な步調で、しづしづと柩のあとに従ひ、柩は今斎場に安置されました。今、柩は日本の国を象徴する日の丸の国旗で覆はれました。」

「今、四つの柩が徐々に運び出されました。参列者は黙祷を捧げてゐます。四つの柩はまだ日の丸の旗で覆はれてゐます。日の丸の旗で覆はれてゐる、それ以外、この簡素な儀式については、何も言ふことはありません。」

「指揮官の最後の号令で、発射隊は死者に対して最後の敬礼を捧げます。『発射隊止まれ』の号令がかかりました。儀仗隊は銃剣を付けました。発射隊は空に向けて空砲を発射して、死者に最高の礼を捧げました」

○

録音が終わったやうです。私どもはわれわれの同胞勇士を、かくの如く、戦争のさ中に丁重に弔ってくれたオーストラリアの海軍の人々に、心からの感謝と敬意を拂ふとともに、深々とした「人間愛」とも名付けるべきものが、この世に厳然として実在してゐることを教へてもらつたやうな氣さへいたします。現代の日本の風潮の中では考へられないやうな世界がある。私もこのお話を伺ひ、名越さんからこのテープを拝借して聞かせていただいた時、私達はこのテープ一つを聞く機会に恵まれただけでも、この誤つた価値観の混乱の中から自らを救ひ出さなければ、戦死した六人の方にも申しわけないし、オーストラリアのグールド少将や、この御葬式をして

いただいた方々に対しても顔むけ出来ないのではないかと思ひました。どうか国と世界との大小、価値関係といふものに、いつまでも迷ひつゞけることなく、世界を大切にする道は、国を大切にすること、その延長の中にしかないことをしっかりと心に刻んでいたゞきたいのです。

### 「國家」の定義

ではなぜさうなったのか、レジュメの十、で書いてゐるのはその原因の中にはこれまでの学問が犯してきた誤りがあったのではないかといふことです。特に「日本国」について考へる場合には、「國家」の定義そのものを正していかなければならないのではないか。それについては、三年前のこの合宿教室で私がお話したところですが、『日本への回帰—第十六集』の中に収録されてをりますので、それをもう一度ここで読ませていたゞきたいと思ひます。章名は「国を成立させる三つの要素」となつてをります。

「私たちは『国』といふことをいま一度考へ直してみなければいけないと思ふ。通常、国家といふものは、土地と人民と主権の三つの要素から成り立ってゐると言はれます。」

この国家の三要素といふのは皆さまざまお習ひになつたでせう。

「しかしこれでは具体的にこの世に生き続けてゐる国家そのものを理解するにはまったく不



充分ですし、それに固執しますと、間違つた国家観におちいると思ふのです。勿論国家成立の三要素、それはそれで間違ひではないでせう。しかしこのやうな、どの国にもついても通用するやうな普遍概念だけで、具体的な、生きてゐる国そのものを理解することは到底不可能です。もしこの普遍概念に固執すると、結局どの国も単に同じ資格で平等にならんでゐるといふことになってしまふ。かうして一つの国は地球上にたくさんあるうちの一つといふことになる、とすれば人々がその部分的なものに命をさゝげるといふのはばからしいと考へるのも無理もないといふことになるのです。」

この土地と人民と主権の三要素といふのはいふまでもなくヨーロッパの学説ですが、ヨーロッパは御存知のやうに国家興亡常ならずいつも動いてゐる。その中で国家を定義するにはあらゆる條件を捨象しなければならぬ。かうして最大公約数的な條件としてさきほどの三要素が残つたわけでせう。だからそれはそれとして大切にしていければ、そんなところで止まつては、本当の生きた国家像は生まれてこない。学問は中途半端に終るのです。それで私は国家の定義については次のやうに訂正すべきだといふ提言をしてゐるわけです。

「私はそのやうな三要素ではなく、「国家とは一定の土地、一定の言語、一定の伝統、といふ三つの要素から成る」といふやうに考へるべきではないか、そしてその各々の「一定」の内容について正しい認識が立てられなければならない。さうしてはじめて国家といふものの本当の



姿が見えてくるのではないか、さう思ふのです。」

このやうな定義はヨーロッパの国々すべてに直ちに適用することは出来ないかもしれない。しかし日本といふ国を定義づけるためにはさうしか考へられないのです。では日本の国について、この「一定」の内容とは何か、それはこの原文の『日本への回帰―第十六集』の七十四頁以下をあとで御覧になつて下さい。ともかくこの「日本列島」といふ一定の土地を離れては、この風土と別々になつてしまつては、日本といふ国家は成り立たないし、日本語を失つてしまへば、それはもう日本といふ国とは全く別ものになつてしまふ。「伝統」の場合も勿論同じです。この土地と言語と伝統、この三つの要素によつて、日本といふ国は成り立ってゐる。そのやうに「国家」の定義を改めていかなければ、日本といふ国は決して見えてこない。土地と人民と主権といふ、どこにでもあるやうな普遍概念では日本といふ国の存在は決してわからないと思ふのです。では次にいきませう。

「十一、「政府」は、権力機構」を持つが「国家」は、生命体」として受けとるべきもの。「国家」は、文化」の単位であるといふ意味。文化国家日本」などといふ自認のしかたの間違ひ。「文化」は国家なき所に生れ出ることはないし、発展する見込も立たない。「祖国日本」が守り続けられる所にこそ、「文化」が息づく源泉がある。戦争をしないことになつたから、文化国家日

本”になつたなどといふ物の言ひ方がいかに浅薄であることか。」

「政府」は権力機構をもつてゐるけれども、「国家」は「生命体」として受けとるべきもの、といふことは先ほど申し上げました。次の「国家」は文化の単位である」といふこと、それは文化は国家がなければ続かないといふことです。しかし例へば古代ギリシャのプラトンやアリストテレスといふやうな人々の学問は、古代ギリシャは滅びても、現在まで残つてゐるではないか。だから国が滅びても文化は残るといふ人も多い。だがそれには一つの飛躍があるので、古代ギリシャが滅びたあと、ギリシャの思想や学問を高く評価する民族が現はれた。さうしてギリシャ文化はそれらの民族や国家によって現代に伝はつたのです。その民族なり国家なりがなかつたなら、古代ギリシャの文化は現在に伝へられることはなかつた。勿論古代のギリシャといふ国が現在まで生きつゞけて、その中にプラトンやアリストテレスの文章が継承されてきたとすれば、もっとすばらしかつたのでせうが、それは残念ながら出来なかつた。しかしその古代ギリシャのすばらしい思想や学問は、イギリスの思想の中に、フランスやドイツの学問の中に織りこまれて今日に来てゐるのです。ギリシャ文化といふのが、さういふ媒体なしにスーッと現代に伝へられたのではない。あくまでも国家を離れて文化は考へられないのです。

次に書いてをります「文化国家」についてはレジュメの文章ですでおわかりだと思ふが、

戦争するのをやめて、これからは「文化国家」として生きてゆくなどといふのは、ジャーナリズムの上に沢山見られる発想ですが、文化の意味が実にいい加減に使はれてゐる。驚くほど浅薄な思想だと思ひます。しかもこの「文化国家」といふやうなつまらぬ限定をしたために、国家の意味が実に稀薄になって、自分のいのちを捧げる対象が空漠なものになってしまった。さういふ悲劇を、現代の日本は経験しつつあるのです。祖国日本といへばいいものを、どうして文化国家などと言ひかへるのか、むしろ問題は逆で、「祖国日本」といふ言葉の中にこそ、文化がある。そこには祖先のいのちがこめられ、すばらしい先人の言葉がひそんでゐて、真の日本の文化がたゞへられてゐる。しかし「文化国家」といふ言葉の中には実は文化など一かけらもないのです。

### 「天皇」について

最後にその日本文化のいはゞ中核ともいふべき天皇の問題について申し上げておきませう。実は昨日の夜、慰霊祭が行はれましたがその折に高木先生が祭文を御朗読になり、加納先生が明治天皇と今上陛下の御製を拝誦されました。私はこの御製を聞いてをりまして、加納先生が実にすばらしい御製をお選びになつたと深く感動いたしました。

御製を味はふといふことは、天皇といふことを理解し、納得するのに非常な近道なんですね。天皇制などといふことについていろいろ議論する必要はない。天皇といふ方は多勢のわれわれの祖先が大事にしてきた方なのです。従って私達が私達の祖先を信じることが出来さへすれば、天皇を大切にすといふことは当然生れてくるのです。私達の祖先を信じるか否か、問題はたゞそれだけです。迂余曲折、あれこれ考へて、すべて納得出来れば、それから天皇については心を定めようなどと考へるのは、いかにその人が自分の心を過信してゐるか、実に傲慢だと思ふのです。そんな、過信するほど、われわれの値打ちは高くはない。私たちはもっと謙虚でなければいけない。謙虚に、天皇のお詠みになった御製などを繙いてゆけば、天皇のお心がきつとわかつてくるはずです。そして天皇のお心のやうな心をもつことがいかに難しいかといふことがわかつてくるのです。歴代の天皇さまは、



「私」といふことを考へられない。無私といふこと、それが天皇家の伝統です。御家風なのです。さういふ家風を持ち得てゐる家庭はわれわれ国民の中にはあり得ない。従つて御製などを通して、そのやうな天皇家の精神的努力のあとに目が向いてゆけば、天皇の問題を理解する道は必ず見出せるはずです。

さて加納先生の拝誦された明治天皇の御製の二首目。

### 落葉有聲

なかなか風のたえたるよはにこそおつる木の葉の音はきこゆれ

「なかなか」といふのはかへつてといふ意味、風が絶えた、ぱたつととまったさういふ夜こそ、かへつて、木の葉の落ちる音がはつきりときこえてくる。風がなければ木の葉は落ちない、それは理屈にすぎません。大自然の微妙な動きの中では風が止った時にかへつて落葉の音がきこえてくる。その実にこまやかな御心配りが一首の中に見事に表現されてゐると思ふ。この御製は明治三十九年の作です。明治三十九年といへば、日露戦争の直後、多くの国民が戦死したわけですが、天皇はそれら戦死者のこと、その遺族のことに、非常にお心を悩まされた時期でもあったのです。従つて非常に淋しい御気持にさそはれることもおありだったでせう。さういふ御気持の中で、天皇は落葉の音に耳を傾けられたのではないか。本当に心がすがすがし



く、澄んでゐる時、心が静まった時でなければ詠むことの出来ない御歌だと思ふのです。よほど静かな世界でなければ誰も気づかない。さういふところで一枚の木の葉が、生命が尽きて枝からひそやかに落ちてゆくのです。

明治天皇はこのやうにかすかないのちをいとほしまれる数多くの御製を残していらっしやいます。

さまざまの蟲の聲にも知られけり生きとし生けるもののおもひは

秋の夜耳を傾けてゐると虫の音が澤山聞えてくる。それがみんなそれぞれ違ふ音色で鳴いてゐるのですね。さういふ虫の音を聞いてゐると、一つ一つの虫がどんなおもひをいだいて生きてゐるか、それが強く天皇のみに感じられてくる。虫は時が来れば死んでゆくでせうが、生きてゐる間はさまざまなおもひで生きてゐる。その虫のいのちにじっと心を傾けてをられるのです。かういふ御製を読んでゐると、明治天皇はものごとを画的に考へようといふこととはおよそ正反対な世界を、人間観として持ってをられるのがよくわかると思ふのです。

だがこのやうな御製を味はっても、味はふ心が閉されてゐるために、そこに開かれてゐる作者のひろやかな精神世界にたどりつくことが出来ない人が実に多いと思ふ。本当に情ない、残念なことだと思はれます。加納先生の拝誦された御製の四首目



思往時

をりをりにおもひぞいづる國のため心くだきし人のむかしを

これは日露戦争の始まる前、明治三十六年の御製ですから、明治維新とか、日清戦争のころなどを偲ばれたものでせう。あの時、一緒になって國のことを考へてくれたけれどもその人達も或いは年老い、あるいは世を去ってしまった。そしていよいよ天皇御自身の肩の上に、國の難事を担っていかなければいけない、さういふ時が来る。その重さをいましみじみと感じてをられる。さういふ御歌だと思ひます。五首目は、明治三十七年、日露戦争の始つた時の御歌です。

をりにふれて

戦ひのにはにたふれしますらをの魂はいくさをなほ守るらむ

國のために戦つて死んで行つた人は、命は絶えても、その魂はお國を守つてゐてくれる、日本人はすべてさう信じてきたのです。現代の人々はそれを迷信とか非科学的なことだといふかもしれない。しかし最初に申し上げたやうに個なる人間は實在しない。私達はあらゆる関係の中に生きてゐるといふことに気づけば、すでに「生きてゐる」といふことばそのものが僭越な

ので、「生かされてゐる」としか言ひやうがない、それが我々の生の実態なのです。さういふことに気づけば、今は亡き人の御霊が自分たちを見守つてゐてくださるといふことを思はずにはをられないやうになるのではないでせうか。

そのやうに思ふ努力も経験もしないで、魂の存在は目に見えないから信じない。それを信じるのは未開で、野蛮だといふ考へ、それが科学的精神といふ言葉で今の世にまかり通つてゐますが、それは科学でも何でもないと思ふのです。科学といふものは物事の眞実を正確に観察する、そこに科学の精神があるとすれば、なき人の御霊を思ひ、亡き人を夢にまで見てこれを偲ぶといふ人間の眞実を謙虚に認めることこそ本当の科学的精神ではないか。申し上げたいことはまだ澤山ございますが時間がまゐりましたので最後に夜久正雄先生が、お手もとにさしあげた『国民同胞』(二百六十二号)の「日本の国の国がらについて」といふ一文の中に書いてをられる言葉を引用して終りにさせていただきます。

「私は、心の中で何故、天皇をお守りする人が絶えないのだらう?と考へてみたのである。答は、簡単なことで、天皇の御存在を多くの人々が、いのちをかけてお守りするのは、それだけの価値が、天皇にあるといふ事実があるからである、といふことになる。さうか!と私は思った。天皇といふお方の御精神、御行動の事実が尊いから、天皇をお守りする人々が絶えないので、先づあるものは、天皇のお心なのだ。その事実なのだ、わかつたのである。

われわれは、その事実を知らなければならぬ。それは勿論知り尽すことのできる世界ではないが、知る努力が無ければ、知り尽すことができないといふこともわからない。知り尽すことができないから、信じるといふことが生まれるのである。いづれにしろ、事実を知り、事実を信ずるといふことであって、まづあるものは事実である。信念といふことも、イデオロギーを信ずるといふのでは、いつまた変わるかもわからない。本当の信念といふのは、事実を信ずることなのだと思う。「事実」に「随順」するのが「信念」である。」



いのち蘇る日を！

福岡県立修猷館高等学校講師

小柳

陽太郎



松本大橋より松本川の上流を望む

平和は最高の価値であるか

歴史を裁く目

「第二現実」

占領政策の後遺症

「神道指令」の意味するもの

天皇の御製にみる神々の世界

いのち蘇る日を！



平和は最高の価値であるか

いよいよ合宿のスケジュールも終りに近づいてまゐりましたが、私たちはこれまで多くの先生方から実に感銘深いお話を承ることが出来ました。とりわけ今日の午前中、小田村先生の御話の中で、シドニー湾に突入して戦死した日本海軍の将兵を、オーストラリアの人々が丁重な海軍葬をもって弔ってくれた、その葬儀の状況を皆さんテープでお聞きになりましたね。あのテープを耳にして、皆さんもきつと強く心を動かされたことと思ふ。たゞこんなことを言ったら叱られるかもしれないけれど、そのやうに感動して聞いてゐる心の隅っこで、皆さんはかうお考へにならなかつたらうか。「その話はすばらしい。だがそれと戦争の問題とは別だ。その話にどんなに感動しても、それは決して戦争を肯定することであつてはいけない——。」

たとへ今の時点ではさう考へられなくても、学校に帰つてシドニー湾の話を友達に話すやうな場合、さういふことを一言つけ加へないと、何か不安な気持がするといふことはないでせうか。「この話は実にすばらしいと思ふ、しかし、だからと言って勿論僕は戦争を肯定してゐるわけではないんだ」——、戦争のことを話すときには私たちの心の中にはいつもそのやうな「こだけり」があるのではないか。もしさうであれば、私たちはその問題をさけることなく、その

「こだはり」と真正面から向きあふべきではないか、さういふところから私のお話をはじめさせていたゞきたいと思ひます。

さて人々はよく、このやうに「戦争を肯定する」といふことばを常に非難すべきこととして使つてゐる。だが、一体それでいいのか、そのことをまづ考へてみたいと思ひます。一般には、「戦争を肯定する」といふことを何か事があればすぐ戦争といふ手段に訴へるといふことだと考へてゐるやうです。しかしそれなら当然「肯定する」といふことは許されないことだし、誰だって戦争を「肯定する」人はゐるはずで、しかしそれは「肯定する」といふ言葉の濫用だと思ふ。正しい意味で「肯定する」といふのは、戦争といふことがどんなにいけないこと、避くべきことだとわかつてゐても、人間世界にはどうしても避けることの出来ない事実だといふことを認めることだと思ふのです。すなはち戦争といふものを人生の事実として肯うけふことだと思ふのです。私はさういふ意味において戦争を肯定する。そしてすべてはそこからはじまると思ふのです。丁度そのことは人間にとって「死」はいとふべきことだが、私たちはこれを避くべからざる事実として肯ふ、それと同じことなのです。

勿論、戦争と死とは違ふといはれるかもしれない。たしかに「死」は避けられないが、「戦争」は相手の國のいふことに一切さからはず、相手のいふなりになりさへすれば、死とちがつて避けることが出来るのです。相手の属國に甘んじさへすれば戦争といふ手段に訴へる必要は



全くないのです。だが、私達が一個の人間である以上、決してさうはならないはずだ。人間であるといふことは一つの価値を心の中にいだくといふことです。そのやうな価値をもってゐれば、時によっては、いのちを賭してでもそれを守らなければいけない場合がある。すなはち戦争といふ手段に訴へなければいけない時が必ずあるはずです。私たちがそのやうな価値をもってをり、そこに人間として最後の存在理由があるとするとするなら、戦争がこの世の中から消滅するといふことは決してあり得ないのです。戦争を

さけるために全力をそゝぐべきは勿論ですが、そのことと戦争の存在そのものを否定することとは違ひます。

平和を守ること、それが最高の道徳だと考へてゐる人が多い。しかしそれは誤りです。平和は最高の価値ではありません。場合によっては平和を犠牲にしても守らなければいけない価値がある。戦はなければいけない時がある。それが人生です。だが今の時代

はそのことがわからなくなってしまつてゐる。

戦争反対のシュプレヒコールの中で、人々は自分たちにとって一番大切なものは何か、自分のいのちよりもっと大切なものは何か。それを全く見失つてしまつてゐる。さういふ風潮が現代の思想界、教育界を風靡してしまつてゐると思ふのです。

かうして日本人は、遠い昔から日本民族が大切にしてきた「価値」を見失ひ、さういふ「価値」を重んじた時代の思想——歴史を見失つてしまつたのです。だからもはや人々は「歴史」に帰らうとはしない。戦争を「肯定してゐた」戦前の世界に帰らうとはしない。しないどころか絶対に帰らないといふことを前提にしなければものが言へない、さういふことになつてゐるのです。

### 歴史を裁く目

さてレジュメの最初には「歴史を裁く目」といふ項目をかゝげましたが、いま申し上げたやうに人々は歴史をふりかへる時、そこに帰つてゆく喜びを味はうとするよりもまづ、冷い目でそれを裁くことからはじめようとするのです。歴史とは過去の人々とともに喜んだり悲しんだりする場所ではなく、常にこれを断罪することによつて現代を正当化するさういふ場所になつ

てゐると思ふのです。そこでは常に現在が過去より高い位置にあり、現在は過去よりもがよく見えてゐる、そのことが常に前提になつてゐるのです。それが現代の風潮です。ここではさういふ思想の代表的なものとして、フランス文学者として著名な渡辺一夫氏の『きけわだつみのこゑ』の序文をとりあげてみました。

最初に氏は本書が『はるかなる山河に』の統編として出版されたことを紹介したあと、全体の編集方針に関して次のやうに述べてをられます。

「僕としては、全体の方針を肯定し、適切だと思つてゐる、初め、僕はかなり過激な日本精神主義的な、或る時には戦争謳歌にも近いやうな若干の短文までも、全部収録するのが『公正』であると主張したのであったが、出版部の方々は、必ずしも僕の意見には賛同の意を表さねなかつた。現下の社会情勢その他に、少しでも悪い影響を與へるやうなことがあつてはならぬといふのが、その理由であつた。僕もそれは尤もだと思つた。その上僕は、形式的に『公正』を求めたところで、かへつて、『公正』を欲くことがあると思つたし、更に、若い戦歿学徒の何人かに、一時でも過激な日本主義的なことや、戦争謳歌に近いことを書き綴らせるにいたつた酷薄な条件とは、あの極めて愚劣な戦争と、あの極めて残忍闇黒な國家組織と軍隊組織との重要構成員とであつたことを思ひ、これらの痛ましい若干の記録は、追ひつめられ、狂乱せしめられた若い魂の叫び聲に外ならぬと考へた。そして影響を顧慮することも当然であるが、



これらの極度に痛ましい記録を公表することは、我々として耐へられないとも思ひ、出版部側の意見に賛成したのである。」

文章全体は実に謙虚で、戦争のため若いのをさ、げた人々に対して、深い同情を寄せてをられる。たしかに渡辺一夫氏がこの文を書かれた時の心情は決していい加減ではなかったと思ふ。だが一見誠実に見える文章もよく読んでみるとその裏側には、いま自分が拠り所としてゐる考へ方を絶対至上のものとして、そこから歴史を裁く実に冷たい目があることにお気づきになるでせう。輿論をバックにした安堵感があるのか、例へば「あの極めて愚劣な戦争」といふやうな言葉が当然のこととして、こともなげに使はれてゐる。そこには謙虚なポーズとは全く裏腹の、傲慢極りない断定があるのです。だがこれは勿論渡辺さんだけの問題ではない。戦後の教育界、思想界、言論界はすべてそのやうなペースで現在迄つゞいてきてゐるのです。

これが書かれたのが昭和二十四年、越えて二十五年に、小林秀雄先生が『きけわだつみのこゑ』といふ文章を書いてをられます。

「『きけわだつみのこゑ——日本戦歿学生の手記——』は非常に広く読まれてゐるさうであるが、私も一読して成る程と思つた。これは流行のルポルタージュ文学類に容易に認め難い直接に人の心を描へる力があるのである。……私はここに現れた学生達の手記の内容を云々しまい。観察や批判や感情の未熟を言ふまい。彼等を追ひやうた現実条件について彼等が正しい



眼をもつてゐなかつたなどと言ふまい。さういうことを言ふのは正しいやうで、実は少しも正しくないと思つてゐる。これは追ひつめられた者の叫喚でも、うめき聲でもない。覚め切つた緊張し切つた正しい人間の表現である。」

「追ひつめられ者の叫喚でも、うめき聲でもない」といふ個所は明らかに、「これらの痛ましい若干の記録は、追ひつめられ、狂乱せしめられた若い魂の叫び聲」であるといふ渡辺さんの文章と照応してゐる。小林先生ははっきり渡辺さんの文を意識して書いてをられます。なほ小林先生はその翌年、昭和二十六年に『政治と文学』といふ高名な評論を書いてをられますが、その中にもこの書物についてふれられた個所があります。

「前に『きけわだつみのこゑ』に觸れましたが、あの本を読んだ時、直ぐ氣附いたことがあつた。が、言へば誤解されるだけだと考へて黙つてゐた。それは学生の手記に關してではない。編集者達の文化観についての感想であつた。手記は、編集者達の文化観に従つて取捨選択され、編集者達によつてその理由が明らかにされてゐたからである。戦争の不幸と無意味を言ひ、死に切れぬ想ひで死んだ学生の手記は採用されたが、戦争を肯定し喜んで死に就いた学生の手記は捨てられた。……戦犯が死刑になる世の中で、戦歿学生の手記が活字の上で裁かれるなど何の事でもない。それはよく解つてゐるが、そこに何の文化上の疑念も抱かないといふ事は間違つてゐると思ひます。文化が病んでゐるのです。」

非常に謙虚なポーズをとりながら、実に傲慢な目で歴史を裁いてゐる自分に気づかない、さういふ生き方を指して、小林先生は「文化が病んでゐる」と言はれるのです。さらに先生はこの一文を次の言葉で結ばれます。

「編集者達は言ふかも知れない。私達は感情を殺さなければならなかつたのだ、と。進歩的文化の美名の下に、であるか。彼等は、それと気付かず、文化の死んだ図式により、文化の生た感覚を殺してゐたのである。」

彼等編集者の目には善悪の図式がはつきり描きわけられてゐる。戦争を呪ふ者は善、戦争にすゝんで協力する者は悪、——その固定化された図式によって歴史を、人生を見ようとするために、彼らはつひに歴史の生きた姿にふれることが出来なくなつてしまつた——。

小林先生はさらに次のやうに言はれます。「文化を論ずる事を好む人々が、ジャアナリズムの上で、申し合せでもしたやうにやって来た事は、私達みんなが体験した大戦争を、たゞ政治的事件として反省した事だ。……失恋した男が外交の失敗を反省してゐれば、誰にも異様な感を與へるでせう。あれほど歴史の必然といふ言葉が好きだつた知識人達が、大戦争は歴史の偶然だつた様な口の利き方しか出来ないのである。日本人がもっと聡明だつたら、もっと勇氣があつたら、もっと文化的であつたら、あんな事にならなかつたのだと言つてゐる。私達は、若しあゝであつたら、かうであつたであらうといふ様な政治的失敗を経験したのではない。正銘

の悲劇を演じたのである。」

本当に恋に破れた男はあゝすればよかった、かうすればよかったといふやうなことをくよくよ考へはすまい。彼はただ失恋といふ動かすことの出来ない事実の前で、自己に与へられたきびしい運命を甘受する以外にないのです。そこには人生を全力を傾けて生きてきた姿がある。それと同じく、今度の大戦における敗北。それはまさしく「悲劇」と呼ぶ以外に名づけやうがないではないか。日本が経験したのは「政治的失敗」というやうなものではなく「悲劇」だった。「正銘の悲劇を演じたのです」といふことばの意味するものは実に重大です。

## 「第二現実」

「文化の死んだ図式により、文化の生きた感覚を殺す」といふことは、しかし考へてみれば人間の宿命なのかもしれない。たしかに人間はともすればその陥穽におちこんでしまふ。それは人間である限り避けることのできない事実かもしれない。だが、だからこそ、私達はせめてその人間のそのやうな弱点を常に意識しながら生きていかなければならないのです。さういふ意味から、次の竹山道雄先生の言葉は実に示唆にとむといへませう。竹山先生は、さういふ人間の弱点を「人間は世界を幻のやうに見る」と言ふ一文の中で次のやうに述べてをられます。

「人間はナマの現実の中に生きていくのではなくて、彼が思いうかべた現実像の中に生きていく。もし彼がはげしい要求をもっていると彼はこの現実像をたゞ要求に従って構成してそれをナマの現実とつき合せて検討することを忘れてしまう。かくていわば『第二現実』とでもいったようなものが成立する。」

この「第二現実」とはまさしく小林先生のいはれる「文化の死んだ図式」でせう。

「これは映画に似てゐる。すなはち、ある特定の立場から材料を取捨選択してモンタージュしてでき上ったものであり、現実を写しながら現実とは別のものである。」

竹山先生は、この人間の習性ともいふべき、「第二現実」をつくりたがる性癖をたゞいけなしいといつてをられるのではない。ともすればそのやうに動く人の心を直視せよと言つてをられるのです。

渡辺さんは、「あの愚劣な戦争」といふ言葉で歴史の現実をバツサリと断ち切ってしまった。自分が日本における最高のインテリであるといふ自負のせいもあるのでせうが、ともすれば陥りがちな、この「現実を幻のやうに見る」人間の習性に対して全く無防備の状態で、自らを歴史の審判者の位置においてしまった。そこに癒しやうのない「病める文化」のすがたが生れたのです。

たしかに「人間は世界を幻のやうに見る。」——しかし、それは現代の日本において特に

顯著ではないか。それは世界のどの國に比べても、際立った特色を示してゐるやうに思ふのです。その典型的なものは防衛論争でせう。一昨日の齋藤先生の御話にもあったやうに、日本に対する北方ソ連の軍事的圧力は想像を絶するものがある。しかし一般の國民にはその現実はほとんど見えてこない。「平和を愛する諸國民の公正と信義に信頼して」、軍備をもつことすら罪悪であるといふ議論がまかり通る。そして國を守ることがいいか悪いかといふやうな議論が、疑々としてくる。それは全く世界中の人々が啞然とするほどの議論ですし、これまでの人類の歴史にも全く例を見ない議論だと言つても過言ではない。この驚くべき状況、それを私たちは一体どう考へればいいのか。

### 占領政策の後遺症

そこまでくれば、もはや明らかなやうに、それはまさしく占領政策の後遺症といふ他はないと思ふ。アメリカの占領政策の目標は、その「初期の降伏後の対日方針」の中に明記してゐるやうに「日本が再びアメリカとか、あるいは世界の平和と安全とに対して脅威とならないやうにあらゆる手だてをつくすべきである」といふことに尽きると思ふ。それがすべての大前提になつてゐるのです。もっとも占領政策の中には、彼らなりに好意をもつて考へたといふことが



あるかもしれない、だがそのやうな主観的善意とでもいふべきものがいかにあらうとも、彼らはこの大前提だけは絶対に崩さなかつたのです。

憲法第九条なども勿論その線に沿つて生れた最大の目玉商品だったので、マッカーサーは、昭和二十一年二月三日に出されたマッカーサー・ノートにおいては自衛戦力さへも否定し「自國の安全を維持する手段としての戦争をも放棄する」といふ徹底した考へを示してゐたのです。彼等にとつて日本の軍備はいかなる理由があらうとも許すべからざるものであつた。いふまでもなく自分の國を自分の手で守ることを考へないといふのは精神的に完全な片輪です。しかしそのやうなことはアメリカにとつて全く問題にならなかつた。日本がアメリカや世界の脅威にならないためには日本が片輪にならうとなるまいと、一切関知することではなかつた。かうして生れたのが「日本國憲法」だったので。だから表向きは憲法といふことになつてゐるけれど、これは実は占領軍の対日管理法にすぎない。かうしてアメリカはこの世の眞実とは全く無縁な幻像を押しつけ日本人にそれを無理矢理信じこませるためにあらゆる手段をえらばなかつた。日本人、戦後の日本人が世界中類を見ないはげしさで「第二現実」を信じこんでゐるのは、その背後にこのやうな歴史のからくりがあるからです。

### 「神道指令」の意味するもの



ではここで占領政策の代表的なものとして、所謂「神道指令」についてお話しておきませう。これは敗戦後四ヶ月、十二月十五日に出されたものです。正しく言へば「國家神道、神社神道に対する政府の保障、支援、保全、監督ならびに公布の廃止に関する指令」といふ長たらしい名前がついてゐる。略して「神道指令」といふのですが、ここで彼らが狙ったものは、國民と神道の完全な分離でした。この指令によって公務員が直接宗教にかゝりをもつことが禁止され、その為たとへば学校の先生が生徒を引率して神社に参拝するといふやうなことはいけないうことになりました。だがその当時の人はこの指令の意味するところをその程度のこととしか考へず、占領下であればやむを得ないことだといふ程度でうけとつた人が多かつた。だが本当はそんな生やさしいことではなかつたのです。

アメリカは日本のこれまでの生き方すべて、それは神道から生れた。あの神風特攻隊に象徴される捨身の行為も、すべてこの神道から生れた。あの狂信的な、野蛮な日本人の生き方の根源には神道がある。彼らはさう思った。従つて日本を再び世界の脅威となさないとめに精神的に解体してしまふ、そのポイントはこの神道の抹殺でなければならぬ。さう考へてこの指令を發したのです。その前文をレジュームの中にプリントしてをりますので読んでみませう。翻訳の文章で非常にわかりにくく「……スルタメニ」といふことばが四回くりかへされて、

その最後に「茲ニ左ノ指令ヲ発ス」といふ言葉でしめくくられてをりますので、ここでは便宜上、その條件を番号順にならべて記しておきました。

① 國家指定ノ宗教乃至祭式ニ対スル信仰或ハ信仰告白ノ強制ヨリ日本國民ヲ解放スルタメニ

② 戦争犯罪、敗北、苦惱、困窮及ビ現在ノ悲惨ナル状態ヲ招來セル「イデオロギー」ニ対スル強制的財政援助ヨリ生ズル日本國民ノ經濟的負担ヲ取り除クタメニ

③ 神道ノ教理並ニ信仰ヲ歪曲シテ日本國民ヲ欺キ侵略戦争ヘ誘導スルタメニ意図サレタ軍國主義並ニ過激ナル國家主義的宣伝ニ利用スルコトノ再ビ起ルコトヲ防止スルタメニ

④ 再教育ニ依ッテ國民生活ヲ更新シ、永久ノ平和及民主主義ノ理想ニ基礎ヲ置ク新日本建設ヲ實現セシムル計画ニ対シテ日本ヲ援助スルタメニ

茲ニ左ノ指令ヲ発ス

これだけの引用では充分御理解いたゞけないかもしれませんが、よく読んでみるとこれは単なる神社神道といふやうなものへの処置ではないことがおわかりいたゞけると思ふ。彼らが神社神道といふ言葉で呼んだもの、それは実は日本の國をして國たらしめてゐるもの、いはば建國の理想とでもいふべきものだったので。従つてそれと國民とを切り離さうとしたといふことは、日本

人としての生き方の基本を否定したといふことになる、この指令はさういふものだったので。従つてこの「神道指令」の中には「大東亜戦争」といふ言葉、或は「八紘一字」といふ言葉、さういふ「軍國主義」を連想させるやうな用語は即刻これを停止せよといふ条項もふくまれてゐるのです。思へば敗戦より四ヶ月、この指令は日本の精神的解体の最後の仕上げだったので。

なほここで一寸補足しておきますが、この神道指令なるものは、占領終結とともに、その効力は当然失はれたはずですが、あのマッカーサー・ノートが第九条の形をとつて残つてゐるやうに、この神道指令も憲法第二十条の「國およびその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない」といふ条項にひきつがれ、いはば第二十条の底にすけてみえるやうな形で、現在の日本人のもの考へ方を縛つてゐるのです。近頃地方自治体が宗教に参与したとして次々に訴訟が行はれてゐるのは御存知の通りですが、それもすべてもとをただせば、この神道指令、日本人を神の世界からひきはなさうとする占領軍の意図をそのまま踏襲して、日本の國柄の基本を否定しようとする左翼勢力の策動に外なりません。すなはち國家的行事のすべてから神道を排除し、公務員をして一切神道とかかはらしめないやうにするといふ考へはすべてここにその出発点があるのです。この神道指令の企画したところがいかに深刻な問題を孕んでゐるか、想像を越えるものがあると思ふのです。だが当時の人々はもとより、現在に至るまで殆んど大部分の日本人がそれほど認識をもつてゐない。むしろ問題の深刻さを意識してゐ

るのは当のアメリカ人ではなかったかと思はれます。

例へばアメリカの新聞記者、マーク・ゲインはベストセラーになったその著『ニッポン日記』の昭和二十年十二月十五日の個所で次のやうに書いてをります。

「今日もまた、戦後日本の変革の一里程碑を通りすぎた。神道を國家から分離せよという指令が発せられたのである。……もし日本人が現在計画されつゝある激烈な変革に対して反逆しようというのなら、今こそその機会だ、と私はこの発表を聞くためにみんなと一緒に会議室にいたとき考えた。われわれの仲間のだれもが、同じような考えを持っていたようだ。」

さらにゲインは次のやうに言ふのです。

「その宗教を根底からくつがえされてもおかたつ反逆しないのなら、日本人はもう絶対に反逆しないだろう。」

そしてゲインの言った通り、その当時日本人は反逆もしなかつたし、それ以後も遂に反逆することなしに現在に至つてゐる。いな、反逆しないどころか、現在ではさらにその神道指令を楯にとつて、日本の神々の世界を追放し、抹殺しようとする動きが、各方面に勢いを増してゐる。敵であるアメリカの方がむしろ驚くほどの情ない現状ではないでせうか。

## 天皇の御製に見る神々の世界

アメリカ人は過去の日本の万惡の根源をこの神道の中に見た。それは実に単純な思考ですが、一神教徒がとすればおちいり易い、世界を単一の因果論で説明しようとする思考法によるものと言っていていいでせう。（竹山道雄『人間性の普遍的基準』）いはば一種の惡魔の存在によって一切の現象を説明しようとするのです。たしかにアメリカ人にとっては複雑極まる日本人の精神生活を説明するのは容易ではないでせうし、さういふことで神道といふものに惡魔の影を見たといふのは無理もないことかもしれない。しかし、日本人が何の見さかひもなく、さういふアメリカの人の思考に同調するとは一体何か。まことに残念なことに、現代の日本人は自分の目で、日本人の目で、日本を見ることが出来なくなってしまうてゐる。外國人の目でしか日本といふ國を理解することが出来なくなっているのではないか。私にはさう思はれてならないのである。戦前がいいとか戦後がいいとか、そんなことは全く違ふ。日本人自身が自分の姿を見失つてゐる。さういふ恐るべき事態が現代の日本の姿ではないか。そのために私たちは過去の日本、日本の歴史までも、自分の心で、自分の目で直接見ることが出来なくなってしまうてゐるのである。

ここに明治天皇と今上天皇の御製を掲げておきました。明治天皇の御製は



久かたのあめにのぼれるこちしていすずの宮にまゐるけふかな

この御製は明治三十八年、日露戦争の勝利の御報告のため、伊勢にお参りになった折の御歌ですが、伊勢の大宮におまゐりにならうとして歩を運んでいかれると、何か遠い大空に吸ひこまれてゆくやうなおもひがする、さういふ莊嚴なおもひをおよみになってをられます。あとの二首は

ちはやぶる神の御代よりひとすぢの道をふむこそうれしかりけれ  
ひと筋をふみて思へばちはやぶる神代の道もとほからぬかな

いづれもこの現実の世界と神の世界が全く一つのものとして感じられてゐる。そこに日本人ならではの理解出来ない世界がある。神代の世界はそのやうな形で現実に実感せしめられ、現実はそのまゝ、神の心に通ふのです。次の今上陛下の御製は、昭和四十九年、式年遷宮のあと、新しく装ひ成った伊勢神宮に、皇后さまと御一緒におまゐりになった時の御製です。

冬ながら朝暖かししづかなる五十鈴いすずの宮にまうで来つれば

その時皇后さまは次の一首をよんでをられます。



おだやかに冬たつこの日みともして伊勢の宮居にまうでけるかな

「冬ながら春暖かし」「おだやかに冬たつこの日」いづれもその折の情景でせうが、同時に、その「暖かさ」「おだやかさ」の中には神宮に御詣りになる両陛下の御心が偲ばれるやうに思はれてなりません。そしてこの二首の御歌に流れる御心の通ひ合ふ御姿、私は日本の國柄の基本は、この二首の御歌の中にある、さう言っても決して過言ではないと思ふのです。

明治天皇の御歌にせよ、天皇、皇后両陛下の御歌にせよ、ここにこそ日本人が遠い昔から神様とともに生きてきた姿がいみじくも表現されてゐる。この神々の世界を断ち切らうとした占領軍の命令に、日本人はどうして生命的な反撥をおぼえないのか。

これらの御製に示された世界、そこには「神國日本」の姿がある。だがいまどき、神國日本などといへば、人々はそれこそとんでもない神がかりだといふでせう。だが、例へばキリスト教の讚美歌などで「神とともにゐまして」と歌ふのを聞くやうな時には何の抵抗も感じない。むしろいい歌だと思つて親近感をさへいだいて聞いてゐる。だが日本の神々は警戒の目で見る。実におかしいではないか。全國津々浦々に神さまが祭られてゐる。その神々とともに生きてゐる日本人。それがどんな大きな幸せであるか、それに全く盲目にされてしまつてをり、しかも盲目にされてしまつてゐるその自分に気付かないといふのが悲しむべき日本の現実なのです。

先日読みました『日本のこころ』といふ書物の中で、保田與重郎さんが「神ながら」といふのはどういふことと思ふかといふ中河與一さんの質問に答へて、次のやうに言つてをられた、その言葉が身にしみました。

「それは天地の始めに立つてゐるやうな心、朝お日さまが昇ってくるのを見てゐると、これが神心かと思ふ。さういふ風景のなかに、自然のままあるといふやうな感じではないでせうか。たゞの観念的な無心といふのではなく、風景がある。」

とても美しい言葉ですね。神々の世界と人間の世界が一つに融けあつてゆく、しかしそれは觀念の世界ではない。それは生きた自然に包まれて、私たちの心に直接に実感されるものなのです。「冬ながら朝暖かし」、その暖かな日射しの中に、神々の世界がある。保田與重郎さんの言葉の最後の「風景がある」といふ一句には千鈞の重みがある。

日本人がこのやうな「神々の世界」を見失ひつゝあるのは、勿論明治以来滔々と流れこんだ西洋文明の強い衝撃によるものでせうし、さらには、周囲を海に囲まれた自然環境が日本人をこのやうに甘やかしてしまつたからだとも言へませう。しかし問題は決してそのやうなことだけではない。このやうな日本人の精神状況をふまへ、それを巧みに操作しながら、日本人の世界から神々の世界を抹殺しようとする一つの強烈な意志が現実存在するといふことを私たちは知らなければならぬ。それが神道指令に端を発し、さらに日本の命脈を断ち切らうとする左翼

勢力の政治意志にひきつがれて、いま私たちの目の前に迫ってきてゐる。私たちはいまそれに對してどのやうに對処すべきか、問題はぎりぎりのところに來てゐると思ふのです。

いのち蘇る日を！

では最後に田所広泰といふ方の「教育の意義は一変せり」といふ文章の一節を読んで終りにしたいと思ひます。田所広泰といふ方は長内先生の御話の中でも一寸おふれになりましたが、黒上正一郎先生が第一高等学校に昭信会といふ会をおこされましたが、黒上先生なきあと、その中心として活躍された方で、戦前、この國民文化研究會の前身であつた日本学生協會の柱となられた方でしたが、終戦の年三十五歳といふ短い生涯を終へられました。その田所さんの遺稿集に「憂國の光と影」といふのがありますが、その一節をここにプリントしておきました。田所さんはその生涯を東京帝國大學を中心とした当代の學風を正すために燃焼しつくされたのです。

「現代學校教育の弊を身を以て嘗め、その苦杯を仰いだものは、殆んど凡てのもものが、かゝる弊に對して精神を屈してしまつたからに外ならない。學生の殆んど凡ては學校がつまらないと言つた。けれども彼らは苦しいとは思はなかつた。この苦しみを感ぜなかつたことが精神的主動力を

もつてをらなかつた証拠であり、その故にその生命を奪はれたのである。」

いまの学校はつまらない——それは誰の口からも聞くところです。いまの日本はだめだ——といふ言葉もさうでせう。しかしそれは誰にでも言へる。しかし、その濁りに濁つた空気の中で「苦しい」といふ者は一体どこにゐるか。自分が生きてゐるなら、田所さんの言葉をかりるなら「精神的主動力」をもつてゐるなら、「苦しい」といふ表現をとらざるを得ない筈だ。田所さんの言葉の終りの一節「その生命を奪はれたのである」といふところに注目して下さい。問題は思想の是非ではない。その思想を語る人自身が生きてゐるか否か。その精神的な生死そのものが問はれてゐるのです。

「われらの同胞がかくその生命を奪はれてゐる現状に対して、憤怒の情を覚えこそすれ、それに対して不信の目を向けることは断じて出来ないのである。だからこそ、われらはかゝる消極的存在たらざるべく、相共に努力せねばならぬといふのである。われらはわれらの生命をみづから守らねばならぬのである」

田所さんは誤れる大学の学風の中に生きる学生の覚悟について述べてをられますが、それはそのまゝ、この民族としての生命を奪はれた現代を生きる日本人に投げかけられた言葉として、私たちの胸に強くひびいてまゐります。私たちは今の日本に対して「不信の目をむける」といふやうな消極的態度に終始すべきではない。まさしくこの現実に「憤怒の情」を発し、奪はれ

たる生命を奪回するため立ち上らなければならぬ。私たちはいまさういふところに来てゐることを肝に銘じて知るべきだと思ふのです。

しかしそれは何もことさら肩を怒らして何かをしようとするのではない。先ほどおよみした天皇さまの御歌、そこに示された神々とともに生きる世界、その世界の实在を信じ、これも今日の午前の小田村先生の御話の最後に紹介された、夜久正雄先生のお言葉をかりるなら、さういふ日本歴史の中に実現されてきた「事実」を信じ、その「事実」に「随順」することによって日本民族としての信念をたしかめることに尽きる——私はさう思ひます。

だがそれは単に日本民族だけのことではない、さういふ信念をもってはじめて、冒頭に御話しました、日本の軍人を葬ってくれたオーストラリアの人々の気持が本当にすなほに理解出来るのです。日本の過去を、日本の歴史を見失った私達には、世界の人の気持まですっかりわからなくなってしまう。その閉された世界の中から一刻も早くぬけ出して、いのち蘇る日、この日本の國土に実現しなければならぬ。私は切にさう思ひます。







講

義



急変する

アジア・太平洋世界

—祖国の明日への祈り—

国際政治評論家

齋藤

忠



萩、野山獄跡

祖國が曾て経験せぬ危急の事態

わが眼前の世界革命基地

世界革命第一段階の戦略

ゾルゲ事件に始まる一連の工作の

世界史的意義

ヤルタ密約が暴露したソ連の侵略計画

いま急速に進展しつつある

自由世界分断の策謀

新たに極東に配備された「SS 20」

「攻撃目標は日本……」

すでに重囲の中に在る日本

「タイフーン」級原潜出現の意味

ソ連最大の侵攻基地と化したオホーツク海

わが北海道に迫る危機

ウィリアムズバーグ先進國首脳会議の歴史的成果

スウィング戦略は変った

極東への戦力集中を拒否するもの

西ヨーロッパは、いま、結束を固める

アンドロポフ政権はどう動く？

自由世界唯一最大の弱点

母國の運命に関心を持たぬ國民

命を懸けて護った祖國を――

祖國が曾て経験せぬ危急の事態

今年も、また、お眼にかかることが出来ました。昨年夏、霧島でお訣れしたをりには、或はこれが最後かとも思つてをりました。再びお眼にかかる日は無いのではあるまいかと、ひそかに考へてをりましたのに、またお元氣なお顔を見ることが出来た。仕合はせに思ひます。ただいま御紹介いただきましたやうに、明治三十五年に生を享けました者。祖國が興亡の命運を賭けた日露の大戦は、私が数へ歳三歳の時に起こり、四歳の秋、十月に終つた。父も、叔父も、ともに満洲の野に転戦して、傷つきました。戦終つて後の凱旋の日に、故郷の町の夜を埋めつくした提灯行列の灯の渦と、万歳の声を、いまも、夢のやうに憶えてをります。

そして、まだ小學校に通つてをりました一九一四年——大正三年には第一次世界大戦が突発してをります。その後のわが國が、どのやうな歴史の激流の中で変転の時代を経て來たか？ 思へば、今日までの私の生涯は、祖國の三千年の歴史のあひだにも前例を見ぬ狂風激浪の時期に過ごされて來たのであります。

ソヴェエト連邦といふ人類の歴史に前例を見ぬ異種の國家が出現したのも、この時期においてであつた。マルクス・レーニン主義といふやうな奇怪な原理を立國の精神として國家が曾

て、ただ一つたりとも存在したか？ その目的とするところは、この世界の資本主義の國々をことごとく破壊し盡くして、プロレタリアの支配する世界を建設することであつた。

### わが眼前の世界革命基地

それ以前にも、確かにマルクス主義は存在した。だが、これを奉ずる人々は、きはめて少数の狂信的な革命家の一群に過ぎなかつたのであります。彼等は、権力のきびしい弾圧下に、地底をはいずり廻りながら、いつの日か資本家階級を掃滅して、プロレタリアの支配する世界を實現することを夢みつつ、絶望の日々を送って居たのである。

だが、ソヴィエト連邦の出現とともに、すべては変わった。世界革命は、もはや、一握の狂信の徒のむなし夢ではなくなつたのであります。

ソヴィエト連邦こそは、史上空前の共産主義革命の基地。しかも、この國は、彼等が滅ぼし得たロマノフ王朝のロシア帝國の巨大な版図と、人口と、軍事力とを、そのままに継承していた。——彼等の世界革命は、この巨大な共産主義國家が行う戦争と外交とを手段として遂行されることになつたのであります。

第二次世界大戦も、もとより、この事態の当然の帰結として起こつたものに他なりません。





この大戦の筋書きを決定したものは、一九三五年七月二十五日より八月二十五日まで一ヶ月にわたって、世界六十五支部の代表者五百十名をモスクワに招集して行なはれた「第七回コミンテルン大会」であつたのであります。

### 世界革命第一段階の戦略

ソヴィエト連邦の軍事力だけをただ一つの頼みとする世界共産主義勢力の戦ひによって、たとへば米合衆國、或は大英帝國のやうな巨大な資本主義國家に挑んでこれを葬り去ることは、到底考へ得ることではなかつた。それよりも、いま、眼前の急務は、極東正面の日本、および西ヨーロッパ正面のドイツを撃破することであらねばならなかつた。だが、そのいづれも、当時の

ソヴィエト連邦の力をもっては、到底、これを倒し得る見込みは無かったのであります。

ただ一つ残る途は、最後には必ず剣を交へねばならぬ宿命の主敵、米合衆國、大英帝國、フランス共和國、中華民國をも、しばらく欺いて、これを彼等の戦列に獲得することであつた。かくて、これらの資本主義諸強をもって眼前の敵を包圍し、彼等をして互ひに相うち、相戦はしめて、その俱に倒れるを待つ。——それが、彼等の目ざす共産主義世界革命のための第一段階の戦略であつたのであります。

そのために、ソヴィエト連邦は、まづ、わが日本とのあひだに中立不可侵条約を締結して、これを敵とすることを避けた。一九四一年——日本が英・米とつひに戦ひを交へるに到る直前のことであります。

ドイツとのあひだには、すでに二年前、一九三九年に、不可侵条約を締結してをります。

### ゾルゲ事件に始まる一連の工作の世界史的意義

このやうにして、自身は、日本およびドイツを敵とすることを避けながら、同時に、日本と米、英、佛らの諸國とのあひだにあらゆる対立と抗争を激発して、彼等を戦争に追ひ込んだのだ。

日本と米合衆國と、この二つの資本主義國は、ともに中國および東南アジアの市場を争うて、激しい対立關係に在ったのであります。さらに、太平洋をあひだにして、ともに世界の首位を争ふ巨大な海上武力を擁し、対立の關係を続けつつあった。——その対立を激成して兩國を抗戦に追ひ込むことは、極めて容易であったと言はなければならぬ。

ソヴェエト連邦を中核とする世界共產主義勢力にとって、アジアの革命を遂行するに当たつての最大の障害は、わが日本の保有する強大な軍事力であったのであります。特に、日本が當時滿洲に配備しつつあった七十萬の關東軍が、ソヴェエト連邦軍の極東進攻に備へたものであったことは、言ふまでもないことであります。

「革命はアジアにおいて決する」とレーニンは言った。そのアジア革命の最大の障害は、關東軍の存在であつたのです。

だが、ソヴェエト連邦は、日本を欺いてこの國とのあひだに中立不可侵條約を締結し得た結果として、その眼を南に転ぜしめることに成功した。これとともに、駐日ドイツ大使館員リヒャルト・ゾルゲおよび元朝日新聞記者尾崎秀実（ひでみ）らを中核とする一群の工作員を近衛文麿（あやまる）首相に接近せしめて、大陸における日本の政策の轉換を策したのであります。

彼等は、さらに、滿洲に巨大な勢力を擁する軍閥の巨頭、張作霖（チャン・ツァオリン）を

動かして、日本との対立を激成しようとした。同時に、毛沢東（マオ・ツェトン）を頭首とする中国共産党の勢力を彼等の目的のために徹底的に利用したことは、言ふまでもない。

日本と中華民国とが戦ひを交へるに至った最初の不幸な事件——蘆溝橋（ルコウキヤオ）の戦闘も、また、中国共産党の策謀によって激発されたものであった。

日・華両軍は、この地域において相対立したまま、いづれの側も、決して動かなかったのです。だが、夜の闇に乗って両軍のあひだに潜入した劉少奇（リウ・シャオチ）の指揮する八路（パード）軍が、双方に向かって同時に発砲したのであります。

中華民国軍は、当時、これを日本軍の攻撃と誤信した。日本軍は、また、中華民国軍の來襲と思ひ込んで応戦したのであります。このやうにして、両軍は、中国共産党の操るままに、全く予期せぬ戦闘に突入した。

劉少奇は、この事実を、後に自ら告白してをります。両軍の戦闘突入を見極めて後に、彼が延安の党本部に送った報告の電文も、アジア各地の無電局によって確かに傍受されてゐる。

劉少奇。御記憶の方も多いでせう。後に國家主席となり、プロレタリア文化大革命において、毛沢東に追ひ落とされ、悲運の生涯を終った人物です。

戦後、極東國際軍事裁判のをりに、わが弁護団は、銚子無電局が傍受した彼の報告の電文を、日華開戦の経緯を証明する証拠として法廷に提出したのですが、法廷は、これを受け取る

ことを拒否しました。

わが日本と中華民国とは、このやうにして、共產主義勢力の陰悪な工作のままに、つひに戦争に突入した。米合衆國も、また、他の連合諸國とともに、わが國を包囲し、封鎖して、その石油、工業原料、食糧を運び入れる海上の補給路をことごとく断ち切ったのであります。

このやうにして、やむを得ず自身の存在を護るために起った日本。大東亜の戦ひは、いふまでもなく、やむを得ざる自衛の戦ひ、——國際法にいふ「緊急避難」の戦争に他ならなかったのであります。

#### ヤルタ密約が暴露したソ連の侵略計画

ソヴェエト連邦の狙ひは、宿命の敵、資本主義諸國をして相戦はしめ、彼等が俱に破滅するのを待つことに在った。彼等の目的は、最初から、米合衆國およびヨーロッパの資本主義諸國を利用して日本を完全に包囲し、たたき伏せることであつたのです。彼等がドイツにおいて実行したやうに、これを二つに分割して、その一半を事実における属領とすることであつたのです。

ドイツもいまだ敗れずに激しい戦ひを続けつつあつた一九四五年、二月四日から十一日まで、

クリミア半島南岸の港町ヤルタにおいて、ソ連党書記長兼首相ヨシフ・スターリンが、英首相ウィンストン・チャーチル、米大統領フランクリン・デラノ・ローズヴェルトと共に相会して結んだ「ヤルタ密約」こそは、何よりも明らかにそれを証明するものであらねばならない。

わが日本とのあひだに何らの戦争関係をも持たず、それどころか、中立不可侵の条約をさへも結んでゐたソヴェエト連邦の首相は、英・米兩國の首相に対して、対日参戦を約束してゐるのであります。

その参戦の条件の一つが、わが南樺太および千島列島の引き渡しであつたことは、周知の事実であらう。——彼等の目ざすところは、終始、自由世界の内部分裂の激化であつた。これに乗じての日本の制握であつた。

### いま急速に進展しつつある自由世界分断の策謀

現在、わが日本を有力な一員とする自由世界が当面しつつある重大な危機も、その大東亜戦争前後の事態と本質を同じくするものであることを、深く心に銘じて記憶して置かなければなりません。

ソヴェエト連邦が、この数年、秘かに配備を進めてきた戦域核ミサイル「SS20」の脅威が、



いま、大きな問題になってをります。彼等は、この凶悪の兵器をもって西ヨーロッパ諸國および日本を威嚇し、脅迫して、相互の協力関係を断ち切らしめ、やがては彼等の強圧下に屈服せしめようとするのであります。

現在、その数は、すでに三百四十五基。しかも、その一基の爆発力は、実に、四百五十キロトンに及ぶ。

今を去ること三十八年前。昭和二十年の夏八月、わが日本は、世界で初めて、原子爆弾による攻撃を受けました。その原爆は、ただ一発であった。だが、その一発は、瀬戸内海に臨む巨大な都市、廣島を、一瞬にして無惨な廢墟と化した。四十万の市民が、或は二つ無き命を失い、或は生涯癒えぬ痛手を受けたのであります。

だが、その原爆第一号の爆発力は、十二キロトンであった。しかも、ただ一発であった。

いま、ソヴィエト連邦が西ヨーロッパおよび極東正面に配備しつつある新鋭の中距離ミサイルは、ただ一基の爆発力が、さきにも申しましたやうに、四百五十キロトン。——この兵器の西ヨーロッパに向けての展開に、西欧諸國が動転したのは、当然であらねばならない。

新たに極東に配備された「SS20」

とりわけ、すぐ眼前にこの核ミサイルを配備された西ドイツおよびフランスの受けた衝撃は、当然大きかったです。その射程は、四千五百キロないし五千キロ。もし、このミサイルによる攻撃が行なはれるならば、ボンも、パリも、ただ一瞬にして、地獄の廃墟と化するであらう。そもそも何億の市民が命を奪はれることか？——西ヨーロッパ諸國は、この恐怖の前に、愕然として色を失ったのであります。

彼等は、ただちに米合衆國に強要して、「SS20」に対抗し得る新鋭の戦域核ミサイルをヨーロッパに配備せしめることを決定した。米大統領ロナルド・レーガンは、その要請に答へて、射程五千キロ、爆発力五百キロトンの核ミサイル「パーシングⅡ」を、取り敢へずヨーロッパに配備することを承諾したのであります。——一九八三年末までに、この最新鋭のミサイル百八基を西ドイツに配備する。さらに、これに巡航ミサイル「トマホーク」四百六十四基を加へて、合計五百七十二基を西ヨーロッパに展開するといふ約束であったのだ。

これはソヴェエト連邦を仰天せしめた。かうなつては的確に壊滅に追ひ込まれるのはソヴェエト連邦自身の方なのであります。

色を失なつたクレムリンの首脳たちは、秘かに西ヨーロッパ諸國に近づいて、「パーシングⅡ」配備計画の拒否を求めようとした。「この計画を強行するならば、ヨーロッパは、悲惨の限りの地獄と化するであらう。だが、この戦域核ミサイルの射程は五千キロを超えない。大西洋を越

えてアメリカ大陸へは届かぬのだ。ヨーロッパが業火の地獄と化する時、米合衆國は何の被害をも蒙ることなく、平然として生き残るであらう。それでもいいのか？」というのであった。「もし西ヨーロッパ諸國が米國の中距離核兵器を拒否してくれるならば、われわれも、また、現在配備中のSS20を、ヨーロッパ正面からは、すべて撤去するであらう。それが、東・西ふたつのヨーロッパが共に生き残るためのただ一つの道ではないか？ ……」

事実、この申し出と前後して、ソヴェト連邦は、西ヨーロッパ正面に配備してゐた「SS20」の一部を、秘かに、わが日本の正面に移してゐるのであります。

「攻撃目標は日本……」

このやうにしてヨーロッパに生まれる「新しい緊張緩和」は、アジア——とりわけ、わが日本にとっては、生死存亡の問題なのであります。現在、すでに、日本の眼前、沿海州のシルカ河畔を中心として点列する十二のミサイル発射基地に配備された「SS20」の数は、百三十基に近い。

ソ連共産党書記長ユーリー・アンドロポフは、さきごろ彼を訪ねてモスクワに立ち寄った西ドイツ社会民主党のフォーゲル氏に向かって、これら極東に配備を移した中距離核ミサイルの

目標がわが日本であることを言明してをります。西ドイツの有力紙「デイ・ウェルト」は、逸早く、その問答を報道してゐる。

「日本に照準を合はせる」と明白に答へたといふ。これは、まことに暴慢無禮の放言と言はなければなりません。そのソ連共産党最高首脳の意図が、これによってわが日本の抵抗意志を完全に粉碎し、ひいては、日本と米合衆國との緊密な協力関係を崩壊にみちびくに在ることは、あまりにも明白であらう。

このやうな恫喝の言辞を弄した者は、ひとりアンドロポフ書記長だけではないのであります。第一副首相兼外相グルムイコは、「これは日本周辺に散在する核兵器、とりわけ、沖縄に在る巨大な核基地に対応するための措置である」と、恥も無く、言ひ放つてをります。「見て来たやうな大嘘」とは、このことか？ それが、ただ一基の核兵器をも持たぬわが日本を、一二百基の「SS20」をもって脅迫することの正当な理由だといふのであります。

### すでに重囲の中に在る日本

日本に向けられた核の恫喝は、「SS20」だけの問題ではありません。彼等がすでにアジアに持ち込んだ九十機の超音速爆撃機「バックファイア」の大群は、何を意味する？

さらに、日本の安全を危うくするものは、わが対岸の海軍根拠地ウラジオストクに拠って、西太平洋を事実において制握するソ連太平洋艦隊の存在であります。——艦艇総数八百十隻。排水量総計百六十万トン。その主力を成すものは、実に、百数十隻の航洋潜水艦であります。「キエフ」級航空母艦群の第二艦「ミンスク」の存在も、忘れてはならない。この級の空母の第三艦も、或は、明年あたり、日本海に姿を現はすか？

これら新鋭の艦艇のための根拠地・基地の環列は、すでに日本列島を幾重にも包囲してをります。カムチャツカ半島南端のペトロパブロフスク。北海道眼前のわが固有領土、択捉（えとろふ）島の単冠（ひとかつぶ）湾。日本海に臨むわが函館対岸のウラジオストク。北朝鮮北東岸の羅津および清津。さらにヴェトナム社会主義共和国の東岸に点列する三つの基地——カクバ島、ダナン港、およびカムラン湾。その西、ベンガル湾にも、アンダマン列島ならびにニコバル諸島。

わが日本は、すでに彼等の重囲の中に在るのだ。

### 「タイフーン」級原潜出現の意味

その日本に迫るさらに重大な脅威は、「タイフーン」級最新鋭の原子力潜水艦の存在であります。

す。これは、基準排水量、実に三万トン。一艦おのおの二十基の長距離核ミサイル「SSNX 20」を搭載してをります。まさしく、史上空前の海底戦艦といふべきでせう。

この級の第一艦がバルチック海に臨む旧都レニングラードの海軍工廠で工を終り、進水いたしましたのは、一九八〇年九月。その時から、すでに三年の歳月が流れ過ぎてをります。そのあひだに、やうやく艤装を終って、二年前の八一年十月一日には、最初のミサイル発射実験を行なつてゐる。

だが、その発射実験の成果こそは、あらゆる意味で、米・ソの核戦力の関係を一変するものであったのです。

実験の行なはれたのは、白海。——不凍港ムルマンスクに近い北極海の一部においてであった。この海域から射ち出された「SSNX 20」は、その艦が搭載する二十基のうちの四基だけ。——そのうちの二基は、シベリアの空を翔り、オホーツク海を越えて、わが千島列島の果てに連なるカムチャツカ半島に落下してをります。そして、残る二基は、遙か南に向かつて西太平洋の空を貫き、ハワイ諸島に近いミッドウェイ群島の東方海域に飛び込んでゐるのであります。

この四基の「SSNX 20」は、白海と同じ一点から、同時に射ち出されたものであります。それが、二基は極北のカムチャツカ半島に。そして、残る二基は、遙か南の太平洋の中心部、



ミッドウェイ島海域に落下してゐる。この二つの落下地点のあひだには、実に、幅四千キロの巨大な空間が拡がってゐるのであります。

かうして地図を披いて見るならば、一目瞭然でせう。四千キロといふ距離は、アメリカ合衆國の南北の幅をすっぽりと包み込む長さなのであります。——これは、「タイフーン」級原子力潜水艦が西太平洋において行動を起こす場合、米合衆國のすべての地域がその核ミサイルによる攻撃の目標となり得ることを意味するであらう。

この原潜の一隻は、二十基の「SSN X 20」を搭載してをります。しかも、そのミサイルの各一基は、十二個の核弾頭を装着してゐるのであります。

といふことは、この級の原潜一隻ごとに、合計、実に二百四十基の核弾頭。それが北アメリカ大陸の空を掩うて降つて来る。——ただ一隻の「タイフーン」級原潜の自由な行動を許すことの結果として、米合衆國は、このやうな攻撃を受ける可能性を覚悟しなければならぬので

### ソ連最大の侵攻基地と化したオホーツク海

だが、これは、ひとり「タイフーン」級原潜だけの問題では無いのであります。わが眼前、

千島列島に連なるカムチャツカ半島南端のペトロパブロフスク・カムチャツキーは、すでに「デルタ」級原潜の巨大な基地と化してゐる。

この「デルタ」級にしても、基準排水量こそ「タイフーン」級のほぼ半ばではあるが、未曾有の海底の巨艦であることに变りは無い。そして、この級の原潜も、また、一艦おのおの十六基の長距離核ミサイル「SSNX18」を装備してゐるのです。

この潜水艦発射ミサイルは、最初の発射実験のをり、実に、八千八百キロを飛んでゐるのであります。海里に言ひ換へるならば、およそ六千海里。——千島列島の布列の陰に深く身を潜めたままで、このミサイルをもって、直接に米合衆國のほとんどすべての都市に核攻撃を加へることが出来る。

ソヴェエト連邦にとっては、これらの原子力潜水艦の一群こそ、米合衆國および西ヨーロッパ諸國を徹底的に威嚇し、その結盟を根底から破壊し得る最も有力な手段なのであります。そして、同時に、これらの原子力潜水艦が最も安全に行動できる海は、極東におけるソ連最大の海軍根拠地ウラジオストクを持つわが内海、日本海であり、また、千島列島の布列によってその安全を護られてゐるオホーツク海なのであります。

もしもソヴェエト連邦がわが日本列島を彼等の支配下に置くことが出来るならば、ウラジオストクを包む日本海は、彼等にとって最も安全な、また最も強力な作戦基地と化するであらう。

そのことだけのためにも、彼等は、日本海を彼等の完全な支配下にすることを希望せざるを得ないのだ。

### わが北海道に迫る危機

だが、オホーツク海について言ふ限り、これは、現在すでに、ソ連海軍が極東において最も安全に行動し得る海域なのであります。

第二次大戦終局のどさくさ紛れに、日ソ中立不可侵条約を平然として侵し、無法の暴力をもつてわが國土を略奪し、ほしいままにこれをソヴィエト連邦の領土に編入して以來、すでに四十年。南樺太も、千島列島も、北海道根室支庁の管轄する齒舞（はばまい）、色丹（しこたん）の両島群も、いまなほ彼等の占領するところである。ソ連の制握下に在るこれらの島群こそは、オホーツク海の外壁として彼等の侵攻基地を護る天然の大要塞なのであります。

オホーツク海は、これらの列島によって、劃然と、太平洋から切り離されてをります。千島列島が彼等の手に在る限り、太平洋に抛る米合衆國の海上勢力は、この環列を突き破って、オホーツク海に潜むソ連艦隊に打撃を加へることは、極めて困難であると言はなければならぬ。ソヴィエト連邦が、いま、この海に臨むペトロパブロフスク基地に十数隻のミサイル発射原

潜を配備しつつある目的は、言ふまでもなく、これによって日・米兩國の緊密な協力体制を潰滅に追ひ込むことに在るのです。彼等のアジア制握を不可能ならしめつつある最大の障害を排除することに在るのです。

この体制を完全なものにするために、何よりも肝要な前提条件は、そのオホーツク海の安全を保障する四周の陸地を、ことごとく彼等の支配下に置くことであらねばならない。さらに、極東最大の海軍根拠地ウラジオストクを擁する日本海と、オホーツク海とのあひだの支障ない連絡の路を確保することであらねばならない。それゆゑにこそ、ソヴィエト連邦は、あらゆる口実を設けて、北海道侵攻の機会を待ち設けつつあるのです。

すでに、わが北方領土には、一万四千のソ連機械化歩兵部隊が配備されてあります。この方面の戦闘指揮を担当する独立の司令部が此処に設けられてゐることも、世界のことごとく知る事実だ。

択捉（えとろふ）、國後（くなしり）の兩島には、天寧（いまは、その名さへも、ほしいままにブレベストニクと変へられてをります）を始めとする四つの巨大な空軍基地。その同じ択捉島に在る単冠（ひとかつぶ）湾——大東亜戦争開戦の時期におけるわが真珠湾攻撃部隊の発進基地——すらも、いまは、津軽海峡制握のためのソ連海軍基地と化してしまつてゐるのであります。

### ウィリアムズバーグ先進國首脳会議の歴史的成果

これは、ひとりわが日本だけの危機ではない。米合衆國も、西ヨーロッパ諸國も、この事態によって、ひとしく生死存亡の淵に追ひ詰められてゐると言はなければなりません。

この五月末、米合衆國ヴァージニア州の古都ウィリアムズバーグで行なはれた第九回先進國首脳會議。それは、この自由主義世界空前の危機に対処する道を、會議参加七ヶ國の首脳が初めて心を開いて討議し合つた点で、今日まで八回にわたつて行なはれた先進國首脳會議に曾て例を見ぬものであった。

この會議の最大の意義は、参加七ヶ國の安全と自由が一つのものであつて、本來不可分の關係に在る事実を、あらためて明白に宣言したことに在るのです。「われらの民主主義の基盤たる自由と正義を護ることこそ、第一の任務」と言ひ切つてゐることを、深く心に留めて置かなければなりません。その共通の価値觀の再確認こそ、會議参加七ヶ國の強固な結束の前提であり、また、ソヴェト連邦の恫喝に対処するための基本的戦略確立には欠くことの出来ぬ條件なのであります。

## スウィング戦略は変わった

そればかりではない。この首脳会議は、問題の中距離核ミサイル削減交渉を、ひとりヨーロッパの問題としてのみ取り扱はず、「全地球的」観点からこれと取り組む決意を明らかにしてをります。この事も、また、ウィリアムズバーグ先進國首脳会議の最も輝やかしい成果であったと言はなければなりません。西側諸國がひとしく志すところは、「攻撃を抑止し、平和を確保するために十分な軍事を保有すること」なのであります。

この先進國首脳会議を機として、米合衆國の戦略方針も、急速な轉換を示してをります。昨日までは、インド洋および中東に急迫の事態が発生した場合、アジアに在る米合衆國の軍事は、ただちにその地域に移されることになってをりました。いはゆる「スウィング戦略」。第二次大戦以後、中東およびインド洋の危機に対処するために米合衆國が終始一貫して採ってきた方針は、敢へてアジアを空白化して、その戦力を中東に集中することであつたのであります。

だが、この六月二日に発表された北大西洋条約機構國防相會議の声明は、日本にとつても、また西ヨーロッパ諸國にとつても、極めて重大な決定を明らかにした。

さきにウィリアムズバーグ先進國首脳會議が公表した政治声明は、前にも申し上げたやうに、「西



側の安全保障は、全地球的な規模において考へてゆく」ことを、参加七ヶ國の一致した決意として確認してをりました。その決定に従つて、米合衆國は、中東有事の場合にも、そのためにアジアの護りを犠牲にすることを拒否したのであります。——ペルシア湾およびその湾岸地域でソヴィエト連邦が軍事的冒険を試みる場合、米合衆國は、ヨーロッパに在る軍事力を動かしてこれに対抗することを決定したので。

### 極東への戦力集中を拒否するもの

その一つの動きと見るべきであらうか？ アメリカ海軍は、この秋、十月から、横須賀と佐世保の二つの基地に、新たに三隻の艦艇を配備することになりました。

この國が北太平洋を中心としてインド洋および南シナ海に配備してゐる第七艦隊の艦艇総数は、最近二ヶ年のあひだに著実な増加を示してをります。現在、はやくも八十三隻。——本年初めには、七十隻を僅かに上廻る数に過ぎなかつた。昨年前半には六十隻前後であつたことを思ひ合はせるならば、この二年のあひだの増加のあわたしきは驚くほかは無い。

それにもまして、より大きな変化を示してゐるのは、その配備の比重であります。——インド洋およびペルシア湾の安全に最大の関心を示しつつあつた彼等であつた。事ある場合には、

太平洋に在る兵力をただちに此の海域に移すことを、かねてより宣言してゐた彼等であつた筈だ。

だが、いま、その比重は完全に変わりました。米合衆國の最大の関心は、いま、西太平洋海域におけるソヴェト連邦海軍の動きに集中されつつあるのです。

中東に事ある場合、太平洋海域に在る海軍力を西に「スウィング」する計画は、明らかに廃止された。その必要がある場合には、ヨーロッパに在る兵力を使用することを、はっきりと表明してゐるのであります。

わが眼前の沿海州に配備の数を増しつつあるソヴェト連邦の中距離核ミサイル「SS 20」に対しても、米合衆國は、すでに新しい対抗措置を實行してをります。戦艦「ニュージャーシー」を新たに第七艦隊に編入したことも、その一つであります。——この艦は、巡航ミサイル「トマホーク」二十二基を装備してゐる。

ひとり、この旧戦艦だけではない。米合衆國は、その保有する主要な水上艦艇と攻撃型原子力潜水艦のみならず、主要な水上艦艇と攻撃型原子力潜水艦のすべてに、この「トマホーク」を装備する。

そればかりではない。さらに「B 52」を主力とする二百機以上の戦略爆撃機にさへも、空中発射巡航ミサイルを装備する予定なのであります。——一機おのおの二十基を搭載するのです

から、総数は四千基。

その上にも、なほ、中距離核ミサイルをも極東に配備することを決定してゐるのですが、——これだけは、その実施に先立って、まづ、わが日本とのあひだの幾つかの困難な問題を解決する必要がある。

その一つは、日本側が執拗に固執する「非核三原則」であります。日・米兩國の政府首脳のあひだで最初に取り極められた本來の合意からは著しく歪め変へられた「非核三原則」であります。

さらに、もう一つは、日本國內一部の人々が頑強に主張する「集団自衛権の行使は日本國憲法に背反する」といふ誤まった見解であります。

### 西ヨーロッパは、いま、結束を固める

そのやうな多くの障害は、確かに存在する。だが、それにも拘らず、自由世界の結盟は、にはかに強化されやうとしてをります。この変化を前にして、ソヴィエト連邦の対西欧政策の選択の幅は、著しく狭められざるを得ない。クレムリンにとっては、まことに容易ならぬ試練と言はなければならぬのであります。

いふならば、八方ふさがり。ただ一つ、何とか突き破り得さうな弱点は、今となっては、わが日本の正面だけだ。

これと同時に、アンドロポフ政権にとって重大な打撃となったのは、イギリス王國の総選挙における保守党の圧倒的な勝利であった。ソ連共産党の機関紙「プラウダ」は、早速、このサッチャー女史の輝やかしい勝利を、「これぞイギリス王國の悲劇」と罵り喚いてをります。だが、この保守党の圧勝こそは、ウィリアムズバーグ先進國首脳会議における自由先進諸國の連帯宣言がもたらした成果であったのです。ソヴィエト連邦の飽くことを知らぬ残忍な威嚇に対して、自由先進諸國は、固く相結んでこれに当たることを誓ったのであります。

アンドロポフ政権はどう動く？

西ヨーロッパ、アメリカ、およびアジアの自由先進諸國が俱に堅く結束して護らうとする「共通の価値」は、自由である。民主主義である。また、平和である。このウィリアムズバーグ首脳会議の決意を、イギリス國民は、サッチャーの保守党に対する支持をもって承認したのであります。

ソヴィエト連邦の首脳人には、もはや、自由主義諸國の鉄の結束を突き破り得る自信は無

い。この七月四日には、西ドイツのコール首相がモスクワを訪問してをります。彼との会議に最後の希望を懸けやうとしたアンドロポフ書記長であったが、それも、また、空しいあだ頼みであった。

このやうな結果に終わった上は、自由主義諸國の決意に挑戦して、ヨーロッパとアジアの両正面に向かつて更に戦域核ミサイルの配備を進めるか？

もし、その対決が躊躇されるならば、残る途は、ただ一つ。——ジュネーヴにおける「中距離核削減交渉」で数量上の妥協を呑み、米合衆國の中距離核ミサイル一定数の西ヨーロッパへの配備を承認するか？

ユーリー・アンドロポフを頭首とするソ連の新しい政權の本質がどのやうなものであるかは、今更あらためて申し上げるまでも無いでせう。この政權の背後に在ってこれを支へつつある者は、世界が擧げて恐怖する秘密警察機構「國家保安委員会」(KGB)の巨大な組織であり、また、アンドロポフ書記長が最も信頼する國防相ウスチノフの統率する勞農赤軍なのであります。しかも、そのアンドロポフが継承を誓った前書記長ブレジネフの政策の目的こそは、圧倒的に強力な軍事力を駆使して、資本主義世界を分断し、これを対立に追ひ込み、つひにはその潰滅を期することに在ったのである。それが眞実である限り、アンドロポフ政權下のソ連がたやすく自由主義世界の反撃に屈して後退する筈はあるまい。

それとも、ソヴィエト連邦の伝承の奥の手である転身の早業によって、表面的に資本主義同盟に妥協し、讓歩して、眼前の危機の一次的打開を図るか？　だが、その場合にも、表面的な妥協の背後で、あらゆる手段を駆使して、資本主義諸國の結束の破壊を目ざすことは当然であらねばなりません。

### 自由世界唯一最大の弱点

それにしても、いまソヴィエト連邦が当面しつつある國內の危急の事態は、尋常のものではありません。米合衆國の「中央情報局」(CIA)は、「ソヴィエト連邦の経済的破局に対する西側の期待は過大である」と言っています。だが、それは、ソ連の脅威を軽視する傾向に対してあたへた警告といふべきであらう。あらゆる現実の事態から見て、ソヴィエト連邦がいま容易ならぬ破局の事態に直面してゐる事實は否定出来ないでせう。

アンドロポフの立場から見れば、これ以上軍事力の絶対優位を確保する政策を追及するならば、國家の崩壊を招く危険を覺悟しなければならぬ。ブレジネフの政策を継承するとは言つても、ブレジネフ政策に予見された破滅の結果まで継承するわけには行くまい。

アンドロポフ政権の行き詰まりの原因は、國內經濟の破局だけではありません。中東におけ



るアフガニスタン侵攻の失敗は、もはや隠すすべもありません。すでに三ヶ年の歳月を超えて、苦難は深まる一方であります。そればかりか、これがソヴィエト連邦の内部に在る五千万を超えるイスラム教徒にあたへる危険な影響をも、深く警戒しなければなるまい。

パーレビ王朝の打倒と米合衆國の影響の一掃を狙ったイラン革命も、結局は、思はぬ手違ひに終つてしまった。クレムリンが秘かに心頼みとしたイランの共産主義勢力「ツデー党」とその前衛部隊は、ホメイニのイスラム教政権によって潰滅に追ひ込まれてしまったのであります。

六月半ばのローマ法王のポーランド訪問も、また、東ヨーロッパ諸國におけるソ連の勢力に大きな打撃をあたへたと言はなければならぬ。冷静に見るならば、現在のアンドロポフ政権がすでに容易ならぬ窮地に追ひ込まれてゐることは、疑ふ余地は無いのであります。

だが、それ故にこそ、彼等が自由世界の最弱点を狙つて最後の冒険を試みる危険は、なほさらには大きいと言はなければなりません。その場合、彼等がすべてを賭けて突破を試み得る自由世界最大の弱点は、アジア正面以外の何処にございませうか？

### 母國の運命に関心を持たぬ國民

このやうにも危急の事態に在る祖國。それにもかかはらず、悲しむべきことには、國民のあ



ひだに、これに対する関心も、理解も無いやうに見える。

それも、或は当然のことであるかも知れません。世界に國家の数は多い。だが、わが日本のやうに、一億を超える國民が純一の血をもって固く結ばれ、祖宗の仁愛の道統を三千年にわたって護り傳へて來た國が、他に、ただ一つでも在るであらうか？

ソヴィエト連邦のごときは、百を超える異民族の集合体であります。その中には、数多くのアジアの諸民族を含むだけではない。南部國境に列なる五つの共和國の六千万の人口は、実に、アラブ民族であり、共產主義とは相容れぬイスラム教の誠実な信徒なのであります。

わが日本の場合、これとは全く異なる本質を持つ國家なのであります。あまりにも美しい國の成り立ちであった。この國の道統の本源を成すものは、深く尊い

愛であつた。國民のごとくが深く心に抱いてきたものは、皇室に対する恋闕の至情であり、父母に対し、兄弟姉妹に対し、また同胞のすべてに對する至純の愛であつたのであります。そのやうな國民が、人を疑ふ心を持たず憎むことを知らぬのも、或は致し方ないことであるかも知れない。

だが、それにもまして、この國民を変へたものは、大戦すでに終つて後七年余にわたる占領統治であつた。

この戦争終結のとき、われわれは、明らかに、「國体の護持」を条件としてポツダム宣言を受諾したのであります。それは、世にいふやうな「無条件降伏」では断じて無かつたのだ。それであればこそ、終戦のをりの詔勅にも、「宜シク舉國一家子孫相伝へ確ク神州ノ不滅ヲ信シ任重クシテ道遠キヲ念ヒ総力ヲ將來ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ固クシ誓テ國体ノ精華ヲ発揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ。……」と仰せ出だされたまうた。これこそ、敗戦の試練に立ち向ふ一億國民の心の誓ひであつたのであります。

命を懸けて護つた祖国を――

だが、戦後七年余にわたる占領統治の秘められた目的こそは、その皇國の道統の破壊に在つ

たのだ。彼等が、神道指令において、教育内容の改変において、また、新聞およびラジオを始めとする一切の報道機関を占領軍総司令部の完全な統制下に置くことによって意図したことは、この國民をして祖國を忘れしめることであつた。憎ましめることであつた。

極東國際軍事裁判の暴擧といひ、占領軍民間情報局の徹底した洗脳工作といひ、それが何を意味したか、何を目的としたものであつたかを考へて見よ。「日本國憲法」の強制にいたつては、明らかに國体の破壊を意図したものであつた。

愛する母國の命を護らむがために、祖國の榮光を護り伝へんがために、われわれの友は、教へ子は、笑つて戦場に二つない命を散らしたのだ。訣れの日、俱に手を握り、肩を抱き合つて、飽かず唱つた出陣の歌。

ああ、堂々の輸送船さらば祖國よ、榮えあれ！  
遙かに拜む宮城の 空に誓つたこの決意。

あの歌のしらべの心を打つ悲しさを、いつの日に、忘れることがあらうか！ 神州の不滅を信ずればこそ、愛する者の仕合せを祈ればこそ、友は、また教へ子は、笑つて戦場に散つて行つたのです。

だが、極東國際軍事裁判は、交戦者の敵意も憎悪もまだ消え去らぬ終戦直後に、しかも占領

中に、國際裁判とは名のみの戦勝十一ヶ國による裁判において、ほしいままにわが日本の戦ひを「侵略戦争」と断定したのであります。占領軍總司令部の民間情報教育局は、また、その極東國際軍事裁判史觀に基づいて國の教育を行ふやう、命令してゐる。

このやうにして、國民は、つひに祖國を疎んじ、憎むに至つたのであります。まして、占領下において制定された「日本國憲法」において、日本國民は、「平和を愛好する諸國民の公正と信義に信頼して」國の安全を維持することを誓はしめられたのだ。國の交戦權を否定し、一切の戦力を放棄することをさへも決定してゐるのであります。

祖國と明日のために命を懸けたますらをたちの悲しい覺悟も、いまは、早くも忘却の中に葬り去られただけではない。却つて、恥づべき侵略の行為、至愚の所業と罵られやうとは！ 在天の英靈は、母國のこの変はりやうを、どのやうな思ひで御覽になつてをられるであらうか？ 最初に申し上げましたやうに、私の今日までの生涯は、祖國の曾て知らぬ危急の時期に過ごされてきた。その風雲の時代の中で喜びも悲しみも俱にし、戦後、前敵國の占領統治下にあらゆる苦慘に堪へてきた同志の人々は、今は、すでにひとり残らず世を去つてをります。また逢ふすべもありません。

ただひとり、生き永らへたことを、神に謝すべきであらうか？ それとも、悲しむべきであらうか？ 物質的には見事に再生を果たし得た日本。だが、精神的意味において言ふ限り、祖

國は、いまもなほ、荒涼たる廢墟であります。いつの日か、喪はれた本來の精神を再びわが手に取り戻す時があらうか？

私どもは、すでに老残の身。ただ頼むは年若い同志の皆様であります。祖國の明日を託するのは皆様であります。この比ひなく美しい國を必ず護り傳へていただきたい。ただそれのみを心に祈って、今日を限りの命と思ひつつ生きてをります。



古典と私たち

東京大学助教授

小堀桂一郎



吉田松陰幽囚の旧宅（杉家）

西洋におけるクラシックス

日本における古典のあり方

古典と私たち―古事記を中心に―

古典と私たち―その美的側面―

西洋におけるクラシックス

「古典と私たち」と題して御話し申し上げる譯ですが、先づ、古典といふ言葉の定義から始めてみようと思ひます。言ふ迄もなく「古典」といふ言葉は、漢語であります。譬へば『春秋左氏傳』或は『漢書』といったものの中に此の言葉が出て参ります。其處では「以て古典に隨ふ」「古典に違へり」或は、「古典に非ず」といふやうに使はれてをります。このやうな事は、漢和辭典で調べれば何でもない事です、斯様な使ひ方に隨つて言ひますと、「古典」といふ言葉は本來は、古いしきたり或は、古い制度といった意味で、使はれてゐたやうです。その後、古い制度などを記した文書といふ意味が出て参りまして、聽て古い書籍を意味するやうになつた。しかし、古い書物であれば、全て古典と言へるかといふと、必ずしもさういふ譯ではありません。やはり、後世に対する規範となる書物といふ意味で使はれてゐた筈です。

それがどのやうにして日本語に取入れられ現在使はれてゐる「古典」といふ意味合ひが成立したかに就いて、吉川幸次郎先生は、凡そ次のやうに言はれてをります。「これは、所謂、明治漢語の一つではないだろうか。それ迄の日本にも勿論古典といふ概念はあつたし、其の實體もあつたのだが、古典といふ言葉遣ひは、實はしてゐなかつた。明治になつて初めて中國傳來の

古典といふ言葉を使ふやうになり、その際、明治の日本人の念頭にあつたのは、西洋でいふクラシックスといふ言葉ではなかつただらうか。」私も、その通りだらうと思ひます。

それでは、その西洋で言はれてゐるクラシックスとは何かといふ事に就いて考へてみませう。簡単に申しますと、クラシックスとは、ギリシャ語、ラテン語で書かれた古典古代の文書である。それも、古典古代に生れて、単に、今迄残つてゐる古い書物といふ文でなく、やはり、その書物に、内的生命とでもいふものがあつて、それが現代でも尚、人々の心に訴へる處がある。そのやうな、立派な規範となるやうな書物といふ意味で「クラシックス」といふ言葉が使はれてゐる譯であります。此處で、今迄、漠然と西洋の古典と申して參りましたが、西洋の古典とは何かといふ定義からしてかゝらなければならぬかも知れません。

西洋人達が古典古代の言語と呼んでゐるギリシャ語、ラテン語で書かれた作品を考へますと、先づ第一に思ひますのは、凡そ紀元前八世紀頃に成立したと言はれる『イリアス』とか『オデュッセイア』と言つた叙事詩であります。つまり、この時期に、既に三千年の生命を保つ古典的作品を彼等ギリシャの人々は作りあげてゐた譯です。それから少し下つて、紀元前五世紀頃には、『オイディプス』『アンティゴオネ』といった名作を残したソフォクレス、それからこの人と合せて三大詩人と言はれてゐるエウリピデス、アイスキュロス或は、アリストフアネスといつた大作家が出、ギリシャ文學の黄金時代を形造ります。これが將に、西洋の代表的クラシック



スといふものであります。

これと同じ頃、一方では、プラトンが出、此の學統は、直ちにアリストテレスに受繼がれて、西洋哲學の重要な源になった譯です。これらは又、藝術的にも高い完成の域に達した文章であり、古典の名に恥ぢない譯です。餘談になりますが、斯様な事を考へながらも、聊か感慨に堪へない事があります。此等の作品は、時間的にも、空間的にも私達にとつては、非常に遠い文化圏の古典

なのです。がしかし、其の一つ一つに立派な日本語の翻譯があり、我々は、母國語を通じて、それらに親しむことが出来る。それどころか、このギリシヤ悲劇を、實際に上演しようといふ試みが戦後間もなくから始めてゐるのです。又、最近では、このギリシヤ悲劇を日本人が西洋で巡回公演をした。それも、ギリシヤ・ローマ文化の故地であるイタリア邊りで大變好評を博したのださうです。諸外國の文化を取り入れ、更

に、それを消化し、自らのものにしてゆくといった日本人の能力は、實に素晴らしいものだ、今更ながら深い感慨を懐く譯です。

扱て、このギリシヤ文化の最盛期も、臆ては衰へる時期が来ます。アテネの繁榮がやっと峠を越した頃、マケドニアのアレクサンダ大王が近東世界の武力制覇を成し遂げ、ギリシヤは政治的圧迫を被つて、没落してゆく。その政治的没落が文化の衰退に結びつき紀元前三一二世紀頃、ギリシヤ文明は下り坂に向ひます。同じ頃、今度は、ラテン語による文學が起つて参ります。このラテン文學を担つたのがローマ人であります。「アエネイス」を書いたヴェルギリウス、「變身物語」を書いたオウイディウスといった作家が現れ、一時代を畫します。しかし、私などは、此等を、皆、翻譯で讀んでゐる文でありますが、矢張り、最盛期のギリシヤ文學に比べると二番煎じのやうな氣が致します。西洋の古典學者に據ると、ラテン語といふ言語そのものがそれ程優れた言語ではなかつたやうです。模範は飽く迄ギリシヤ語にあって、ローマ帝國當時の詩人達が、ギリシヤ文學の範例に倣ひつゝ、研鑽努力を積み、ラテン語に磨きをかけていったのださうです。これらの詩人たちの非常な苦心の末に、ラテン語が、文法的にも整然とし、表現力も豊かな優れた言語になつていった。その基には、二、三百年に亙る、多くの雄辯家や詩人達の努力があつたといふ事を研究者の方々は指摘してをられます。私達の、極く初步的な西洋史の知識に照らしましても、ローマ人は、農業書や博物誌、年代記或は有名なロー



マ法といった法典等、實用的な文化には大變優れたものを生み出してをりますが、概して、文學藝術の徒としては矢張り二流であるといふ印象は拭へません。そして、略紀元三、四世紀頃、ローマ帝國も政治的に没落の道を通り、北方からゲルマンの蛮族達が侵入して来る。又、帝國の内部では、キリスト教が勢力を得て來まして、古典古代の秩序を揺がし始めます。かうした政治的變動に出會ひ、ラテン文學もやがて衰退に向つてゆくのです。そして、それに代つて登場したのが、同じラテン語で書かれたものですが、アウグスチヌスに代表されるキリスト教學です。しかし、是等の述作になると、私達にとつて、『オイディプス』や『ホメロス』などを讀んで面白いといった意味では、讀むことは出来ないやうに思はれます。このやうに、私達の直截な經驗から申しましても、所謂クラシックスとは紀元前五、六百年頃に始つて、紀元三百年、つまり、プルタルコスが『對比列傳』を書きローマ文學が終局を迎へる迄の七、八百年の間に書き著はされたものを指すと言つてよいと思ひます。

この古典文學も、その發生は、謂はば、吟遊詩人といった人々に依る口誦文學だったのでないかと言はれてゐますが、それも聽て整理され、紙に書きつけられるやうになる。これは、「パピルス」といふもの、發明に據るのです。この、ナイル川河口に生育するパピルスといふ植物を素材にした製紙法は劃期的な發明だったので、紙を漉くといふ工程を経ぬ爲に、大變粗末なものだったので。表裏兩面を使へず、本として綴じるにも弱すぎた。随つて、何枚

も繋いで卷物のやうにして保存してゐた。中には、記録され乍ら、朽ち果てたものもあつたでせう。これが、古典の受けた淘汰だらうと考へられます。次に、紀元前二世紀頃と言はれてゐますが、小アジアで羊皮紙が生れました。此の羊皮紙の發明により、西洋人は、脆く書き難いパピルスに代る、優れた書籍の素材を得た譯です。しかし、いくらヨオロッパが牧畜文化圏と言つても、羊皮紙は、パピルスに較べて遙に得がたいものであつた。従つて、パピルスに書き付けられた古傳承の詩や文章を、羊皮紙に筆写する際、大いに、淘汰選擇が爲された譯です。

それから、先程話しましたラテン文學の末期にキリスト教文學が興り、所謂、修道院運動が始る。この修道院は、實は、今で言ふ大學のやうなものであつて、當時の學問の担手でありました。この時期にも一種の、古典に對する選擇淘汰が爲されました。これには、修道院側に或る基準があり、スコラ神學の立場から採否を決してゐたやうです。それから、俗に、中世一千年と言はれる民族大移動の波が、次々と、ヨオロッパの地を通り過ぎてゆく。此の動乱期は、古典に對してのみならず、凡そ文化一般に對する一種の長い試練の時期だつたのではないかと思ひます。

次いで、ルネッサンスが始まると、またしても第三の人爲的淘汰が爲されました。この時期に古典學といふものが學問として確立し、体系化され、眞劍で、精密な古典研究の水準に照し

て、従來の古典の中から、長く傳へて後世に残すべき物と、然らざる物との選別が行はれた。更に、この時期には、グーテンベルグの活字印刷が發明されました。此の活字の發明は、書物の普及にとっては、劃期的な事でしたが、此處でも又、古典が、活字印刷による書物の形で普及し、後世に残る書物となり得るかといふ選擇淘汰が行はれた譯です。簡単に申しましたが、古典は、このやうに、いくつもの段階に亙る、嚴しい淘汰——それには、物理的試練もあれば、人爲的、學問的試練もあつた譯ですが——を経て、精選された物だけが、ルネッサンス以降、古典として残る譯であります。従つて私共が、古典を、単に古い文書といふ意味で受取ると、その古いといふ事にどれ程の意味があるのかといふ事になる譯ですが、實際に、歴史の流れに眼をとめて考へれば、歴世の人々による批判的吟味を経てえり抜き物が、古典として我々の手に残されてゐる。長い年月の批判に堪へて來た、強い生命力を、古典は持つてゐるのだと考へて良いのではないでせうか。

扱て、古典といふ言葉を、大略このやうに定義して、次に、日本に於る古典のあり方と、西洋に於る古典の在り方とを較べてみます。すると、私達は、次のやうな、少し變つた事に氣附く譯です。西洋を、現在のヨオロッパ、南北兩アメリカなど、要するに、西洋近代語を使用する人々が住んでゐる領域であるとしみますと、此處に居住する人々にとって、そのクラッシックスは果して、彼等の母國語で書かれてゐると言へるのかといふ問題が生じて參ります。我々が、

日本の古典といふ時のその在り方と對比して考へれば、この意味は、すぐ理解し得ると思ひます。つまり、西洋人がクラシックスと言ふ時、それは、外國語で書かれた書物の事であつて、母國語で書かれた書物といふ意識は稀薄であらうといふ事なのです。しかし、此處でラテン語は、譬へて言へば、日本語に於る漢文のやうなものではないかといふ對比が言はれるでせう。しかし、私は、日本人にとつて、漢文は、結局のところ外國語とは言ひ難いものだったと考へてをります。確かに、我々は、漢文を以て會話するといふ事はない。つまり、漢文は、日本語の中の文章語、別の言ひ方をすれば學問語と言つても良い、飽く迄書き言葉であつて話し言葉ではない。確かに西洋人に於るラテン語も、専門語であり、學術語であり、公用語である。しかも、彼等が、之を口に乘せて語るといふ事も十分に考へられます。現に、最近では稀になりましたが大學の記念式典の祝辭は、ラテン語で述べられたものです。又、次のやうな私自身の直截な経験もあります。私は、學生時代、ドイツに留學してをりましたが、或日、ミュンヘンからイタリアへ旅に出たのです。ベネチア行の汽車に乗込んだ譯ですが、同じコンパートメントに、恰度、ドイツ人とイタリア人の神父が乗り合はせた。そして、互ひに挨拶を交すうちに、ドイツ人はイタリア語が話せず、イタリア人はドイツ語が話せない事が判つた。そこで一人は、ラテン語をもって談話し始めたのです。そして、會話は弾み、旅は和かに續いたのです。その時、ヨオロッパの知識人階級の間根を下してゐる古典の教養に私は、初めて觸れたといふ思

ひで大變に印象深かった。しかし、これも顧りみれば何年も昔の思ひ出話であります。その後ドイツには、大學紛争が生じ、このやうな古典的教養に對する尊重の念も非常に薄れて了つたと聞いてをります。しかし、ヨオロッパの青年達の間で古典語の教養が稀薄になつてゆくといふ憂慮の聲は、實際は、十九世紀半ば頃から既に唱へられてゐたのです。古典教育を疎かにすることにより、ヨオロッパの精神的生命が衰微するといふ事を有識者達は、重大な警告として發してゐたのですが、矢張り趨勢は、古典教育の衰退といふ方向に向つてゐると言はざるを得ないでせう。

考へて見ますと、ドイツ、フランス、イギリスといった西洋の代表的國家から見ると、ギリシャといふ國は、既にもう外國なのです。顧みれば、感慨に耐へないのでありますが二千年餘り前にあれだけの繁榮を誇つてゐたギリシャ文明は、一體、何處に行つて了つたのか。現在のギリシャは、此等西洋の人々から見ると、輕蔑の對象にすらなつてゐる。地理的にも勿論、ギリシャは外國なのですが、彼等の意識の中でも遠い存在になつてゐるのです。ラテン文化の担ひ手であつたイタリア半島の住人に就いても同様の事が言へるでせう。恐らく、ギリシャ語、ラテン語といった古典語は、現代西洋では、外國語といふ意識でしか受止められてゐないやうに見受けられます。

それでは、外國語ではない各々の母國語による古典を彼等は持つてゐるのかといふ問題にな



ります。これは、勿論あるのです。しかし、先程話しました古典といふ概念の持つ基準に照して、千年、二千年もの長い間を、物理的、人爲的な種々の試練に耐へて生き残つて来た生命の長い文献といふ事になると、西ヨオロッパの中心的國々には、そのやうなものはないのです。といふのも、ドイツ語、フランス語、英語といった言語は、普通に西洋近代語と呼ばれてゐる。その通り近代の産物で、略十一、二世紀以降のものだからです。政治的には、ドイツ、フランス、イギリスといった國家は、八、九世紀に懸けて誕生し、各國、各々に、叙事詩を始め、様々な古典が残されてはゐる。しかし、そこに使はれてゐる、古代ドイツ語やロマン語、或は、オールドイングリッシュといったものは、その學問の専門家でなければ、讀めない古語なのです。彼等に、直接質問してみたわけではありませんが、彼等が讀者大衆の次元に於てこれらの叙事詩等を我が民族の古典文學といふ意識で、受止め得るかは、甚だ疑問だと思ひます。このやうに、西洋文化圏の中心的國々は、母國語で書かれた文學を古典として持つといふには至らない處がある。一方では、彼等が、普段古典と踏へてゐるギリシャ、ラテン文學からは、ますます遠ざかる一方であります。アメリカでは英譯に依つて、此等の古典を勉強するといった方法がとられてゐるやうですが、或る意味では、本来、彼等自身の古典であつた筈の文學が、外國の古典であるのだといふ意識を、この遣り方は、ますます鮮明なものにしてつてゐるのではないでせうか。矢張り、古典學といふものは、先づ第一に、古い言葉の學びでなくてはなら



ない。古代人の用ゐた、素朴ではあるが、剛直な古語の味はひといふものに直接接しなければ、古典を學んだといふ事にはならないと思ふのです。さういふ意味で、古典それ自體の教育といふものを輕視してゐる現在の西洋文化圏は、彼等自身の古典とは、次第に離れつゝあると判斷せざるを得ないと思ひます。

### 日本における古典のあり方

扱て、今度は、日本に於る古典の在り方を少々考へてみる事にします。西洋の人々が、自らの精神的傳統の根幹として誇る古典文學——ギリシヤ、ラテン文學——は、このやうに、現代西洋人にとっては、既に、外國語と化した言語で書かれてゐる譯ですが、此のラテン語に相對するものが、私達日本人にとっては漢籍であると言へませう。三世紀の末、百濟の王仁博士が論語と千字文を我國に齎した。これによつて、日本人は初めて漢字を、といふよりは、凡そ文字といふものを以て自らの記録を残すといふ技術を教はった譯です。續いて四書五經の類が齎され、日本の文字文化、延いては、言語文化が漢字、漢文に基礎を置いて發達し始めた譯です。ところが、西洋に於て、英獨佛といった國民文化が起る以前の西曆七、八世紀頃に、日本では、既に『古事記』『日本書紀』『萬葉集』といった民族文學を、所有してゐたのです。『日本書紀』

は、堂々たる漢文で書かれてをります。「古事記」も同様ですが、「古事記」になると少々變則な感じがする。しかし、それよりも重要な事は、これらの書中に挿入されてゐる詩歌の類が漢文ならぬ日本語で書かれてゐるといふのです。「萬葉集」を例に取ると、漢字を、ただ表音文字として使ひこなし、所謂、萬葉假名を用ゐる事に依つて、日本語の音表記の手段としてこれを使ひこなし、了つてゐる。則ち、日本語による文學の記録が、既に、八世紀には始まつてゐる譯です。九世紀には「竹取物語」や「伊勢物語」が生れます。この時期には、既に、假名が發明されてゐます。つまり、純然たる日本語による古典の創造が始つてゐる譯です。九百五年には「古今和歌集」が編まれてをります。此の歌集は、日本人の感情生活の重要なスタンダードになつてゐる譯ですが、さういふ意味では、正に、古典中の古典であります。それに續いて「源氏物語」といふ大心理小説とでも稱すべきものが現れました。十―十一世紀に、心理的にもきめの細い、しかも、大長編小説を個人の作家が生み出したといふ事を、ニコライ・コンラッドといふロシア人學者の意見に基づいて、一箇の世界史の奇蹟であると呼んでも良いと思ひます。このやうに見て来ますと、私達が日本の古典といふ時、その古典といふ言葉の意味合ひは、西洋人にとつてのクラシックスとは、かなりの隔りがある。私達は、餘りにも、この事實に慣れて了つて、不思議とも思はない。従つて、この事を、改めて、意識的に反省した事がないのです。しかし、西洋文化圏に於る古典の在り方や、そこでは眞の國民文學の名に値する作品

が、かなり遅れて誕生した事等を思ふ時、これと對比して、我々日本人には、古典と自分達の間に、千年以上に亙る連続性、若しくは、一貫性といふものが存在してゐるとはつきり言へるでせう。譬へば、『萬葉集』の時代から略五百年を経て、西洋でも、現在とほゞ同義の國民といふ考へ方、國語の區分が生れて來た譯です。ドイツでは、彼等が、國民的叙事詩として誇る『ニーベルンクの歌』が生れ、フランスでは、「武勳詩」と言はれる『ロランの歌』が作られました。しかし、此等も矢張り、中世ドイツ語、中世フランス語と言はれるもので書かれてをり、現在のドイツ人、フランス人が、直ちにそれを讀めるといふものではない。上智大學のピーター・ミルワード先生は、御自分の英文學史を、チョーサーから始めて、それ以前は省略してをられます。これは、随分大膽な方法だと思ひますが、自分達の現在讀みこなし得る國語で書かれた文學の出現が、國民文學の誕生であるといふ觀點に立てば、これも尤な處置だと考へられるのです。

では、我々日本人の場合はどうでせうか。私達が、日常の言語感覺、或は、言語能力で讀みこなせる文章と言へば、所謂、口語文であると、皆さんは考へるかもしれない。中學校などでは、文語文と言へば、古文の範疇に入れられて了つてゐる。しかし、これは随分おかしな事なのです。先程の、中世ドイツ語と近代ドイツ語の間にあるやうな、根本的な距離感といふものが、口語文、文語文の間にはないのです。強ひてその懸隔を言へば、それは、文章表現の差に

過ぎないのです。その證據をいくつかあげれば、一つに、現代でも、文語文で文章を書く人はいくらでもゐるといふ事があります。例へば、吉田満氏の「戦艦大和ノ最期」といふ作品があります。當時廿歳といふ若さで大和に座乗し、九死に一生を得た吉田氏が、自らの經驗を昭和廿年に、一氣に書きあげたものですが、實に立派な文語體で書かれてをります。もっと卑近な例を挙げますと、和歌を作る方々がさうなのです。現在でも、實に多くの日本人が、平生の營みの中で和歌を詠んでゐる譯ですが、その大半の方が、文語を用ゐてゐる。又、文語で詠まれた歌を抵抗なく味はふ事が出来てゐるのです。更に、百人一首の話を持出しますと、一般の家庭でかるた取を遣りますと、斷然若い人が強い、端的には、子供のはうが強い。あの百人一首の中には、子供には、實は理解出来ない様な難しいものも多いはずだと思ひますが、聲に出して、口調が滑らかで三十一文字を、すつと口にし得るから、意味も知らずに暗記し得る、さういふ事があると考へます。又、以前、私の家に子供が出来た時に、田舎から、ある老婦人に手傳ひに来て貰つた事があるのですが、その小母さんが、「しろがねもこがねも玉もなにせむに勝れる寶子にしかめも」といふ山上憶良の歌を口遊みながら、赤坊をあやしてゐました。特に國文の素養のある人とも思へませんでした。何の銜てらひもなく、萬葉の歌が、口を銜てらいて出て来る。この古歌はつまり民衆の心の中に生きてゐるのですね。

このやうに考へてみますと、日本の古典を形成する言語は、現代の人々の心の中に、決して

特殊な教育等が必要とせず、いつでも、甦へることが出来るものだと言へると思ふのです。これを一言で言へば、西洋に於るのと異なり、日本では、古典と現代人の間に、言語の一貫性による連続があるといふことになるかと思ひます。

古典と私たち——「古事記」を中心に——

では、此處で「私たちと古典」の内面的な繋りを考へてみたいと思ひます。「古典」とは、換言すれば、我々の祖先が、事に觸れ、物に出會ひ、如何に感じ、如何に考へ、そして如何に行動したかの記録であります。しかし、これは、単なる記録、所謂、資料といったものではない。言葉で記され、文章の體を爲してゐる以上、古典は、単なる情報を傳へる乾いた文字の羅列ではなく、それを傳へてゐる、個性的な文章の姿とでも言ふものを備へてゐる。この文の姿とは何かといふ事は、微妙なもので一言では盡し得ません。論理的に筋を辿る事は出来ませんが、殆んど直観によつて、文の姿とは、則ち、人の心の姿の表れであると定義したいと思ひます。此處迄讀み取るのが、古典の學びといふ事だと思ふのです。これが、文章が何を語つてゐるかといふ事のみを問題にしてゐる現在の歴史學と古典學との大きな隔りだと思ふのです。古典の學びに於ては、何を語つてゐるか丈ではなく如何に語つてゐるかを味讀し、其處に表れて



るる古人の心の在り方迄を讀み込む事によって、初めて、私達は、古典に親しむのだと言ひ得るのだと思ひます。

では、何故、私達は古人の心の姿を讀みとるといふ事を求めるのでせうか。思ひ切つて申せば、それは、この私自身が、一體何者であるのかを知る爲なのだと思います。常識の平面では、自分を最もよく知るの自分である、少くとも意識の表面ではさう言へるでせう。しかし、人間は決して、意識のみで成立つてゐる譯ではない。自分を成立たせてゐる精神的原形質とでも言ふべきものがあるのです。人間の資質には、確かに教育や學習によつて後天的に開發されるものもあります。しかし、それ以前の自分が一體どのやうにして形造られたかを考へてみる事はないでせうか。これも常識的に考へれば、親から受繼いだのだとも言へる。では、その親達の精神の原形質はどのやうにして作られたのか。矢張りその親から受繼いだ資質によつて形成されていったと考へられるでせう。つまり、私達の中には、多くの祖先の精神的原形質が蓄積されてゐる。自分自身の發祥は、尋ねてみれば、相當古い起源を持つものだと言へるのではないでせうか。斯様な問ひは、非常に素朴なものではありませんが、これが言ふなれば、自分との出會ひ、私を私たらしめてゐるものとの出會ひの第一歩であり、遠い先祖から代々傳へられて徐々に蓄積され、この私といふ存在に於て發現したものの、私達が、日常、餘り反省せずに見過してゐる精神的原形質へ推參する端緒なのです。此處で一つお斷わりしておきますが、今迄



申し上げた事は、所謂、個性といふ問題ではないのです。さういった個人の特殊性といふ事ではないが、又、勿論人間の生物學的普遍性といふ事でもない。言ふなれば、自分が有してゐる國民性、民族性といふものが、一體、何處から生れて來たのかといふ問ひかけだと言へると思ふのです。

では、此處で、私達が、自らの精神の原形質を求めらうへで、最も古い標とも言へる『古事記』を例にとつて、少し御話し申し上げます。

伊邪那岐、伊邪那美といふ二柱の神が夫婦の契りを交し、やがて死別するに至る話は、皆様も御存じでせうが、伊邪那岐命が、黄泉國に伊邪那美命を訪ね、その穢れに觸れて逃げ戻つて來る。そして日向ノ橋ノ小門ノ阿波岐原で、その穢れを落す禊をする。その時、身につけてゐた物を脱ぎ棄ててゆく譯ですが、其處から次々に新しい神々が生れて來る。そして、最後に「左ノ御目ヲアラヒタマヒシ時ニ成リマセル神ノ御名ハ天照大御神。次ニ右ノ御目ヲアラヒタマヒシ時ニ成リマセル神ノ御名ハ月讀命。次ニ御鼻ヲアラヒタマヒシ時ニ成リマセル神ノ御名ハ建速須佐之男命」と「三貴命」が誕生する譯です。扨て、この須佐之男命は、父伊邪那岐命から、海原を治めるよう命ぜられるのですが、彼は、亡き母伊邪那美命を慕つて「根ノ堅洲國ニ罷ラムトオモフガユエ」に日がな泣きしきつて、一向に責務を果さうとしない。伊邪那岐命は、それを女々しい振舞として許さず、追放してしまひます。餘談になりますが、須佐之男が泣き續け

る處の原典の記述は、「其ノ泣キ給フサマハ、青山ヲ枯山ナス泣キ枯シ、河海ハコトゴトニ泣キ乾シキ」となつてをります。これを、古に火山の噴火があり、その爲に草木が焼かれた。或は、火山灰で川や湖が埋められて了つたことの比喻であるとする解釋が、寺田寅彦博士によつて提唱されてゐます。このやうに、現代人の合理主義に照して辻褃を合はせる、所謂、神話の合理的解釋は、現代の神話學の一つのテクニクになつてをります。しかし、今、私共のやうとしてゐる事は、全く、それとは別な事なのです。飽く迄も、古代人の心の投影として「古事記」を讀んで參ります。さういふ風に、合理的解釋などといふ事にかゝずらはないでこの話をそっくりその儘受け取ると、これは、現代の私達の周りにもありさうな話だと思へて來ます。幼い時に母を亡くし、その面影を知らない青年が、母を戀しがって、父親から命ぜられた仕事に手につかないでゐる。そして嚴しい父は、その子を勘當して了ふ。このやうな話として、直截に私共の心に入つて來ます。

扱て、追放された須佐之男は、姉の天照大御神を訪ねます。彼は、「荒ブル神」とも言はれた神で、「天ニ參上リマス時ニ、山川ハコトゴトニ動ミ、國土ミナ震リキ」といふ事になる。これに驚いた天照大御神は「我が那勢ノ命ノ上リ來マスユエハ、必ズウルハシキ心ナラジ。我國ヲ奪ハムトオモホスニコソ」と考へ、嚴めしく武装して持ち受けます。對した命は、「僕ハ邪<sup>ヤ</sup>心<sup>ココロ</sup>ナシ」、何故、父から追放になつたかその事を話さうと上つて來たのだと、自らの潔白を語り

ます。そして、互ひに「宇氣比」といふ儀式を行なひ、天照大御神は、須佐之男の潔白を認めます。しかし、これに乗じた須佐之男は、驕りが昂じて「天照大御神ノ營田ノ阿離チ、溝埋メ、亦、大嘗キコシメス殿ニ屎マリ散シキ」と言ふ大變な無法を働く。これに對して、高天原の統治者である天照大御神が如何なる處置を取るであらうかといふ事が讀者の興味となる譯です。意外な事に、天照大御神は大變寛大なのです。「カレシカスレドモ、天照大御神ハトガメズテ告リタマハク、屎ナスハ酔ヒテ吐散ラストコソ。我が那勢之命カクシツラメ。又、田ノ阿離チ、溝埋ムルハ、トコロアタラシトコソ我が那勢之命カクシツラメ」と言つて、弟の悪業を言ひ繕ひ、これを庇ふのです。これも譬へてみますと、母に死別し、父からは嚴しく責められ「お前は、無能だ。怠惰だ」と言つて勘當された青年が、氣持ちが荒んで非行を働く。ところが、その姉は、人柄の練れた優しい方なものですから、よく耐へて、寛大に見守つて、弟の非行を庇ひとりなしてやる。さういふ形に見えて來る譯です。大變人間らしい情景であると思へるのです。

しかし、天照大御神は須佐之男の姉であると同時に、高天原の統治者でもある。従つてこの須佐之男の反社會的行爲を、身内の者だからと言つて庇つてゐるばかりでは、統治者としての責任は果し得ない。そして、須佐之男の乱行は、増々、エスカレートしてゆく。天照大御神が、忌服屋といふ、神に奉る衣を織る機屋で、機織りの監督をしてゐる時に「ソノ服屋ノ頂ヲ穿チテ、天斑馬ヲ逆剥ニ剥テオトシ入ルル時ニ、天衣織女、見驚キテ梭ニ陰ヲ衝キテ死キ」と言つ

た、殘酷強烈な所業に及ぶ。流石に、天照大御神も、寛容と忍耐の限度に至ります。それで、自分の權威を發動して、弟の乱行を斷固處罰するかといふと、又しても、さうはならないのです。その氣力と實力は十分に持ち合はせてゐるであらうと考へられるのですが、その力を發揮せず、「カレ是ニ天照大御神見畏ミテ、天石屋戸ヲタテテ、サシコモリマシマシキ」といふ事になる。この「見畏」といふ言葉に就いて、本居宣長は、古事記傳の中で、「見畏とは、荒き所行を見て畏懼おそれて、天石屋トモリマスに隠こもり坐すなり、書紀には、由レ此發慍ニイカリマシテ云々と有」と「恐れて」といふ言葉を目直に受け取れと書いてをります。しかし、私は、単に恐れ戦そのいて身を隠したといふやうには受け取れない。暴状を正視するに堪へかねてといふ一種の倫理的潔癖感と共に、自分にそれを抑へる力がないといふ自覺が混淆したものだただらうと思ひます。しかし、これでは、無法者を放置した儘になつて了ふ。世間の側から言へば、統治者には、相應の責務を果して貰ひたい。つまり、法の權威を確立して、無法者を取押へるといふ正義を實行して貰はなければならぬといふ要求がある譯です。それには、意氣地なく自己否定して了つた統治者に翻意を促して、權威を回復を圖つて貰はねばならない。そこで、御存知のやうに、天の岩屋戸の前で神々の宴が催され、その賑やかさに乗せられて岩戸から顔を出した天照大御神を、素早く引張出して、闇となつてゐたこの世に光を回復するといふ事になつてゆく譯です。そして「是ニ八百萬神、共ニ謀リテ、速須佐之男命ニ千位置戸ヲ負セ、亦、鬚ヒゲヲ切り、手足ノ爪ヲモ抜カシメテ、神ヤラ



ヒヤラヒキ」と、須佐之男を高天原から追放して了ふのであります。この経過を見てみますと、秩序を維持する側の對應は、私共の目から見て少し弱腰ではないかと思へる程、消極的です。そして、それを受けて、次に、八百萬神——言ふなれば、大衆とでも考へて良いでせうが、その大衆の側から自發的な秩序と權威回復の試みが行はれる。以後、須佐之男命の追放と量刑に至る迄、八百萬神の總意として事が進んでゆきます。結果から見ると、統治者である天照大御神は、自分一個の權威をもつてしては、當事者双方を納得せしめ得ないやうな深刻な問題を、解決するに當つて全體の責任に於て決斷させ行動させるといふ方法を取つた譯です。これを直ちに、日本人の政治意識の原型云々と言つた言痛こちたき議論にする心算つもりはありませんが、種々面白い事を想起させる話だと思ひます。しかし、何と言つても肝心な事は、このやうに、古事記の世界の神々の心と行動が 私達に、實によくわかるといふ事なのです。我身を振返へれば、皆、これと似た經驗を有してゐるのではないか。或は、直接自分の經驗ではなくとも、周圍の出來事に、これと通ずる經緯があつたと思へるのではないでせうか。誰もが、困惑する指導者天照大御神になつたり、或は、荒ぶる須佐之男命になつたり、又、合議を行なひ、秩序を回復しようとする八百萬神の一人になつたりする筈です。これらの古典は決して戒めや教訓として書かれてゐる譯ではない。たゞ、生じた事實をありのままに記してゐるに過ぎないのですが、その記述の中に私達が、自分の行動の原型を見出す。或は、心のあり方の原型を見る。そこには、

恰も鏡を見るかのやうに自分の姿が写し出されてゐるといふ事は、大變重要な事と思ふのです。このやうな事は、正に自分達の言葉で書かれた、自分の民族の古典との間にしか起り得ないことなのです。譬へば、ギリシャ神話に見る。凄慘な非行に對する復讐、或は、イスラエルの古典である『バイブル』の『出埃及記』中にある「我れエホバ、汝の神は妬む神なれば、我を憎む者に向ひては、父の罪を子に報いて三、四代に及ぼし」といふ激しい言葉など、實に、私たちがこの隔りを感じずにはゐられません。人倫の秩序を維持し、社會正義を實現せしめるといふ目的は、人間の社會であれば、何處も同じでせうが、それを遂行するエホバの神の遣り方は、誠に峻嚴そのものである。論理の筋は通つてゐるが、人間の所業としては、餘りに苛烈であります。即ち、妬む神のする事であります。斯様な妬む神を我々の神話は知らないのです。更に、その妬む神は、甚だ苛酷に、人間に犠牲と獻身を要求し、神の心に叶はぬ時は、容赦なく人間の命を奪ひます。勿論、此處で信仰の問題は別の次元であります。このやうな事をもってキリスト教の倫理を誹謗する積は全くありません。たゞ、私達は、異民族の古典の中には到底自分達の行動の原理が写されてゐるとは言ひ難い、そして、日本の古典には、自らの姿が活写されてゐると思ふ事が屢々であると申し上げたい譯です。

扨て、もう一つ『古事記』に例を採りませう。これも皆さんよく御存知の大國主神の「國讓」の神話です。高天原を追放になつた須佐之男命は、出雲に降りたち、櫛名田比賣を妻に迎へ、



堅實な國土經營を行つてゆきます。二人には、須勢理姫といふ娘があつたのですが、大國主神が、様々な試練に耐へて、この姫と結ばれるのです。そして、義父に當る須佐之男命から、出雲國を繼承し、苦勞を重ねながらも、新しい國造りに勵むのです。漸くその事業も軌道に乗つた時に、突然、高天原の使者として、建御雷男神が、出雲に下つて來ます。そして大國主神に對し「天照大御神高木神ノ命モチテ問ニ使ハセリ、汝ガ領ケル葦原ノ中ツ國ハ、我が御子ノ治ラサム國ト言ヨサシタマヘリ、カレ汝ガ心イカニ」と迫ります。随分強引な交渉であり、理不盡であるとしか言ひやうがない。これに對し、大國主神は、これをきっぱりと退けるどころか、息子たちに意見を求めるとして態度を保留します。彼には二人の男子があり、一人は、事代主神、一人は、建御名方神と言ひますが、この事代主の方は「カシコシ、コノ國ハ天ツ神ノ御子ニ獻リタマヘ」と、極めて素直に答へる。しかし、建御名方は「誰ソ我が國ニ來テ、忍ビ忍ビカク物言フ、然ラバ力競ベセム」と勇しいのですが、これも實際には、徹底して、建御雷にやられて了ふ。かうして、建御雷は、再び大國主神に「汝ガ心イカニ」と迫るのです。それに對する答を、『古事記』では、何の説明的言辭も用ゐずに、その儘、大國主神の言葉だけを記してゐる。しかし、それをよく讀めば、大國主神の心は、實によく表現されてゐるのです。彼は、かう答へます。「僕ガ子ドモニ神ノマヲセルマニマニ、僕モ違ハジ。コノ葦原ノ中國ハ、命ノマニマニ既ニ獻ラム」二人の子が同意して了つた以上、もうどうにも仕方のない事だ。此迄、

國土の開拓と經營に努力して來たが、この國土とその領民をあげて天つ神に御譲り申し上げるといふ答をする譯です。餘りに恬淡すぎて、何か敗北主義的な感じすらする。しかし、私は、この大國主の何のこだはりもない言ひ様からしても、この國土を統べるものとして、彼我の何れが適任であるのかといったことに対して、彼には、公平無私な判斷があつたと思へてならないのです。

更に、彼は、かう續けます。「タゞ、僕ガ住處ヲバ、天ツ神ノ御子ノ天津日繼知ラシメス、トダル天ノ御巢ナシテ、底ツ石根ニ宮柱フトシリ、高天原ニ氷木タカカシリテ治メタマハバ、僕ハ百足ラズ八十桐手ニ隠リテ侍ヒナム、亦、僕ガ子等、百八十神ハ、スナハチ八重事代主神、神ノ御前トナリテ仕へ奉ラバ違フ神ハアラジ」この言葉の解釋には異説が多く、一定してゐないのですが、極く素直に説明しますと、大國主神は「國譲り」の代償として何等現實的な補償は要求しない。たゞ社を造つて、其處に自分を祭つて呉れといふのです。さうすれば、自分は、現世から最も遠く離れた處に住むことになり、新しい國の邪魔を決してしない。いや、姿すらも現さない。又、我子には、一族の統率者として、新しい統治者に仕へる事を命じませう。かういふ意になるかと思ひます。この出雲の神の親子は、これで有形の所有を一切失ふ事になる。しかし、強壓的な天つ神の子孫に對しておとなしく服従し、國の平安を第一に重じてこれを亂さず、最後には、自分が神と祀られる事によつて道義的には、勝利者となつてゐるのではない

かと、私には思へるのです。私事に涉り恐縮ですが、幼い頃、私は、何度もこの話を父に聞かされた事があり、深く記憶の底に残ってゐたのです。ところが、これははるか後年になって知ったのですが、恰度、その頃、父は、一種の財産競ひに卷込まれて、大變困憊してゐたのでありました。そして、父は、その争ひに於て、財産を保全するよりも、人と争はぬといふ心の平安をとつたやうです。子供に向つてといふよりは、自分自身に向つて、大國主神の話を聞せながら自らの行ひの證あかしとも慰めともしてゐたのではないかと思へるのです。

このやうに、古典は、私達に、自らの行動の自然さ、或は、必然性の保證、つまり、何故自分はこのやうに振舞つたのかといふ事に就いての説明を與へてくれるやうなところがあるのです。結局、自分自身のあり方や行動の解明を古典が行つてくれてゐるのです。これは、八世紀に成立した古典と現在の我々の心が繋つてゐるといふ事の生きた證ではないでせうか。

我々は、民族全體として大難に遭遇もすれば、一人の日本人として些かな事に心を惱す事もある。そのやうな、ある意味で、危機的な瞬間に、我が民族の歴史を振り返ると、其處には、古典といふ一本の道が連つてゐる。この古典は、決して私達に此方へ行けと指圖したりはしない。たゞ、在るだけなのです。しかし、それ丈で、私達は、自らに降りかゝつた艱難が、決して自分一人のものではない。自分が初めて経験した事ではないと知るのです。そのやうな時、私達は、自分自身の精神の原形質といふものに觸れてをり、自らの出自が、明らかに成つてゆく譯



です。

### 古典と私たち―その美的側面―

今迄、私は古典と私達との倫理的な意味に於る關りを御話して参りました。そこで、最後に、古典の美的側面も、矢張り現代に息衝いてゐるのだといふ事を御話しておきます。今日八月八日は丁度立秋の日であります。昨日も夏らしい夕立があり、今朝も入道日も夏らしい夕立があり、今朝も入道日の上では、既に秋が立ってゐる譯です。

雲が立昇るといふ、誠に夏らしい爽快な時候ですが、「古今集」卷四、藤原敏行朝臣「秋立つ日の歌」

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

といふ有名な歌は、皆さんも御存知の事と思ひます。私は、少年時代に初めてこの歌に觸れた

時、その繊細微妙な感受性に、呪縛されたやうになつて了ひ、その後暫くは、この歌から離れられなくなつてをりました。中學に入りまして、子規の「歌よみに與ふる書」を知り、文中に「貫之は下手な歌よみにて、古今集は下らぬ集にこれあり候」といふ衝撃的な宣言がある事を知りましたが、この子規の激しい改革的情熱にあふれた論文によつても、敏行朝臣の歌は、かすり疵一つも蒙らなかつたといふ印象が、私にはあります。何故なら、この古歌の歌つてゐる経験は、私の現實的経験とびつたり一致するからです。子規の古今集攻撃を無言のうちにはねかへしてしまふやうな、實感に基く強さが感じられたからです。毎年今頃は實は夏中でも最も暑い季節です。木の繁りも、まるで黒く見える程、濃い緑を見せてゐる。空は飽く迄碧く、雲は陽を照り返して白く眩しい。ものみな全て夏であります。しかし、朝晩に吹く風、といふよりは、實に微かな空氣の動きに、昨日迄とは違った氣配を感じる。さういふ事が、私達にはわかるのです。又、「古今集」に於るこの「秋立つ日の歌」のすぐ前の歌は、凡河内躬恒の「水無月の晦の日に詠める」と題した。

夏と秋と行き交ふ空の通ひ路は片へ涼しき風や吹くらむ

といふものです。今年は、舊曆の立秋と六月卅日が重なつて、この歌も、矢張り、今頃の季節を詠んだ歌になる譯です。日本文學に表現された氣象に就いて研究してをられる群馬大の高橋



和夫先生が、この歌は、夏と秋とが交錯する季節の空の姿を、觀念的に表現した歌ではない。作者の精密な觀察に基いた歌であると評價してをられます。その説明によりますと、この時節、北からは、高度一萬米程の處を、その南縁に卷雲を棚引かせた寒氣團が南進してくる。又、高度二、三千米の處には、積雲を流しながら、小笠原高氣壓が、次第にその勢力を弱めてゆく。これを地上から仰ぎみると、兩者の雲の性情と高度が異なる事に、それらが、二筋に行き交ふ空の通ひ路として、眼に映ることがあるのだと記してをられます。平生から、鋭敏な眼で空を見てゐた歌人は、この事を経験的に知つてゐたのだらうと思はれます。今は、僅か二つの歌を引いた丈ですが、現代に生きる我々も、日本といふ同じ風土にある限り、千年も以前の古人と全く同じ感受性を以て自然の現象に對し得る。つまりは、自然に對する感性、自然の姿や動きのどの部分を美しいと感じるかといふ契機が、驚く可き連續性を保ちながら、私達の内面に沈潜してゐると言へるのです。『古今集』の歌人達の非凡な感受性に驚くと共に、それに共感し得る感性が、私達一人一人の中に、知らず識らずの裡に育てられてゐる事實にも、私は、深い感慨を抱かざるを得ません。私達は皆、不斷に流れ來り、流れ去る時間の中に、有限の存在として生きてゐる。しかし、平生、此の無限の流れを、私達は、觀念的思辨のみで捉へる事は、決して出来ない。矢張り、膚で感じる具體的な現象を通して、私達は、悠久を感じ、又、自らの有限を知り得るのです。經巡る季節の微妙な變化を感じ得る、祖先からの一貫した感性は、



悠久の時間の中で、各人が、限りある生を生きてゐるのだといふ自覺に、私達を導いてゐると思はれてなりません。そして、この自覺は、一人一人の生を深化させる意味で、大變重要な事だと思ふのです。日本の古典は、この事を、言<sup>こと</sup>痛<sup>ちた</sup>き哲學的文辭を以てではなく、簡潔で美しい言葉によって、教へてくれてゐるのです。



■ 古典輪読と短歌創作



「聖徳太子の

信仰思想と日本文化創業」

— 班別輪読のための導入講義 —

開発電子技術㈱ 取締役

長 内 俊 平



松陰神社から見た吉田松陰幽囚の間

はじめに

聖徳太子について

黒上正一郎先生並びに本書の由来について

聖徳太子拾七條憲法について

輪読について



は　じ　め　に

昨晚の占部君の話、そして先程の齋藤先生のお話をきいた感動がまだ胸の中に渦巻いてをります。

齋藤先生は、お話の終りに近く「美しい國、美しい愛の國」と言はれましたが、あのときの先生のお言葉の美しかったこと。桑原さんといふ私どもが尊敬してゐる先輩が、「美しい物は美しい精神から生れる」（國文研叢書「國史の地熟」はしがき）と言はれました。

齋藤先生のある「美しい國、美しい愛の國」と言はれた、あの美しい言葉、そして、「ああ堂々の輸送船」を唱はれたあの声音、調べ、響き、それは齋藤先生の美しい心から生れたものと思ひまして、感動を久しくした次第であります。

それと同時に、「美しい愛の國」といふお言葉から、聖徳太子がおっしゃられた「自他の二境を等しうす」（維摩經義疏文殊問疾品）（本書六十八頁、八十六頁、九十七頁ほか）といふお言葉が浮んで参りました。「美しい愛の國」といふのは、他人の悲しみがわが悲しみとなる、他人の悲しみを見てゐると自分の胸が痛くなる、他人事と思へない、さういふ風に同胞の心がつながり合つてゐる國をいふのではないかと感じたからであります。

実は、こちらへ参る前に児島乙子さんといふ方の詩を読んで大変心をうたれたのであります。その詩は「肝苦りさ」と題する次の様な詩であります。

「肝苦りさ」いふのは 沖繩の言葉で

「胸が痛い」いふことなんやて

沖繩には「可愛想」いふ様な

同情の言葉はないんやて

他人のことを自分のこととして

初めて言へる「肝苦りさ」

私はこの言葉を心から言へる様になりたい――

といふのであります。沖繩は大和言葉の宝庫といはれてゐます。ここで児島さんが言つてられる「同情」といふのは、相手の悲しみが解るといふ段階で、相手の悲しみで自分の胸も痛くなる、他人事と思はれないといふ状態まではいかないのを言ふのでせう。「同情」といふのは、もつとはっきり申しますと、いつでも逃げられる立場にあるわけです。自分が何か責任をとらなければならなくなると、「俺は知らんぞ」と言つてさけられる距離にゐるわけです。その



同情の世界に留まらない「肝苦りさ」といふ世界が、太子のおっしゃられる「自他の二境を等しうす」「群生と苦楽を共にす」（維摩経義疏文殊問疾品）（本書八十六頁、九十七頁ほか）といふお言葉の意味する世界だらうと思ふのであります。

この精神はさらに遡って、天照大御神のお言葉に伺ふことが出来ます。古事記の「國譲り」のところですから読んでみます。

——ここに天の鳥船の神を建御雷の神に副へて遣はす。ここを以ちてこの二神、出雲の國の伊耶佐の小浜に降り到りて、十掬の劍を抜きて浪の穂に逆に刺し立てて、その劍の前に踏み坐て、その大國主神に問ひたまひしく「天照らす大御神高木の神の命もちて問の使せり、汝が領ける葦原の中つ國に、我が御子の知らさむ國と言よさしたまへり。かれ汝が心いかに」と問ひたまひき——とあります。若い諸君だったら血湧き

肉躍る様な文章でせう。

このなかの「領く」と「知らず」が私が申しあげようとしてゐるところなのです。元侍従次長の木下道雄先生が、『皇室と國民』と題する本の中で（同書八十二頁）本居宣長の言葉を引いてをられますので読んでみます。「知らず」とは「人が自己以外の外物と接する場合、即ち見るも聞くも嗅ぐも飲むも食ふも知るもみな自分以外にある他の物と我とが一つになること、すなはち自他の区別がなくなつて一つに溶け込んでしまふこと」である。一方「領く」といふのは、或る地方の土地、人民を我が物として即ちわが私有物として領有支配すること——である。即ち「知らず」といふのは、他のものと我が一つになる、自他の区別がなくなる、一つに溶け込むといふ世界でありませう。この世界を木下先生は次の様な美しい言葉で表現してをられます。即ち——己を空しうし、祈りのこころをこめて相手方と溶け合はうとして努力を惜しまぬところに足音もなく、そよ風の如く静かに訪れきたる「和の姿」をわれわれの祖先は「しらす」といふ僅か三文字を以って心のうちに呼び求めたのである。——と。さういふ日本の文化伝統の上に立って、聖徳太子は当時の儒教と仏教を攝取され、この日本の國礎を固められた。その御精神の根本を貫いてゐるものが、簡単に申しますと、「自他の二境を等しうす」といふお言葉なのであります。

さて今朝は、実によく空が晴れて爽やかな朝でしたね。昨夜は眠れなかったのでよく知って

りますが、丁度東雲しのめが薄明るくなる頃になりますと、ひぐらし（かなかな蝉）が鳴くんですよ。不思議なことにあの蝉は夜が明けてしまふともう鳴かないですね。薄明るくなる頃鳴いて、小鳥達にバトンタッチする。とにかく本当に清々しい朝でした。そして非常に嬉しかったのは、朝の行事の広場に行きますと

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな

の「天」と題する 明治天皇御製（明治三十七年）の轍が立てられてをったこととあります。実はこの間、黒上先生の本を読んでをりまして、この御製について、ふっと感ずることがあったのです。それで家内に、この「ひろき」といふのはどういふことをおっしゃってをられるのだらう」と問ひました。家内は丁度台所で朝食の用意をしてをったところでありましたが、拘泥こだまりがないこととせうね」と答へました。ははあと思ひましたね。「いいところに気がついてゐるなあ」と。しかし私は丁度黒上先生の本から教へられるところがあつたばかりですので、さらに、ぢゃこだはらない気持になるにはどうしたらいいのかね」と聞きました。家内は、しばらく考へこんで返事をしませんので、おもむろに、自分ほど至らぬものはない、愚かなものはない、自分程罪深いものはない、といふ痛感があれば、人を見下みくだしたり、ひとを責めたりする心もなくなり、ひとと心を開いて話せる様になるんじゃないかね」と言つてやりました。



私は、御製の「ひろき」といふお言葉の意味するところを、黒上先生の本を通して、聖徳太子の御ことばからその様にいただいたわけなのであります。

御本の三十三頁を開けてみて下さい。七行目から読んでみます。

「太子が勝鬘經義疏に一乗の體は智解ちげと善とその何れを本とし何れを末とすべきかについて、当代大陸の学説が多く智解を本とするを批判し給ひ、善を本とすべきを示して『若し智解を以て乗と爲さば、則ち乗の名廣ひろからず、善は即ち乃至一たび南無と稱するも是れ善に非ずといふことなし。故に乗の名は即ち廣し』と仰せられ、この廣ひろき道を取るべきを示されたるは、正しく万善同歸の教義を攝取したまひし内的根據を示すものである」

この万善同歸の教義といふのは、釋迦が法華經に於て宣説された一乗因果の大理をいふのでありますが、黒上先生はこのことについて今読みました個所の少し前のところで「太子に依ればこの一乗を体現するには即ち衆生の一心に万善を修するを根本となし一切衆生はその能力・地位等に相違ありとも、その『善』は悉く至徳の佛心に通入すべきことを『万善同歸』とされたのである」と述べてをられます。

黒上先生のお言葉によりますと、「智解を以て乗となさば」即ちいろいろ勉強を積んで宗教的大道を了得しなければ、仏の世界に入れないといふふうふうに解釋するならば、「乗の名は広ひろからず」即ちそれだったらお百姓さんだとか漁師の人たちは仏になれないんぢやないか。だから



「乃至一たび南無」と稱へても、即ち心から仏を信じて、眞心から稱へるものであれば、ただ一度南無仏と稱へても、仏が嘉みしてくださるんだ、仏になれるのだ、といふ風に解さなければ、乗の名は広いことにならないのだと太子はおっしゃってをられるのです。

先程から、明治天皇の「天」と題する御製を皆さんと共に拜誦して参りましたが、聖徳太子の御言葉を勉強してをりますと、明治天皇が「ひろき」とおほせられるお心の、深い意味あひの幾分でも分つて来るといふ楽しさを味はふことが出来るのであります。これが古典に学ぶといふことだらうと思ふのです。

ちなみに、聖徳太子の御親筆の法華義疏は、明治天皇がおなくなりになるまで御自分の御居間に置かれたときいてをります。

### 聖徳太子について

太子のことにつきましては、本書の「序説附、聖徳太子の体験過程」並びに「参考資料（その三）」の二、聖徳太子の時代についての解説（高木尚一）にゆづりまして、太子をお偲び申しあげるよすがに二つばかり申し上げておきます。

その一つは、太子さまが亡くなられたときにどれほど人々が悲しんだかといふことでありま

す。夜久先生が、日本書紀のそのことを述べてゐる文章を『アカネ』といふ雑誌のなかで、分りい様に現代文に直してをられますので読んでみます。

「この時、諸々の皇族方、諸々の臣下たち、天下の人民すべて皆、大人たちは、親は愛児を失った様に落胆して、物の味さへわからなくなってしまうひ、子どもたちは可愛がつてくれた父母を失ったやうに哭き叫ぶ声が道にあふれた。田畑を耕す男は鋤をとる力もなく、稲を白で杵く女は杵の音をさせなくなりました。皆言ふのである。『日も月も光を消してしまった。天地ももう崩れてしまふ。今から後誰をたよりにしたらよいのだらうか』——と。」

読んでいるだけでも我々の祖先の悲しみの声が聞えて来るやうな気がします。

ところがその悲しみを共にした人が外國にも居たのです。太子が二十二歳の時高麗から日本へ帰化し、太子に仏教を教へられた僧惠慈といふ方です。惠慈は太子が四十四になられた年、太子の御製疏を宝の様に抱いて帰國したのでありますが、太子がお亡くなりになったことを聞き「今太子は既におなくなりになりました。私は國を異にしてゐるが、心の交はり金を断つほど厚く強い。これから独り生きてゐても何の甲斐もない。私は来年の二月五日（太子の御命日）に必ず死なう。そして上宮太子さまと浄土でお会ひして一緒に衆生を教化しよう」と言はれてその予告した日に亡くなられたのです。

太子さまを慕はれて外國の方が、しかも先生がお弟子さんのあとを追って死んでゆく。聖徳

太子さまは一体どんなお方であられたか。これらのことから推測するに難くないのであります。いま一つは、太子薨去後二十一年たちましてから、太子のお子さまの山背大兄王が、入鹿のために攻められます。臣下の者達は、軍隊を募って戦へば必ず勝つから戦ひませうといふのをおきき入れにならず、「一身の故を以て豈万民を勞せむや」「夫れ身を捨てて國を固くせむは亦丈夫ならざらむや」と言はれて、御一族ごとく自害なされたのであります。この二つのことだけをお伝へして、聖徳太子さまの紹介を終らうと思ふのです。何故事実だけ申し上げたかと申しますと、この事実といふものが、じっと見てゐますと実は何ものにもまして、ものを語るものだからであります。『國民同胞』八月号に夜久先生が、事実の重さといふことを書いていらっしやいますけれども、事実をいろいろ意味づけて、我々みたいなものがいくら説明したところで、いよいよ、眞実から遠ざかってゆくばかりです。事実といふものは、じっと見つめるべきものなのです。さうすると事実が、大事なことを物語ってくれます。そんな訳で事実だけを述べた次第であります。

太子につきましては、これからまたご本を読みながら、その信仰思想を通してお人柄に触れて参りますので御紹介を終り、本書の著書黒上先生と本書の由来について一寸申しあげませう。

黒上正一郎先生並びに本書の由来について

大正十五年二月十一日（紀元節・今の建國記念の日）に、旧制一高（今の東大の前身）に沼波武夫（瓊音）先生といふ方が瑞穂会を作られます。その瑞穂会設立の趣旨はその趣意書に（これは小田村先生が國文研の成り立つ迄の歴史を書かれた『昭和史に刻むわれらが道統』といふ本の二百三十二頁に載せてあります。「もとより子を執って姦を斬るは我等が事に非ず、正義を街頭に叫んで衆を激するは我らが事にあらず、学窓堆書のうち、我らが爲さんと欲するは、爲さざるべからずと信ずるは、根本の確立なり。即ち皇國千古一貫の生命たる日本精神の把持是也。生涯を貫く刎頸の交はりを遂げ、各々最善を盡してこの重任を果さむことを誓ふ。」といふ一文がありますが以てその志が奈辺にあつたか偲べれると思ふのです。さういふ趣旨で一高に瑞穂会が出来ます。ところがこの沼波先生は、次の年の七月に患つてをられた肺癌のために瑞穂会の事務所でお亡くなりになるのです。黒上正一郎先生はこの瑞穂会に属してをられたのですが、先生は沼波先生の逝去を悼み次のやうな追悼文を認めてをられます。

「自分が沼波先生の御ことを偲ぶ時常に強く思ひ出さるるのは、西片町（本郷）のお宅で初めてお目にかかった日のことである。……中略……その日最も深くお話し合つたものは、聖徳太子の御ことであつたことを思ひ起すのである。先生は久しき前より太子を讃仰せられてゐた。同時に、印度及び支那の個人的超脱の觀念理論には、痛切に慊らず思つてゐられるのを話

された。そして現日本の宗教学界の如き、この印度思想に帰趨を求むる者多くして、そこに國民の生を思ふごとき生きた精神の亡べる現状を、痛切に批判された。先生におかれては、抽象的普遍的宗教学原理や、哲学理論は、動乱の世、國家の生命を思ふ心に、何らの意義をもたらずものではない。ここに沼波先生と共に、いかにふかく太子の『群生と苦樂を共にす』と仰せられし御精神を慕ひ仰ぎまつたことであらう。」（小田村氏前著二百四十二頁）

黒上先生は、徳島の商業学校を出られただけだったので、聖徳太子の研究では一頭地をぬきんでてをられたため、東京大学に招かれて何度も講義なさってゐるうち沼波先生とお会いになったのです。

黒上先生は、沼波先生が亡くなられたあと、当時一高生であった同郷の親友である梅木紹男さんと協力され、一高生であった田所廣泰、市川安司、新井兼吉、河野稔さん達と一高に昭信会を作られました。それが昭和四年の二月です。ところが、只今申しあげました梅木さんが、その年の四月十三日に肺病で亡くなつてしまはれます。その時の黒上先生の嘆き悲しみは『黒上先生のうたと消息』（國文研刊）のなかに数多くの歌となつて残つてをります。黒上先生もその年の十二月に御病氣になり、徳島へ帰られます。あとに残された一高昭信会の方たちは、黒上先生から直接教へを受けることが出来なくなつたので、先生が日頃輪読に使つてをられた原稿を基にして、ガリ版刷りの冊子を昭和五年五月につくるわけです。その直後同年の九月



二十二日に先生はおなくなりになりましたが、その書物が昭和十年に活版刷となって世に出ます。その時の本の「後記」に昭信会の中心として先生の御遺志をついでをられた田所廣泰さんは、次のやうに述べてをられます。

「黒上正一郎先生逝きましてより六星霜、歳月の経過の速かなるを歎かしめらるる。六年の昔昭和五年九月二十一日先生の訃に接したるとき、我等は現し世の無常を痛刻して照らす日も暗きかに思はれた。先生に遇ひまつりてより親しく教を仰ぎしこと僅かに二年に満たず、しかしながら先生によって初めて、明治天皇・聖徳太子の大御教に目さめしめられ、日本青年としての行手に定かなる道を示されたのであったが、われら年壮りならず稚き心に進むべき力さへも失ひし時、われら同信生活の生命を一縷の糸に繋ぎしものは、諸先輩の指導は勿論乍ら一本書の中に遺されたる先生の不朽の生命であった。われらは本書を共に読誦することによって、一人居て喜ばば二人と思ひ、二人居て喜ばば三人と思ひ、先生に遇ひまつることを得ざりし多くの友らと共に、在りし日にかはらぬ集ひをなすことを得たのである。」（本書二百四十六頁）

このやうに黒上先生は、聖徳太子の研究に生涯を捧げられましたが、なほ我々の心を強く打ちますのは、そのお忙しい勉学を続けられながら、若い同信の友らの輪読の指導をなされると共に一日に二通も三通も、この若い友らに歌を添へた便りを書かれ志を勵ましてをられたことであります。その内の昭和五年二月六日、一高生新井兼吉あてに送られたみ歌（『黒上正一郎



先生のうたと消息』百二十二頁）を皆で読んで先生のお人柄を偲ぶことに致しませう。

み心のこもりしみことのかずかずをいかにうれしく今日もよみけむ

聖徳の皇子の御言葉のすりぶみをひらきをろがみ涙ながれぬ

聖徳の皇子のみをしへのおこるべき時にあひぬる身こそたふとけれ

ひとの世のひとしく帰すべき大きみに共に帰しつゝとめあはなむ

いかにして今宵はますと記念祭のさま思ひつゝみ部屋を偲ぶ

（註・記念祭とは六月一日の一高寮祭）

思ひてもなつかしきかなもろとみに会のはじめのわざ成しゝ日は

古へも今も希なるみ教を共に仰ぎ得しことのかしこさ

もろともに偲びあひ又たすけあひつとむることのありがたきかな

ひとゝせを思ひかへしてはらからを偲ぶこゝろに胸せまるかな

黒上先生につきましては、もっともっと紹介しなくてはならないのですが、これ位にして前に進ませて戴きます。

聖徳太子拾七條憲法について

二百二十四頁を開いて下さい。一條と十條を皆さんと共に勉強いたしませう。

一、に曰く、和を以て貴しと爲し、忤ふこと無きを宗と爲す。人皆黨あり、亦達れる者少し。是を以て或は君父に順はず、忤ち隣りに違ふ。然れども上和ぎ、下睦びて事を論ふに諧ひぬるときは、即ち事理自ら通ふ。何事か成らざらむ。

このおことばを私流に今の言葉に直してみますと、——私を先立てず、他と心を通はせ合ひ、至らぬ者同士、共に手をとり合つて向上の道へ向ふといふことは、この世で最も大切なことである。しかし人といふものは、みんな私心に覆はれて心暗く、悟つた者はゐないと言つてよいのだ。そのため多く道を誤り、君や父母に素直に従はなかつたり、友人や同胞とも仲たがひを起し勝ちなのだ。しかし自らを省みて、自分ほど至らぬ者はないことに気付けば、上に立つ者は下を信じ、下の者はまた上の人を信じ、心を開いて語り合ふことが出来るやうになるのだ。さうすれば話し合つてゐる物事の本質がはっきりしてきて、おのづからことわりに合した処理方法が生れてくるものなのだ。さうなれば何事か成らないことがあらうか。——

ポイントだけ申し上げます。一つは、太子のおほせられる「和」とは結果を言つてをられるのではないといふことであります。所謂仲の良い状態を言つてをられるのではないのです。心

を開いて人を信じて話し合つて、共に一歩一歩向上の道を歩いて行かうといふ心の働かせ方、さういふ風に心を働かせることによって、人と心が通ひ合ふよろこびを一度体験しますと、そのことがその人の生きる力になってくるのであります。一度人を信じて心を開いて語り合ひ、事理が一致した喜びを体験しますと、その人には力が湧いて来るわけです。さういふ力となるものを、よく説明は出来ませんが、太子は「和」といはれてをられるのだらうと思ふのであります。

次に「人皆たひ黨あり」といはれるのは、人といふものは私心に覆はれて心暗いものだと言ふこととせう。太子はこの私心といふことを第一條のほかにたびたびおっしゃつてをられます。餐くわん・欲よく（第五條）、誣ご詐さ（へつらひいつはる）、佞わい媚び（第六條）忿ふん・瞋しん・執しやく（第十條）嫉しやく妬と（第十四條）などがそれでありますが、第十五條では「凡そ人私有れば必ず恨あり」とおほせられ、この私心といふものを公を妨げる一番いけないものだといふふうにおっしゃつてをられます。そしてさういふ私心に覆はれて心暗い我々が、いかにしたら、みんなのために、といふころになれるのかといふことを述べてをられるのです。

齋藤先生は、「明日死ぬと言ふことに決つたとき人は本当に大事なものは何かが分つてくる」とおっしゃいましたが、私どもはなかなかさういふ境地になりきれものではない。一時いつときそんな境地になれたとしてもともすればすぐぐらついてしまひます。親鸞上人といふ方は、比叡山

……比叡山といふのは当時日本の俊秀が集ったところですよ。……で修業され、比叡山では学識一といはれた方です。その親鸞が自分のことを「悪性あくしやうさらにやめがたし」(どんな修業してもたちの悪い遊びをする気持といふものはなくならない)と嘆き、「心は蛇蝎だぐめつの如くなり」(正像末浄士和讃・愚禿悲歎述懐)とも言ってをられます。そして「……たとひ法然上人にすかされ参らせて念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからずさふらふ。そのゆへは自餘の行を勵みて仏になるべかりける身が、念仏をまうして地獄にも落ちてさふらはばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もをよびがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし」(歎異抄(二二))と言ってをられます。「とても地獄は一定すみかぞかし」とは、地獄しか行くところがないんだといふことであります。その悟り切ることが出来ない私心に覆はれて心暗い我々が、どうしたならば皆と仲よくやっていけるのか、このことが、聖徳太子さまが一番お考へになられたことだらうと思ふのです。それが憲法拾七條を貫く精神だらうと思ひます。ここで「乍ら」といふお言葉が出て参りますが、これは「お父さんやお母さんの言ふことをきかない様な精神を持っている人は、自分の隣人や友達も大事にしない人なのだ」といふことをおっしゃってをられるのではないだらうか、と私はさううけとってをります。心といふものは一つのものです。相手によって使ひ分けられる様なそんな器用なものではない。親を思ふ心と國を思ふ心と、友を思ふ心は一つなのです。太子は「乞人を愛することは仏の上の敬心

の重きに等し」（維摩經義疏菩薩品）と言つてをられます。「本当に人を慈む心のある人は尊いものに向つては掌を合はせる心の持主である」といふことでせう。ひらたく言へば、お父さんお母さんを大事にしない様な人は、よい友達、よい隣人になれないといふことなのです。それが「乍ら」といふことだらうと思ふのです。

次に「事理」といふことについて一寸申し上げませう。さき程も申しあげました桑原さんが、五代將軍綱吉時代の一幕吏田中丘隅右衛門が書いた『民間省要』といふ本を読んだ感想が『國史の地熱』（国文研叢書⑩、二百六十五頁）に書いてをられます。簡単に『民間省要』の内容を申しあげますと、徳川家康は百姓の身分を安定するために田畑の売買を禁じた。ところが田畑といふものは売り買ひが出来るから、もっと増やしたい、売る様なことになっては大変だといふので一生懸命百姓は働くのに、売買が出来ないものだから、お金が必要になってくるとそれを抵当にして金を借りるとかうまい方法でやりくりをしてゐるのだ。それなのにそのうまい方法さへ禁ずるものだから、奥さんや子供を売ったり、家屋敷を売ったり、高利貸にまで手を出してしまふ様なことになるのだ。ところが役人はいくらそんな事情を話しても、「お上のきまりだ」の一点張りで話をきいてくれない。ここで田中丘隅右衛門は、「上の命令は理なり、民の行ふ処は事なり。事理一致にあらざして何ぞ事毎に適中する事あらん」と書いてをります。その言葉を桑原さんは心に留められて「筆紙をもつてつくし難きものが人生であり、そ



の事実である。それを『一概に』或は『一旦に』極めて片づけようとするのを彼はしりぞけるのである。一概に或いは一旦に取りきめたものに人生の事実を概括して強制するものは心中何ら責任を負ふ必要なく眞剣な苦しみを味はふ必要はない、すべてはその『取り極め』そのものの上に依存しさへすればよいからである。その取り極めはいくら細かく手をつくしてあつても、それが公式として人生にのぞむときには、すなはち事理が一致しないときは何事も中ずることなきは彼の言ふ通りである。依存すべきものなくして人生の事実直接しつゝ事に処してあやまりなからしめむとするときにはじめていのちを削る苦心とすべてが自らの上にかゝる責任の桎梏しごくとがある。聖徳太子の生き且つ教へ給うた道とはその様なものであった。『大士は苦を忍びて衆生を度す』とのみことばのいかに切実に今の我々にひびくことであらう」と言つてをられるお言葉をよくよく味はつてみて下さい。

ところで、太子さまは人といふものは皆私心に覆はれて心暗いものだとおっしゃられながら、すぐ「上和ぎ下睦びて」と言はれるのは無理なことでないかといふ疑問が起きてくることと思ひます。太子はそれに対して、第十條で解答を与へて下さつてをりますので、そのことも併せ考へながら皆さんと共に第十條を読んで参りませう。



十、に曰く、忿を絶ち、瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心有り、心各執しよあり。彼是とするときは則ち我は非とす。我是とするときは則ち彼は非とす。我必ずしも聖にあらず。彼必ずしも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ。是非の理詎なぞ能く定むべき。相共に賢愚なること、みづか銀の端無きが如し。是を以て、彼の人瞋ると雖も、還かへつて我が失を恐れよ。我独り得たりと雖も、衆に従ひて同じく擧おこなへ。

このお言葉もまた私流に訳してみます。——人が思ひ通りにならぬからと言って腹を立て、めくじらをたてて人を責めてはいけない。第一條でも言った通り人といふものは私心に覆はれ、我が我がといふ心をもってゐるものなのだ。だから人が正しいとするところを自分はそれは間違ひだと思ひ、自分が絶対正しいと思つてゐることも立場が違ふとまるきり反対のことは相手は主張するものなのだ。よく考へてみなさい。君は落度のない人間だらうか、さうでないだらう。また君が愚者と見下みくだしてゐる相手は、君が考へてゐる程愚かなのか。よく胸に手を当てて考へてみれば、君が見下してゐる人に劣らず自分が愚であることに気付く筈だ。さうなのだ。本当に共に凡夫同士なのだ。さうした人間同士で一体誰が是非を決め得よう。本当にあひ共に愚か者同士なのだ。だから人が怒つたからといってめくじらをたててはいけない。自分にも思ひ違ひや至らぬところがなかつたかを反省してみるべきなのだ。自分が絶対正しいと信

ずることがあっても、よくよく考へれば自分だけ正しいといふことはあり得ないのだから皆と手を取り合つて向上の道をたどるがよい。――

ここで先づ「人の違ふ」といふお言葉と「共に是れ凡夫のみ」といふお言葉を味はつてみま  
す。「違ふ」といふことは人が思ひ通りにならないと言ふことですね。お経を読んでをります  
と、浄土といふところはどんな所かといふことを色々述べてをります、その一つに自分の思  
ひ通りになるところだといふことが書いてあります。この人の世の大きな悩み苦しみに、人が  
自分の思ひ通りにならないといふことがあります。しかし人が思ひ通りにならないといひます  
けれども、はたして自分は自分の思ひ通りになってゐるのかといふことを先づ自分に聞いてほ  
しいのです。自分は自分の思ひ通りになってゐると思ひ勝ちですが、本当にさうでせうか。

「明朝から三時に起きて勉強しよう」と決心したとします。二日、三日と続けて行くうちにつ  
らくなって、三時は無理だった、四時からにしよう。そして次の日になると昨夜は飲みすぎた  
から今日は七時まで寝てやらうなんていふことになりかねないですね。自分といふものが自分  
の思ひ通りになってゐる人はゐるのでせうか。ジャンバルジャンがパンを盗んだことを誰が一  
体責められますか。ジャンバルジャンの様になったときに自分は盗まないと断言出来ますか、  
自分といふものが自分の思ひ通りになるのですか。一番自分の思ふ通りにならないのは実は自  
分なのです。ソクラテスは『パイドロス』のなかで、自分自身を知ることが、学問の根本であ

ると言つてをります。ソクラテスといふ人はさういふ風に自分といふものを見つめたのです。

太子が、「人の違ふを怒らざれ」「共に是れ凡夫のみ」と言はれる御精神も同じことと思ひます。自分を本当に見つめたならば、親鸞上人の言はれる「悪性さらにやめ難し」「小慈小悲もなき身にて」の嘆きがあるんじゃないですか。本当に自分を見つめたら、人を見下だすことなど到底できない。さういふ境地になって人の愚かな行爲を見ますと、自分を見てゐる様な気がして胸が痛むんですよ。「自他の二境を等しくする」といふ境地は「共に是れ凡夫のみ」といふ痛感から生れてくるものなのでせう。ここで言はれる共にとは、君も僕も同じく凡夫だといふそんな簡単な意味ではないのです。これは、「あゝ自分ほど至らぬものはない、罪深いものはない」といふ深い嘆きです。このお言葉は、太子自ら他人を見下さうといふ心がおきたとき自分の心に言ひきかせるためにお書きになられたものではないかと私はうけとつてゐるのです。

次に「我独り得たりと雖も、衆に従ひて同じくおこな擧へ」といふお言葉を味はつてみたいと思ひます。一昨年の合宿で小柳先生が大変有難いことを言つてくれました。私はその言葉をきいてびっくりしました。「あゝおれは何もわかつていなかったのだなあ」と。だからその言葉をよく覚えてをります。小柳先生は——「我独り得たりと雖も」といふその「我独り得たり」といふ言葉にこめられた或る傲慢なひびきに太子は敏感に反応されたのではあるまいか。……勿論この世では自分だけで生きて行かなければならない場合も沢山あると思ふ。太子はそれまでも

否定なさることは絶対ない筈だ。たゞその時、自分はこれが正しいと思つてこの道をゆく場合でも「共に是れ凡夫」としての痛感がその人の心にたゞへられてゐるならば、自他を別たぬおもひがあたたくその人の心に流れてゐるならば、きっと皆と一緒にその道を行くことが出来ないといふ悲しみがある筈だ。その悲しみが心の奥深くたゞへられてゐるか否か、問題はそこにある。太子がこの言葉にこめられた眞意はさういふことではなからうかと思ふのです。——（日本への回帰第十七集三十二頁）と言はれました。私はそのとき、その話をどんなに嬉しく有難く聞いたか知れないのです。

聖徳太子さまは、今日の輪読の個所にも出て参ります「群生と苦楽を共にす」「自他の二境を分かつたず」とか「平ひとしく」とかいふお言葉をよく使つてをられますが、憲法第十七條では「夫れ事は獨り断ずべからず」と言つてをられます。この「獨り断ずべからず」とはどういふことかと申しますと、維摩經菩薩行品に「未学を軽んずるなく学を敬ふこと仏の如くし」といふお経の文句があるのですが、この仏語を、太子は義疏のなかで、書經の中の「匹夫匹婦も一能ありて予に勝れたり」といふ言葉を引かれ「然れば即ち、憍は是れ悪の中の極なること明らかなり」と解釋してをられるのです。百三頁を開いてみて下さい。ここはあとで輪読して戴く個所ですが、ここに維摩經菩薩行品に「少欲知足にして世法を捨てず」とあるお経の文句について、吉藏菩薩といふ隋の時代の大陸の高僧が「威儀を壊くずして能く俗に随ひ、道義を壊せず

して能く俗に随ふ。俯仰天下、皆我同じと謂ふも、我独り人に異なるなり。」（本書百四頁）と解してをります。即ち、姿、形も立ち居振る舞ひも人と違った様なことをしないんだけれども気位だけは皆と違ふんだぞ、といふことだと言つてをるのです。ところが、聖徳太子さまはさうぢやない。「己れ能くすと雖も、然も世に違して自ら異なること莫れとなり。」とおっしゃつてをられます。「己れ能くすと雖も」とは、さっき申しました憲法十條の「我独り得たりと雖も、衆に従ひて同じく擧へ。」の「我独り得たりと雖も」と同じことですね。この「自ら異なること莫れ」の自らといふのは、独りといふ意味でせう。自分独りはいふ意識が出て来ることはいけないことなのだと言はれるのです。この御精神は、例へば、自分は正しいんだけれども、多数決で決つたことだから従はなければならないなどといふそんな次元の低いことをおっしゃつてをられるではありません。

このお言葉を拜読してをりますと、私達の小学校時代、読本で教はつた台湾の呉鳳といふ人の話が自然に思ひ出されてきます。その物語りをかいつまんで申しあげますと、今から二百五十年位の昔清代の台湾に呉鳳といふ蕃人に大変慕はれてゐる方が居りました。その蕃人達には祭のとき人の首をとつて神に捧げる風習がありました。呉鳳はその悪い風習をあらためさせるため、村人達をこんこんと諭しますがどうしてもきき入れません。そこで祭の日に赤い服を着て赤い帽子を被つた人が通るからその人の首をとりなさいと言ひます。蕃人達は言はれた様にそ



の人の首をとってよくみるとそれは親とも慕っていた呉鳳の首であったといふ物語りです。蕃人の悪習がそれから止んだことは申しあげるまでもありますまい。

かういふ道を太子は「衆に従ひて同じく擧へ」とおほせられてゐると思ふのです。それは法隆寺の玉虫厨子に描かれてある「捨身飼虎」の精神であります。

申しあげたいことはつきませんが最後に輪読といふことに一寸ふれて話を終ります。

### 輪読について

私の育った青森県の下北半島に、百万遍といふのがあります。これは下北半島に限ったことでないでせうが、大きな数珠をとり巻いて老幼男女が座り、仏の名号を稱へては、一つづつ珠を送ってゆくものです。私は大変ずるい子でありましたが不思議にその輪のなかに入れさせてもらふのが好きでした。私は輪読ときくとすぐその和合の姿を思ひ出します。輪読といふのは、信ずる友と心を開いて信ずる人の本を心をこめて読み合ひ、自分の体験に基いて心に深く感ずるところを述べ合ふことでせう。

そこに智慧が生まれて来る。智慧といふものは、かくかくのものだといふ様な概念なり観念ではなく、語り合ふうちに生きる力として各人の心のなかに生みだされてくるものを言ふので



せう。

講義要旨に「文に随ひて直ちに唱ふるのみ」と書いておきましたが、これは太子のお言葉です。あるお経の文句について、「大陸の高僧たちがこれはかういふ意味だ、いやかういふ意味だ、いろいろな解釋するけれども、自分は納得出来ない。心が安んじない。私はお経の文句をただ文に従って唱へるだけです」といふことを、太子は随所で述べてをられます。この御本は実にむづかしい本ですがどうか訓話にあまりとらはれず黒上先生の声がきこえて来るまで文に従って何度も声に出して読み味はって下さい。

併せて「かなしきことばをくりかへし分るところから何処からでも読むこと」（『うたと消息』八十六頁）と講義要旨に書いておきました通り……これは黒上先生が田所廣泰さんに送られた便りのなかで言はれてをるお言葉ですが……このご本のなかでどこでもいゝですから自分の心に響いてくるところがありましたら、そこからくりかへし読んでいただきたいのです。さうしますと次第に親しみが湧いて参りませう。さうなればしめたものです。

以上のことを申しあげ本日輪読する個所の一部を読んで終りいたします。小田村先生は、この本の「復刊のことば」のなかで——本書の文章は、著者の切々たる情意に支へられ、本書全体が高いしらべの長詩の如き調子をもって読む人の心に迫るものを感じさせる——といはれてゐます。先生の声がきこえてくる様に上手に読めるといゝのですが、百三頁から読んでみま

す。

「——「世間虚假こけ唯佛是真」とは太子自ら宣らせ給ひしところである。御夫人たちばなのおほいらつめ橘 大郎女はこの御言葉を以て太子をその薨こうご後に記念しまつられたのである。太子が我が國未曾有の転機に於いて國民文化の根柢を確立し給ひし其の事業は、雄大なる改革指導の精神に基かねば成就せられざりしところである。当代氏族制度の積弊と対照するのみに於いても、憲法拾七條の啓示は正にこの御精神を顕彰して餘りあるのである。而も世間虚假と示して罪劫の人生を自らの足らぬ姿に窮め、唯、佛の眞実を念じ給ひし御心は常に人生永遠の未完成を信知して、自ら國と民とのために無窮の求道努力を相続し給ふたのである。此に維摩經菩薩行品に「少欲知足にして世法を捨てず。」とある語を釋して、「世法を捨てず。とは、言ふところは己れ能くすと雖も、然も世に違して自ら異なること莫れとなり。外の論に言したが遜たかひ行を危くすと云ふはこの謂なり。」と示されたる御言葉に我等はこの御心に基きし太子一代の行化を偲びまつるのである。これ慧遠が「少欲知足にして自行染せんを離れ、世を捨てずして有に随ひて物を益す。」(維摩義記卷四本)と解し、又吉藏菩薩が、「行ひは少欲知足にして世法をば捨てず。威儀を壊壊せずして能く俗に随ひ、道義を壊せずして能く俗に随ふ。俯仰天下、皆我同じと謂ふも、我獨り人に異なり。」(維摩經義疏卷六)と論ずる如く、其言葉の一般的意義に於いては、菩薩は解脱を得と雖も尚世間に同じく教化妙用を現すべきことを説くものである。けれども太子の御釋は唯此の

如き概念的教義を示させ給ふたのではない。己れ能くすと雖も常に他と共なる生を念じ、同じく人たる事実にめざめて内的平等の信に徹し、その行ひの上にこの信念を顕はせよとをしへ給ふのである。現実世間生活に随順すと雖も、自らを高きに置く心あるときは、それは尚世法を捨つることとなるべきを暗示し給ふのである。ここに論語の「言遜ひ行を危くす」の語を引用したまひ、内に深痛の誠を抱くが故に外に簡素の姿を示し、濁悪人間生活の不断改革に盡しつつも他を責めずして人と相和し、外に意志する改革的念願を我が内心の懺悔求道に具現して之を自らの行ひを以て示すべきをのらせ給ふのである。偉大なる改革指導の御精神は、眞に人生の未完成に徹し、外なる業績に満足せさせ給はずして、濁悪の世を統ぶる眞実の生命を自らに體得すべき希求を相続し給ひ、之を一代行化に具現して、この心の全体國民生活に通はむことを念じ給ふたのである。これまことに世間虚假の懺悔求道心に自らを没し、くもりなき大悲の永久生命を仰いで、一切を「唯佛是眞」に帰攝し給ひし厳肅悲痛の信仰に基かせ給ふのである。日本文化創業の大任は、この外的功業に安住し給はず、目に見えぬ「まこと」を念じて献身労苦したまひたる御心の威嚴に依ってこそ、一切の波瀾と障礙とを打破して、之を成就せられたのである。太子は、この信を照明し濁悪の生を護念し給ふ三世永遠の教主として釋迦牟尼佛を仰がせ給ふたのである。――」

長いことご消聴有難うございました。

(註) 一、文中本書とあるのは黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』をさします。

二、引用の古事記は角川文庫(武田祐吉訳註)によりました。

三、本文中のルビは筆者が勝手に付したものです。

短歌創作導入講義

福岡教育大学教授

山  
田  
輝  
彦



杉家の前に咲く梅花

短歌創作の意味  
新聞歌壇の歌  
連作短歌の絶唱



## 短歌創作の意味

この合宿では、短歌を作ることが義務づけられてをりますので、初めての参加の方々には気持の負担になったかも知れませんが、自分の作品を人に見せるといふことについては、最初は誰もある羞恥感があるのは当然ですが、みんな似たりよったりなのですから、さう恥しがる必要はありません。導入講義のポイントをつかんで下されば、きつとい、歌が出来ると確信してをります。

まづ「和歌」と「短歌」といふ二つの呼称にはどのやうな違ひがあるのかといふところから始めたいと思ひます。和歌といふ呼び方は、もともと漢詩を「からうた」といふところから、それに対して「やまとうた」といふ意味なのです。その和歌には、万葉集に見られるやうに、長歌、短歌、旋頭歌（五七七・五七七）といふ三つの様式がありますが、短歌形式が圧倒的に多いので、普通和歌といふ場合には、イクオール短歌と考へられるやうになりました。

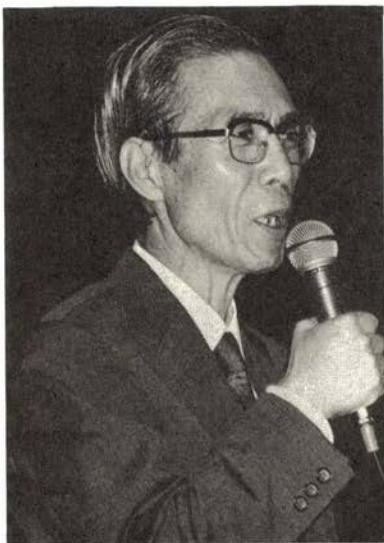
早速レジュメの説明に入りますが、一番目の「新聞歌壇近詠抄」は、ある新聞の六月の歌壇の中から十首ほど抜き出してみました。これからごく限られた時間で、皆様方が歌を作られるとき特に注意なさるべきことを、いくつか述べてまゐります。これらの歌はすべて選者の選を

経て来てをりますが、私どもの考へてをります歌の基準から申しますと、いゝ歌と悪い歌があります。私どもの合宿教室で意図してゐる歌といふものの基準に、どの歌がかなつてゐるか、どの歌が背いてゐるのかをお考へになりながら聞いて欲しいと思ひます。

まづ、短歌といふ詩型は大変歴史が古い。千三百年くらの歴史を持つてゐます。小堀先生の御講義で、日本の母国語による古典の表現といふのは実に長い伝統と一貫性を持つてゐるとおっしゃいましたが、千三百年といふ長い間一つの詩型が生き続けてゐる。しかも特殊の人ではなくて、すべての新聞が「歌壇」といふものを設けて、無名の人々が、五・七・五・七・七といふ文語の定型詩を作ることができるといふやうな民族は、他に例がないのではないでせうか。戦争が終つた直後の時期に、当時京都大学のフランス文学の教授であつた桑原武夫氏が「第二芸術論」といふのを書きました。フランスの近代小説が第一芸術であるならば、俳句のやうな日本の短詩型文学は第二芸術である。芸術の名に値しないものであり、やがて滅びるであらうといふやうなことを言ひました。時流に乗つた短歌や俳句への攻撃は猛烈で、ある左翼の詩人は短歌は「奴隷の韻律」だとまで極言しました。しかし、俳句も短歌も滅びるどころではなく、その作者の人口は益々広がつて来てをります。外国では「詩人」といふ名に値する人は、天与の特殊な才能の持主であるといふ通念がありますが、日本人はごく自然に短い詩型の中に抒情を托することができるのです。

こゝでは話を短歌に絞りますが、この合宿では上手な歌、巧みな歌を作ることが目的ではありません。むしろ、皆同じスタートに立って、自分の感じたこと、思ったことを、できるだけ正確に詠まうと心掛けてほしいのです。先ほども申しましたやうに、短歌は文語の定型詩ですから、仮名遣も言葉の選択も文語的な表現でなければなりません。ところが、レジュメにあります「新聞歌壇」は現代仮名遣で書いてあります。昨日、会員の藤井貢君がある痛憤をこめて、現代仮名遣といふものは日本の文化を断絶させるのではないかといふ発言をしましたが、短歌の創作を通じて、正しい歴史的仮名遣に習熟するといふ修煉も併せて勉強してほしいと思ひます。

それでは、なぜ私どもはこの合宿で短歌を詠むのだらうか、その意味を考へてみたいと思ひます。私どもはいろいろの経験을いたします。しかし、「経験」といふことを厳密に考へてみますと、たゞ自分のやったことが経験であ



るとは言へません。例へば皆様方の中には東京からこの雲仙まで、ある方は新幹線で、ある方は飛行機で、ある方は自家用車でいらっしたでせう。それも広い意味では経験に違ひないのですが、普通さういふことは経験とは言ひません。小林秀雄先生の言葉を借りますと、経験といふのは、その対象が人間であれ、物であれ、その対象とのつびきならぬ、抜き差しならぬ関係を結ぶことだといふことになるのです。といふことになりまずと、経験といふのは、私どもがあるものに対して一種の集中力をもって接するとき、はじめて生じて来るものと言へるのでせう。だから、歌を詠むといふことは、何の気なしに自分が見過してきた経験を、もう一度見直してみる、再体験してみるといふことになるわけです。一輪の花でも、山の姿でも、友達との友情でも、詠まうとする対象に自分の心を集中してみると必ずそこにある発見があると思ひます。その「物」の姿を凝視する。対人関係の場合ならば、それが愛情であれ、憎しみであれ、そのことの意味をつきつめて考へてみるといふことがなければ、本当の意味で経験にはならない。さういふ意味で、歌を詠むといふことは、自分が何の気なしに見過して来たこと、あるいは見逃がしてゐることに、もう一度心を集中して再体験してみる。さうして本当の意味で自分の経験にそれを繰り入れて行くといふことになるわけです。

皆様方が歌を詠む気になって、雲仙の自然を御覧になりますと、今まで見えてゐなかつたものが見えて来る。精神を集中して実態を凝視するとき、始めて自然が自分の切実な経験にくり

こまれて来るのです。歌を詠むといふことが、何かの効果に短絡するわけではありませんが、確かに歌を詠むつもりで物を見ると、今まで見えなかったものが見えてくる、今まで気づかなかったことが気づかれてくるといふことがあると思ひます。そのことが、歌を詠む一つの大きな意味であるわけです。

それからもう一つ大切なことは、短歌は西洋風にいふと抒情詩なのです。抒情詩といふものは感情を詠むものであって、理屈を詠むものでないことは当然です。「短歌のすゝめ」（國文研叢書12）に正岡子規の「歌よみに与ふる書」の一節が引用してありますが、このあたりには、子規といふ人の短歌といふものに対する考へ方が非常によく出てゐると思はれます。

△詩歌に限らず総ての文学が感情を本とすることは古今東西相違あるべくも無之、若し感情を本とせずして、理屈を本としたる者あらば、それは歌にても文学にてもあるまじく候。▽

つまり歌といふものは自分の「感情」をのべる抒情詩であつて、妙な理屈が介在すると歌は駄目になってしまう。そこで、絶唱といはれるものは、人間の感情が最も昂揚したときに生れます。人間の感情が最も昂揚し緊張するのは何時なのか。それは「死」と「恋」の場合です。万葉集の歌の中でも、古今の絶唱と言はれてゐるものは、挽歌と相聞の歌です。挽歌とは、ひきうた、つまり柩をひく歌、死者を悼む歌です。相聞とは恋の歌です。人の死に会つたとき、あるいは自分がやがて死なねばならぬとき、そこには理屈の入る余地がない。感情が最も純粹



になるときです。また、本当に純粹な恋愛をするときも同様です。私は現代は恋愛のない時代なのではないか。性愛はあるけれども恋愛がない。だから本当に美しい歌が生れないのではないかと思ひます。

## 新聞歌壇の歌

レジュメの「新聞歌壇近詠抄」の中には理屈を詠んだ典型的な例があります。それは次の歌です。

「父の日」の無き時代とき重き存在感「父の日」ありて父のなき今

一寸と考へても分からない歌でせう。解釈が必要な歌はおほむね駄目なものです。「父の日」といふ日が無かつた時代には父の存在感が非常に重かつた。しかし、今、「父の日」が定められた現代は、父の存在感がなくなつたといふ意味です。これは理屈ですから直接に訴へて来ない。本当の「父」のゐない現代が悲しいといふやうに率直な感情を詠めばいゝのです。

それから、歌でもう一つ大切なことは、原則として一首一文であるといふことです。「調」がしやう一貫してゐなければなりません。次はその原則に背いた例の一つです。



あじさいの色濃くなりし今朝の庭吾がのぞみ今も小さく燃ゆる

これは「今朝の庭」で切れるでせう。昔の人はかういふ歌を「腰折れ」といったのです。この歌は一首一文の原則に反してゐるだけではなく、上の句の叙景と下の句の抒情が具体的にどのやうにつながるか全く不明であるといふ点でも、悪い例の一つといへませう。

例へば、一首一文として一番分りやすいのは次のやうな歌です。

水榭のいまだ芽吹かぬ林より澄み透りくる鶯の声

ずっと切れ目なく声調が一貫して、「鶯の声」に統一されてゆく。歌の形としては望ましいものといへるでせう。短歌から枝分れした俳句といふ詩型は、短歌の一首一文に対して二句一章と言ひます。二つの句で一章になる。皆様御承知の中村草田男といふ俳人の有名な句に「降雪や明治は遠くなりけり」といふのがありませう。「降る雪や」で切れます。「や」を切れ字と言ひます。「明治は遠くなりけり」といふやうに真中で切れるのです。そして「雪」と「明治」とは、特別に関連はないのです。関連のないものを並べて、真中に切れ字を置いて飛躍をするところに、俳句といふものの面白さがあります。だから同じ抒情詩ですけれども、短歌は純粹な感情の表現であるし、俳句は短歌に比べるとずっと知的な表現になるのです。知的な連

想といふものが主体になります。だからジャンルから申しますと、親類のやうなものが、本質的には非常に違ったものだといふことになります。

以上、短歌は抒情詩であること、原則として一首一文であることを申しました。以下具体的にもう少し歌を詠むときの注意を申し上げます。私どもが歌の師として仰いで来ました正岡子規が、短歌革新の宣言ともいふべき「歌よみに与ふる書」のことは、前にも少し申しましたが、子規は歌を作る基本姿勢として「写生」といふことを申しました。彼の言ふ「写生」は、絵画の「スケッチ」から学んだ方法ですが、その意味は、誇張や感情の虚偽や空想を排除して、自然を詠むときでも、人間の感情を詠むときでも、出来るだけありのままに正確に詠めといふことなのです。上手に詠むといふよりも、正確に詠むといふことが大切です。例へば空が「あをい」といふけれども、その「あを」は「青」なのか「碧」なのか、「紺青」なのか。そのときどきの微妙なニュアンスの相違があるでせう。けふの空の色はこれがびったり来るといふ言葉を探して来なければ正確を期することはできません。だから、正確な美しい表現、人の印象に残るやうな歌を詠むためには、言葉が豊富でなければなりません。沢山の語彙を知っておくに越したことはありません。今は言葉の伝達の機能がなくなってしまつて、テレビ時代はまず映像から始まるわけです。そのため言葉が実体を失つて軽くなつてしまひました。例へば自分がある感情、寂しいといふ感情を詠む場合、寂寥とか寂寞とか、わびしとかさびしとか、うらがなし

とか、様々な言葉を知ってをれば、その中で自分の感情に一番適応する言葉を選ぶことが出来る。唐の詩人賈島が「僧ハ推ス月下ノ門」の「推」と「敲」のいづれかに迷ひぬいて、結局「敲」にきめたといふ故事から、「推敲」といふ熟語が出来た故事は先刻御承知と思ひますが、言葉に正確を期するといふことが、子規のいふ「写生」なのです。正確に詠まれた歌といふのは、必ず美しい感情の表現になります。そして人の心を打つのです。実に不思議なことですけれども、不正確にぼんやり詠まれると朦朧体になり、何を詠んだのか分らないといふことになるのです。それから、もう一つ大事なことは歌といふものは、皆様方がお作りになって提出されますと、それは作者から離れた独立の作品になる。それは誰が読んでも客観的に分るものでないといけないわけです。そこに作者が出て来て、実はさうではない、かういふつもりで詠んだのですと、前後に補足説明をつけて、成程さうですかと始めて納得がゆくといふのではないわけです。非常に難しいことですが、歌は客観性を持たねばならないのです。さういふ意味で、客観性のない歌の例として次の歌があげられます。

黙々と群なしのぼる階段のホームの雑踏寄り合う孤独

この歌、意味が分りますか。都会のラッシュアワーの状景でせう。働き蜂の日本人が、勤めの場所を目指して黙々と雑踏のホームを上ってゐる。孤独な群衆が、肩を寄せ合ふやうに触れ合

ひながらひしめいてゐる。「寄り合う孤独」などといふところに、この人はちょっと洒落た文学性といふやうなものを打ち出したのでせう。恐らく文学好きの若い人の歌だらうと思ひます。選者もさういふ表現に近代性を認めて新聞歌壇に出したのでせうが、概括したムードの表現に過ぎません。

それから、もう一つわけのわからない歌があります。

皿に盛るホットケーキの動物の来る子来ぬまゝ、凋める夕べ

これはどういふ立場の人が詠んだ歌なのか、クイズになります。種明かしのやうですが、これは孫を待つてゐるおばあさんの歌です。お孫さんのために、動物の形をしたホットケーキを作つて待つてゐるが、来る予定の孫が来ないまゝに、そのホットケーキの動物は凋んだといふ意味なのでせう。朝から手製のお菓子を作つて待つてゐた感情を詠めば、もっと心打つものが出来たらうに、と思はれます。以上にあげた四首は、それぞれに、上の句と下の句が切れて意味の通じない歌、屁理屈を詠んだ歌、擬似近代性を装つたムードの歌、説明をつけなければ分らない客観性のない歌といふことになります。

少し辛い評価だと思ひますが、問題点の指摘はお分りいただけたと思ひます。他の歌はみな割にいい歌です。よく分るし、無名の人々がかういふ歌が詠めるといふ点に、日本人はありが

たいと思はずにはをられません。

猫の子が親を慕いて鳴きゆくを巢籠る鳩は軒端より見る

親子蜘蛛かけし糸の輪切らぬよう背をかがめつつくぐり抜ける子

さかさまにうつる山の秀数みえて田植機ひびく伊那のはざま田

晩霜のきざしに覚めて鳥かごに布かけおれば一羽が鳴けり

三首目の「山の秀」は山の頂のこと、「はざま田」の「はざま」は山峡のことです。みな感慨もこもり、形をなしてをります。この程度の歌の詠める短歌人口が何十万もゐるといふことは、やはり日本といふ国の独特の国ぶりだらうと思ひます。

最後に歌を詠まれるときの、もう一つ大切な注意があります。それは焦点が一つでなければならぬといふことです。言葉を変へて統一性といつてもよいでせう。あれもこれも一首に詠みこまうとするのは間違です。これが俳句との大きな相違点になります。俳句には焦点が二つあります。先ほどあげました

降る雪や明治は遠くなりけり

焦点は「雪」と「明治」です。この二つの間には特別何の関係もないでせう。けれども、雪



といふものは、何か人間を遠い回想に誘ふやうな降りものです。北陸の豪雪のやうなものになりますと、これはロマンチックどころではないでせうが。草田男は三十年前に通った小学校を訪ねて行くと、中から制服をつけた子供たちが元氣よくとび出して来る。彼の目にはその現実の子供たちの彼方に、緋の着物を着た自分と、紫のはかまを着けた女先生の弾くオルガンの音に合はせて、小学唱歌が幻聴のやうに聞えて来たに違ひない。そのとき「雪」と「明治」といふ二つの焦点が結びつき、そこから何とも知れぬ詩情がにじんで来る。俳句の良さは恐らくさういふところにあるのでせう。

ところが短歌では、一首の中に何もかも歌ひこまうとすると、印象が分裂してしまひます。一体何を詠まうとしてゐるのか分らなくなりまゝです。そこで、ずっと絞りこんでいって、一点に統一する必要があります。その例が先ほど一首一文のところであげた歌です。

水榭のいまだ芽吹かぬ林より澄み透りくる鶯の声

この歌は何を詠まうとしてゐるのか、その焦点がはっきりしてゐるでせう。勿論それは「鶯の声」です。焦点を絞ってゆく過程で、いまだ芽ぶかぬ林の情景や、「澄み透りくる」といふ形容句が、いきいきと表現されて、さはやかなリズム感が生れてゐるのです。



## 連作短歌の絶唱

焦点を一つに絞って、一首の統一性を実現することが、作歌の要点であることはお分りいただけたと思ひます。それなら、雲仙の自然も詠みたいし、合宿の中で実感した友情も詠みたい、路傍の草花も詠みたいといふときにはどういふ詠み方をしたらいいのか。それは連作といふ形式をとればよいのです。情意の展開に従って、つぎつぎに詠みついでゆく。さういふ連作短歌を、方法的、意識的に確立したのは正岡子規の功績です。

その連作短歌の例として、私どもの同人である前富山県立図書館長の広瀬誠氏の「手術のあと」といふ十首の連作をとり上げてみたいと思ひます。広瀬さんは舌癌といふ難病に罹られ、舌の三分の一を切除するといふ大手術だったと聞いてゐます。その発病から退院して職場復帰に至る「死」と直面した悪戦苦闘の日々を、五百三十余首の短歌に克明に記録して『坂の沼琴』といふ歌集を作られました。凄絶とでも言ふしかない、すさまじい一巻です。命が惜しいために命を守るといふのではなく、天から与へられた掛け替へのない自分の生命を粗末にしない。そのために徹底して病氣と闘ふといふ、その悪戦苦闘の情況がまことにドラマティックに凝集されてゐて、読みゆくままに圧倒されるやうな感じですよ。

普通われわれは、あなたは癌ですよと宣告されたらシユンとして、とても歌を詠むどころ

じゃないと思ひますが、この方はその苛酷な宿命を凝視して、溢れるやうなおびただしい歌を残された。「歌は私の魂のひびきである。歌を詠み歌を作ることはわがいのちのあかしである」と後書の最後に記してをられます。今詠み上げます連作十首は、二度目の大手術のあとの歌ですが、番号は便宜上私がつけたものです。

### 手術のあと

- (一) いたはりの妻の言葉を夢うつつ痲酔さめゆくベットに聞けり
- (二) 八時間の手術のあとの意識もどりなほうつろにぞ物の音を聞く  
妻妹いもこ弟義兄おとぎら顔寄せて長き手術を憂ひ居しといふ
- (三) 輸血点滴くた管の数々まとひつき蜘蛛の巣なす中に寝かされてあり
- (四) 尿管食物の管管の間にかすか息づくわがいのちかも
- (五) 動きなばいのち切れむと夜もすがら苦しきに耐へわれは動かず
- (六) 昏々と眠りては又強く目ざめ眠られぬ病室の夜はも更けゆく
- (七) せはしなく痰たんつまりくれば痰取り機おそるおそるも妻は手にせり
- (八) 事しあらば火にも水にも入りなむと妻は夜すがらわれを看みとれり
- (九) わが背子せこは物な思ほしと万葉の歌唱うたなへつつ妻は祈るも
- (十)

こゝには生命防護のための死闘がくりひろげられてゐるわけですが、九首目の「事しあらば火にも水にも入りなむと」、十首目の「わが背子は物な思ほし」といふ表現は、実は万葉集の安倍女あべのいらつめの「わが背子は物な思ほし事しあらば火にも水にもわれ無なけなくに」に依よつてゐるので、「無なけなくに」は「あるものを」といふくらゐの意味です。奥様は生死の関頭をさまよふ御主人を、この万葉の歌を口ずさみながら、必死に看病されたのです。「背子」とは夫、旦那様のことです。わが夫よ、何も御心配なさいませぬ。あなたのかゝるやうな重大なことが起おつたら、火の中でも水の中でも喜んで飛びこんでゆく私があるのですから、といふ意味なのです。広瀬さんはこの連作の注として「妻が小学校六年のとき先生に教へられし万葉集の歌は、わが背子は物な思ほし事しあらば火にも水にもわれ無なけなくに」の一首にして、この歌、事あるごとに口をついて出で、常に忘れずといふ。恩師の名は千葉徳二先生といふ由。」と書いてられます。小学校六年のとき恩師から教へられた万葉の一首を、奥さんは五十年の間覚えていらっしやって、それが御主人の生死の関頭せんとくのとき奥様を支へたといふことでせう。小学校の六年生といへば、まだ十一か十二じふにくらゐの少女でせう。そんな幼い子に万葉の歌を教へた先生も先生なら、それを覚えた奥さんも奥さんです。戦前の教育のすばらしさをまざまざと見せつけてくれるやうな深い感動に誘はれます。

時間が迫ってまゐりましたので、広瀬さんに関して、もう一つつけ加へさせていただきます。

それは『短歌のすゝめ』の中の「大東亜戦争戦没者の歌」のところに収録されてゐる松吉正資君の歌についてです。令弟の松吉基順さんがこの合宿にも参加してをられますが、松吉君は山口高校から東大の法学部に進んだ抜群の秀才でした。その松吉君と、これも佐賀高校を経て東大の文学部にゐた高瀬伸一君（彼のことにについては昨年この合宿で小林国男さんが紹介されました）の二人が、出陣を前にした昭和十八年の一月か二月頃に、つれ立って富山の広瀬さんを訪ねてゐるのです。そのとき恐らく広瀬さんは一期一会のやうな気持ちで心からこの二人を歓待されたのだと思ひます。

広瀬兄御一家にお別れして

いとまつげ出でむとすれどことばなくふかきなさに涙ぐまるる  
門の辺に立ちて名残を惜しまるるみ姿をがみ去りがてぬかも

ふりしきる吹雪の中に立ちわかれ去りゆく時し涙おちんとす  
見ず知らぬ我をかくまでいたはりし人のこころを忘れて思へや

かういふ歌を広瀬さんに残して、松吉君は沖繩特攻で戦死しました。私は松吉君のことをよく知ってをりますので、その松吉君がかういふ歌を残していかれた広瀬さんといふ方のお人柄もよく分ります。その広瀬さんのいのちを支へた奥様の、そのお心を支へたのが万葉の一首の歌

であったことを思ふと、歌といふものの不思議な力に衿を正されるやうな気持がします。

皆様方、今から歌をお作りになるわけですが、もう一度くりかへしますと、歌を作るといふことは、自分の感じたことを正直に、正確に五・七・五・七・七の定型詩に盛りこむといふことです。外部の風物でも、友情でも、講義から受けた感動でも、それを出来るだけ正確に五・七・五・七・七のリズムに定着させる。さうすると自分の心の姿が、そこに言葉の形としてはっきり出て来ると思ひます。今は多少苦痛かも知れませんが、やがて諸君の日記の片隅に短歌が記されるやうになる日が来ることを念じて、導入講義を終わりたいと思ひます。





創作短歌全体批評

亞細亞大学教授

夜久正雄



松下村塾

合 宿 と 歌

感 激 を 歌 ふ

自 然 を 味 は ふ 心

叙 景 の 歌

言 葉 を 正 確 に す る

感 動 は 歌 に な る

先 生 、 先 輩 方 の 歌

合 宿 と 歌

私は今日の午前中から六、七時間かかって皆さんのお歌を丁寧に読ませていただきましたが、読んただけで吹き出すといふ様な歌は、幸か不幸か非常に少なかつたやうに思はれますので、（笑ひ）この時間にはどちらかといふといふ歌をご紹介しながらお話をすすめていかうと思ひます。

私は、ここに三百二十四人の方が集って、しかも全員が歌を作ったといふことは本当に奇蹟に近いことではないかと思ふのです。どうしてさういふことができるか、これはなかなか解くには難しいことでせうが、ともかくこの全員が歌を作ったといふ事實は、どういふ精神がこの合宿全体にみなぎってゐるかといふことを、われわれ自身がお互ひに認め合ふことのできる大切な事実だと思ひます。さて私達が歌をつくる時には自分自身は分つてゐるんだけど、それを言葉にしてしまふと少しおかしな言葉になるといふ場合が多いんです。ただ歌をつくつて、自己満足して、いい歌が出来たなあと思つてゐるだけでは本当の勉強にはならない。読みかへしてみるときつとどこかをかしなところがある。だからその言葉を今度は正確に直して自分の本当の心に合ふ様にする、それが歌を作る上の第二段階になるのです。

歌を作る上で大切なことが一つあるんです。それは、いい歌と、どこかをかしいところのある歌とをはっきり区別しななければいけないといふことです。あまりいい歌ではないのを非常にいい歌だと思ふことは厳に慎まなければいけません。従って、自分の歌はそんなに素晴らしい歌ではないと自覚するのも大事なことなんです。いい歌といふのは自分の心を正確に表現した歌なのです。そこで、この合宿では、ありのままに言葉に表すといふ修練をしていただきたい。それが、自分の思想を正しくすることだと思ひます。さういふ道を日本人は千何百年にわたって、——日本語を使ってきたといふ意味からすれば何千年前からかも知れませんが——続けてきてゐるのです。自分の気持ちを正しくありのままに述べるといふこと、それが正しく考へることそのことなのですが、日本人は大昔からさういふ道を歩み続けて来てゐる、その一番中心にあるのがこの歌を作ること、心の中でいろいろ言葉を選ぶ努力を続けることだらうと思ひます。

### 感 激 を 歌 ふ

まづ全体として、齋藤先生のご講義を聞いた感動を述べた歌がたくさんありました。齋藤先生の、ことにお歌ひになるお歌を聞いて非常に深い感動を催した、その感激を歌に歌ったもの



が多かった。自分自身が感激を受けたことをはっきりと自覚することは非常にいいこと、大切なことで、ここに本当にいい歌が生まれてくるのです。

それから、広瀬誠さんの「坂の沼琴」といふ歌集の中から山田先生が短歌導入講義の中でお示しになられた連作の一番最後の歌、すなはち広瀬さんの奥様が

わが背子は物な思ほし事しあらば火にも水にもわれ無けなくに

といふ歌を歌ひながら、その歌に力を得て瀕死の広瀬さんの看病をなさったといふお歌、並にその奥様のお気持ちに非常に深い感動を覚えて、多くの方々がいい歌をたくさん詠んでをります。

ただちょっと不思議に思ったことですが、皆さん妙見岳、仁田峠へ行かれた日は非常によく晴れて、風光も実に明媚だといふことで、さういふ歌がたくさ

んあるんぢやないかと思つてゐましたが、これが余りないんですね。あの仁田峠あるいは妙見岳の頂上から見る、有明海、そこに島々が浮かんでゐて、霞がかかったりしてゐる姿は実に大きな眺めですが、なかなかこれが歌にならないんですね。自然をよく味はふといふことは大変大事な、しかしまた大変むづかしいことだと思ふんです。

### 自然を味はふ心

今朝の御講義で小田村先生が昨日の慰霊祭で加納先生が拝誦された御製を紹介されましたが、その中で

なかなか風の絶えたる夜半にこそ落つる木の葉の音は聞こゆれ

といふ、非常に精妙といふか実に微妙な繊細な感覚を明治天皇はお詠みになつてをられます。それは、自然に対して、それを味はふお心持ちが実に深いといふことなんです。

普通、われわれはさういふ機会にたびたび恵まれてゐたはずですがさういふ経験がとても出来なかつた、あれだけの「落つる木の葉の音」を聞く様な深い心をなかなか味はふことは出来なかつたし、もちろんそれを表現することも出来なかつた。あのお歌を拝誦しますと、明治天



皇様はわれわれが自然を見たり物の音を聞いたり、鳥の声を聞いたり、虫の声を聞いたりするよりももっと、もっと深くこの自然を味はってゐらっしゃることがお互ひ、はっきり分るだらうと思ふんです。

私は最近、明治天皇のお若い時からの御製を拝誦しましたが、お若い頃は自然を詠まれた歌が非常に多いんですね。そして一つ一つ非常に深い心で自然を眺めていらっしゃることがわかりました。

自然を味はふ心を深める努力、自然に対する一種の感受性を深めていく努力は、これは家を思ひ、それから国を思ふ、さういふ心を深めていく努力と全く同じものだらうと思ふんです。心を深めるといふそのことが大事なんです。家の思ひ方、それから国の思ひ方の深さ、浅さがあるんですね、人間には。思ひを深める努力をわれわれは常日頃から考へていかなければならないので、明治天皇様が自然を深く味ははれたといふことを範として、心を深める努力、ことに自然を見、自然の物音を聞く、さういふ感受性を深める努力を今後とも続けていただきたいと思ひます。

叙 景 の 歌

自然をそのまま詠んだ歌から見ていかうと思ひます。第三十三班、広島女子大、矢谷真由美さんの歌

雲間からあふるる日の光うけ千々石湾の白く輝く

これはいい歌ですが音調がちょっと悪い。かう直して見ました。

雲間よりさし来る天つ日をうけて千々石の海の白く輝く

「雲間からあふるる日の光うけ」、ここはちょっと音調がをかしいでせう。「千々石湾の白く輝く」、これも字足らずになる。ですから「雲間よりさし来る天つ日をうけて千々石の海の白く輝く」とすると音調も整ふ。内容がいいから、直せばいい歌になると思ひます。

それから、第三十一班、拓殖大、原 理さんの歌

雲仙に登りて大地見渡せばあふれる緑に心静まる

多少説明的ですけれども、まあいい。第三十三班、関西外語大、山本茂美さんの歌

空に近く高みに登りて思ふ眼下の峰山空海よ一つにとけて荘厳に見ゆ

これは詩のやうな形とすれば十分内容を持ってゐると考へていいんですが、短歌はやはり五七五七七、一首一文といふ原則を守らなければいけませんから、班にお帰りになつたあと、みんなで二、三首ぐらゐの連作にするとしても、なんとか五七五七七の短歌の形式に改めていただきたいと思ひます。

似た歌ですが、第三十五班、福岡教育大、上谷勝美さんの歌

緑濃き山に囲まれなごやかに小さき妹共に行きたし

「なごやかに行く」といふところも、なごやかに連れていくのは当たり前なんだから、これを少し直して、

緑濃き山の中の道いつか我幼き妹連れて行きたし

とすればいいであらうと思はれました。

第十三班、九州産業大、西村義広君ですね。

有明のかすみかかゝる海原に通りゆく船白く波立つ

少し言葉を変へた方がいいと思はれるので、

有明のかすみかかれる海原を過ぎゆく船に白き波立つ

原作は、「船が波を立てる」と詠んだのかも知れませんが、これでいいのではないでせうか。

叙景の歌はほかにも少しありましたが、せっかくの美しい光景を前にして、それを言葉に表はせないことは残念なことですから、今後ともさらに努力していただきたいと思ひます。

なほ、加納祐五先生の「雲仙合宿に初めての朝を迎へて」といふ歌があります。叙景の歌としてまことに優れた歌と思ひますので皆さんと一緒に読んでみたいと思ひます。

寢覚めして窓をひらけばやうやうに夜は明くるらし茜あかねさしつ

新月の淡くかかりてひとひらの雲さへ見えぬあかつきの空

空かぎる山の嶺ねはなほ暗くして地はひたすらにしづもりてあり

雨霧のおほき山ぞと聞きしかどよき日なるらむけふのひと日は

三百の友らこもりてあるからに天も恵みをたれたまひしか

空の色はまなくうつりて新しき月の光の消えなむとせり

非常に精妙な美しい光景がこの歌によってわれわれの眼前に展開されてゐます。みんな朝、

これに近い様なことを見てゐる訳ですけれども、それを歌へるといふことは大変優れたことだと思はれます。

### 言葉を正確にする

さて、今度は第一班、福岡教育大、森田重隆君の歌です。

舌癌の手術受けられし広瀬兄とふ人のことお聞きするなり

かの妻の「火にも水にも入りなむ」と給ふこと聞けば涙流るる

十とせ余り二つの歳より覚えられし万葉の御歌の美しきかな

その御歌五十年経だてて今もなほ人の生を支へられしか

これは「経だてて」といふ「経」といふ字は、「隔」といふ字を書くか、あるひは仮名で「へ」と書くのが正しい。先ほどお話した広瀬夫人について詠んだ歌で、一首一首には言葉の整はないところもあります。歌といふものは大体こんな風に詠めばいいのです。あとで班の中で言葉を直して下さい。歌といふのはかういふ風に詠んで、言葉をもっと正確にすればいい歌が出来るとお考へいただいたいと思います。

次に第二班、宮崎大、鹿毛義弘君の歌、

満杯で風に吹かるるロープウェイ谷底見れば動悸早まりぬ

これはどこがをかしいかといふと、(笑ひ)大体「満杯」といふ言葉はこんなところでは使はない。普通だったら「満員」と言ふところでせう。それから、「動悸早まりぬ」も、後はどうなったのか、何か心配になって、ぼったり倒れたといふ様な、最後の歌になったんじゃないかといふ様な、(笑ひ)歌だけ見ますとそんな心配も起ってくるので、少し直してみました。別に悪い歌ぢやないんです、ありのままの歌ですから。それから「風に吹かるる」も、紙が風に飛んでいく様に吹かれてゐる訳ぢやありませんから、これは、

山風にゆらるる満員のロープウェイに深き谷底見れば恐ろし

といふ風になれば相当の歌になると思ひます。相当といふのは別にうまい歌といふのではなく笑はれない歌になると思ひます。

それから、第三班、亜細亜大、冨知浩一君の歌、「齋藤先生の御講義をお聴きして」、かういふ歌はみんないい歌になる可能性を持っていますね。



この夏は再び皆と逢へるとは思はざりしと師ののたまへり

これは、「師ののたまへり」は「師はのたまへり」といふのがいい。この「の」と「は」の違いがやはり日本語の非常に深い意味合ひを持つところなんです。日本語の特徴は助詞と助動詞にあるとさへ言はれてゐる訳ですから、さういふ深い意味合ひを持つてゐる助詞の使ひ方を、歌を詠む時に勉強する訳です。その次の歌、

三年をも登壇さるる師の君に悲しき願いの伝はりて来し

大体のところは何を言はうとしてゐるのか分るけれども、言葉は非常に未熟ですから、あとでゆっくり直していい歌にして下さい。

次の和歌山大、森山雅生君の歌、

班友とせまりくる時間を気にしつつせまき山道をかけのぼりゆく

これは、たしかに歌にはなつてゐる。歌といふものはこのやうに具体的にあっさり詠んでいけばいいんだけれども、しかし内容が深い内容ではないですからね、時間を気にしてただかけ登っていくといふ、（笑ひ）それだけのことではいい歌になりやうがない。これから発展して、あと、いい歌が出てくればこれはものになる、といふので、まあ入口には来てゐるといふこと

でせうか。

その次の、中央大、岩越健一君の歌、

早朝にみんなで歌ふ君が代にしばらくぶりの感動おぼゆ

「しばらくぶりの」といふ言葉は余り聞いたことはありません。「ひさしぶり」とは聞きま  
すけれども。さういふところを直していったらいい。

次の、九州大、広瀬修君の歌、

湯けむりのゆるりと空に溶けゆけば山里静か蝉しぐれのみ

湯けむりはゆらゆらと立ちのぼる。「ゆるり」は無理でせう。しかも「溶けてゆく」といふのはちょっとおかしいですね。だからここは「湯けむりの空に溶けゆく山里の」、としたらどうか。さらに具体的に時間が朝か夕方か昼か知りませんから、それを入れて、例へば、「山里の昼静かなり蝉しぐれのみ」とか、朝なら「朝静かなり蝉しぐれのみ」とかすれば、まあ多少いいんですけれどね、これも朝であっても昼であっても同じ歌になるといふのは本当はだめなんです。朝なら朝の、朝でなければならぬ歌を作らなければいけないんです。

それから、第四班、東大、小山正篤君の歌、これもやはり「齋藤先生の講義を受けて」とい

ふ歌です。

しみじみと真心こめて歌うたふ師の聲聴けば涙流るる

これは非常にいい歌なんですけどね、全く敬語が使ってない。「師」と言ってるくらゐですから敬語がどこかに必要で「しみじみと御心こめて歌うたふ」といふ風に直せば、そこに一箇所敬語が入ります。自分が涙が流れるといふことを言ふ歌ですから先生に対して最低そのくらの敬語を入れておく必要があります。それから次の、

死の際に妻子供らと手を取りて歌を歌ひし人をしのびぬ

これは別に直すところはありません。

第五班、佐賀大、弥吉博幸君の歌、

頂きに登りてはるか望みてもわが故郷ふるさとはなほはるかなり

これは「はるか」「はるか」となつてどんどん先へ行つてしまつて、見えるのか見えないのか。はるかに見た、そのはるか先に故郷があるといふ、どの辺にあるのかよくわかりませぬね、これは。途中まで直しましたが、「頂きに登りて見ればはるかなるわが故郷は」そのあと

はどこに見えるとか、見えないとか、海のかなたであるとか、山の向かうであるとか、何かそこに具体的な言葉がないと歌には難しいと思はれました。

### 感動は歌になる

第七班、広島大、秀 晶君の歌です。

登山中息をするのも苦しときロープウェイ乗る友うらやまし

別に間違ひはないけれども、うらやましいといふ気持ちに歌に詠んでもあんまりいい歌はできませんね。それなら自分で乗ればよかったんだ、ロープウェイに。(笑ひ) 小林秀雄さんが「欲望は歌にならない、しかし、感慨は歌になる」と言っただけです。感動は欲望とある程度結びついてゐるんですね。しかし欲望は歌にならない、感動は歌になると言ふ訳です。例えば恋愛でもある程度欲望的な面がありますから、それだけではもちろん歌にならないでせう。ところがそれが感情になっていくとそこに初めて歌ができると言ふんですね。そして欲望から感情に移る、その移り行きのことは、これはわからない。しかし、歌を作る人は欲望が感情になる、そこに一つの飛躍がある。欲望が感情になるのは異質のものになってゐるんですから飛

躍だけでも、歌を作る人はみんなその飛躍を体験してゐるんだと言ふんですね。だから、歌には感動を詠むので、欲望は歌にならない。これは自分で作ってみればすぐわかります。

第九班、千葉工業大、吉村浩之君の歌です。「仁田峠にて」

幼児は望遠鏡に走りより両手を上げて背伸びしてみる

この「両手を上げて」といふのが何をしてゐるのかよくわからないですね。「望遠鏡に」「両手を」、ああ、さうですか、両手を望遠鏡にかうくつつけて、かうやって背伸びして見ると言ふことですね。それだったらさういふ風に表現しなければいけないんですけどね。こんな風に直してみました。

幼児が望遠鏡に走りより背伸びしてみる姿かはゆし

かはいいとか美しいとか、清らかであるとか、さういふ感情は、すぐ歌になるんですね。それから、第十班、宮崎大、二階堂彰君の歌。これはあんまり直らないんですけどね、

山峰を思ふがままに翻る燕の姿雄々しきかな

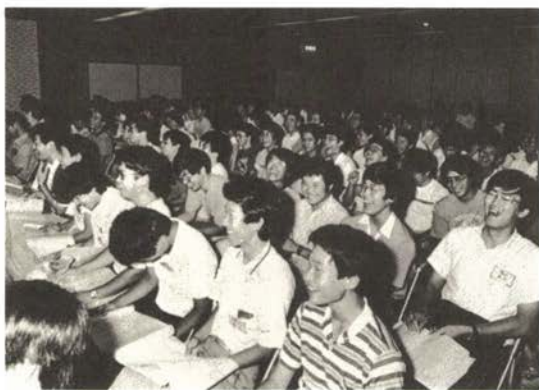
その次の、防衛大、小川泰規君の歌、

久々に雨にぬれたる草々は我と同じく新たに  
なりけり

あとの歌は草と自分と同じく新たに  
なったといふ、何か原始人みたい  
なんですね。(笑ひ)悪い意味では  
ないのですが、われわれは草と自分  
が一体だといふところまで感ずる  
ことはむづかしい、そこに無理が  
あると思ふのです。前の歌は燕の  
翻って飛んでゐる姿が雄々しいな、  
といふ、しかし本当の気持ちは雄々  
しいといふ気持ともう少し何か別  
の気持ちぢゃないだらうかと思ふ  
んです。さういふところをまた直  
してみる必要があると思ひます。

次に、日大、金谷美保君の歌、

火をたきて陛下を送る鹿兒島の民の真心  
我も持たまほし





「民」といふ言葉は、われわれがお互ひに民であるといふことはいいんですけれどね、「鹿児島の民」といふと、誰か上にゐる人が「民」と言つてゐる様な感じが多少しますから、「鹿児島の人の真心我は持ちたし」と言へばいいと思ふんです。それから「火をたきて陛下を送る」は「火をたきて陛下を送りし」ですね。送った、としていただきたいと思ひます。

### 先生、先輩方の歌

この歌集の中にいろいろ立派な歌が出てをりますので、皆さんと一緒にこの機会ですから読んでおきたいと思ひます。

まづ、齋藤忠先生がお詠みになった歌は、昭和十四年に当地に來られて以來四十四年目に來られて昔のことを思ひ出しながらお詠みになって、合宿地をお発ちになる前にわれわれのために残して下さったお歌です。なほ、齋藤先生はこのお歌を、みんなが歌を作るところにご一緒に参加していただくお積りでわれわれに下さったのだらうと思ひます。大変有難いと思ひますし、歌も非常に感情のこもった立派なお歌であると拝誦しました。

命ありてまた訪ね得し雲仙の空かくも晴れて日影やさしき

なつかしき思ひ出を胸に歩み入る湯けむりの町よ風さわぐ森よ  
殉教の碑はいづこぞと路問へば花売る人の優しかりけり  
風吹き通る町を行きつつふと思ふわが若き日はすでに帰らず  
思ひ出はかくも悔のみ先立ちて面伏せて行く夕風の町

絶唱です。

先ほど読まれた山口秀範君の歌があります。「ロンドンからの電報」、

ロンドンの夏を涼しみ雲仙の高原の風しのぼるゝかな

ますらをの力あつめて日の本のいしずゑ築くつどひなせるか

先人の苦闘の故に万国に誇れる国ぞ我らが祖国は

されど又信なき民の榮ゆるはつかの間のみと肝に銘ぜむ

我は今壁にいとみて西欧のわざとところをまなびつつあり

第四首目は、ロンドンにあって日本の国の行く末を本当に心配してをられるいい歌です。

小田村寅二郎先生の歌

合宿もはや半ばとはなりにけり時経ちゆくを気づかぬままに

緊張の連続といふ日々なればかく疾く時は過ぎゆくらんか  
年に一度心知り合ふ友どちの遠く寄り来て勵む集ひよ  
若きらにわれらが思ひ通ふべき道ここにありと信じてやまず  
窓の外の木々の緑は活き活きとまみにうつりて見るに清しも

歌はいい歌をたくさん読めばいい歌ができる様になるんですね。小野吉宣君の歌です。「開  
会式の折に」、

ぞくぞくと来りし友ら席につき今や満ちたり講義の部屋は

取知君の静肅にとの一声に部屋は静まる水打ちしごと

日の丸の飾られたる演壇に立ちたる友は開会宣す

君が代の前奏流れ来もるともに君が代歌ふ時は来たりぬ

君が代を歌ひいだせば胸内ゆ感動湧きたち全身に走る

みず知らずの学生達と今やもう心一つに歌ふがうれし

大君の萬歳念じ祈り込め力の限り君が代歌ひぬ

国文研、宝辺正久先生の歌。これは広瀬夫人を詠んだ歌です。

夫みとる妹が唱へし万葉歌友が壇上にうたへば泣かゆ  
病む友もそを見る妹もいにしへの歌のいのちにいのちをつぎし  
あつき病に堪へてうたひし連作のしらべ消えざりわれらの胸に  
立山の越の広野にいのちつぐ友のおきふし安けくと祈る

なほ、下の句と上の句の間に休止は置かないで歌は読む様にします。  
国文研、長内俊平先生の歌「家なる妻へ」、

最先に妻めに告げやらむ聖王の御本の講義今終れりと

いたらざる身をはげまして友どちにこころをこめて語りかけたり  
この朝けあさみどり澄みわたりたる大み歌かかげありけり集ひの庭に  
語るべきことどもむねにうづまきてよべの一夜はねずてありけり  
語り終へし我に寄りきてねぎらひのことばを友らはかけてくれたり  
都より大空近きこちする空のさまなどまた便りせむ

大変舌足らずになりましたが、以上で時間も来ましたので終りにいたしたいと思います。

■ 青年研究発表



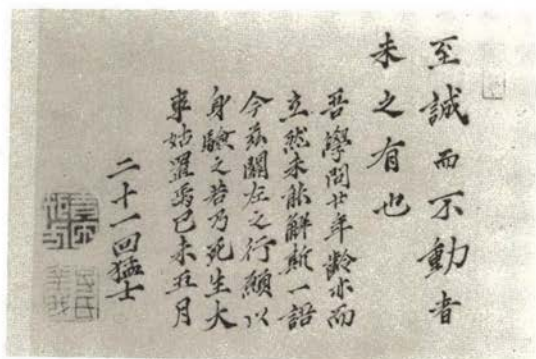


教育現場で思ふこと

熊本県立八代高等学校教諭

白 浜

裕



江戸護送の前に（本書 41 頁参照）



唯今、御紹介にあづかりました白浜です。現在、熊本県の高校で社会科の教師をして居ります。

私が卒業しました熊本大学の構内には、かつて夏目漱石が五高教授時代、明治三十年の創立記念日に、教員代表として述べた次の様な祝辞の一節が石碑となつて残つてゐます。

教育ハ建国ノ基礎ニシテ、師弟ノ和熟ハ育英ノ大本タリ

即ち、教師と生徒が互ひに睦み合ひ、信頼し合ふところに教育の基は成立するといふのです。更に漱石は、もしこの信頼関係が崩れたら、「教育全ク絶エテ、国家ノ元氣沮喪セム」と続けてゐます。漱石が教育の問題を一学校の問題に止まらず、一国の将来の命運を左右するものとして、国家的見地から論じてゐるところに注目させられます。

さて、翻つて現実の教育現場を顧るとき、教師自らが、この「師弟ノ和熟」を壊す様なことを平気で行つてゐる、さういふ光景が至るところで見られます。

例へば、我国の最大の教員の組合である日教組は、法律では明確に禁止されてゐるにも拘らず、年中行事の如くストライキを打ちます。私の学校でも七十パーセント位の教師がその日はストに入ります。スト当日は朝のホームルームも残つた教師で各々数クラスを廻り、慌しく済ませなければなりません。生徒の中にはストを見越して、遅刻して来る生徒もゐます。考へ

てみれば、会社のストであれば経済的な損失が生じますが、学校の場合、その様な意味での実害はありません。ストに参加する教師の処分による賃金カット分は組合費から補填してくれるのです。因みに、日教組は組合員が本部の指令によって行動して逮捕されたり、臍首されたりした場合に備へて、多額の費用を予め予算に計上してゐます。この様な「救援資金」と呼ばれる金額は、この三年間で五百三十二億円、何と日教組の総予算の八十パーセントを占めてゐるのです。教育者の団体でありながら、罪を犯すことを予定し、犯罪を助長するかの如き制度を有する組織が、一体どこの国にあるでせうか。

これらの教師は、もし生徒が「先生は常日頃遅刻をするとか、校則を守れと言ふが、先生は何故、法を犯してストするのか」と問はれたとき、何と申し開きをするのでせうか。その意味で私はストの問題は、単に授業の進度が遅れるとか、遵法精神の喪失といふ次元の問題ではなくて、生徒の範ともなるべき教師のその様な行動が師弟の内的な信頼関係を崩し、何か生徒の精神の奥深いところが舐まれてゆく様な、法以前の問題があると思ふのです。

この合宿に何度も来講された福田恆存先生は、「教育・その本質」といふ文章の中で、次の様に述べてをられます。

子供といふものは（中略）教師や親が見せようとしたものを見ない。教へようとしたものを



学ばない。かれらが見せようとも教へようともしないところで、かへって子供はなにものかを学びとる。親や教師がみづから気付いてゐない生きかたを、子供の眼はあやまたずに見てゐる（中略）「民主主義」や「平和」を教へても、先生自身がそれを身につけてゐないならば、生徒は結構、利己心や闘争心を養成される。さういふ影響力は教場においてもっとも強力に働くものです。

以上の様なことを考へると、私は教師としてといふより、まず一人の人間として、日常の抜差しならぬ生徒との附合ひの中で、信頼を得る様な生き方をしてゆかねばならないと切に思ふのです。

○ さて周知の通り、昨年は教科書問題がマスコミを賑はし、結局、外圧に屈するといふ形で屈辱的解決をみました。

その過程でのマスコミの論調は、文部省の検定の非を鳴らすものが殆どでした。しかし、実際に教科書を使ってみると、果してこれが公正な立場で記述された、日本人を育てる教科書といへるのか、文部省は一体何を検定してゐるのかと、いつも考へさせられるのです。例へば、高校の「現代社会」(実教)の中に次の様な一節があります。

このような憲法改正論に対しては、革新勢力の側からは反動的な改悪だとして強い反対が表明されてきた。これまでのところ、改正を主張する保守勢力の側が発議に必要な各議院の総議員の三分の二以上の多数を占めていないので、改正やその発議は実施していない。ただ選挙の結果によっては発議が可能になるので国民としては、この重大な問題について常に十分な注意を払う必要がある。

これは明らかに、「憲法改正＝悪の図式」によって、改憲を主張する政党への投票を牽制したものと言はざるを得ません。しかも一方では、占領下に僅か一週間で出来た現憲法の制定経過に関しては、いはゆる護憲論の立場からすれば、絶対に真相を知らせるべきではないといふ考へによるのでせう、殆ど触れるところがないのです。この「現代社会」といふのは、今度行はれた教科課程の変更によって生れた学科で、現在、全国の高校生が社会科唯一の必修教科として、一斉に学んでゐるのです。



齋藤先生が今朝の御講義で、恐るべきソ連の軍拡の実態など、日本を取り巻く国際情勢の厳しさを、縷々御指摘下さいました。しかし、この様な事実も、「平和」が単なるイデオロギーになってしまつてゐる現在の学校教育の中では殆ど触れられることはありません。そののみか、祖国の歴史を罪惡視し、特定イデオロギーを賛美する教育が、政府公認の教科書を使って、小中高一貫して行はれてゐるのが現実なのです。

明治の先覚者福沢諭吉は、その著『文明論之概略』の中で、平和な時にはいくら個人的な楽しみで耽つてゐてもよいが、一旦、国の独立如何にかかるとなると出来たら、蜂の尻尾に触れたときの様に鋭敏であれ、と述べてゐます。ところが、最近の青年に関する各種の世論調査は、内外の情勢の推移にかかはらず、社会や国家に背を向け、自分だけの小さな空間に閉ぢこもつてゐる孤独な若者の姿を浮彫りにしてゐます。学園での友人同士の会話も旅行やアルバイトなど、当り障りのない身辺のことに限られ、この合宿のテーマである学問や人生、或いは祖国といふ問題を真剣に語り合ふといふことは稀になってしまつてゐる様に思はれるのです。しかし、毎日教壇に立つてゐて痛感するのは、彼等には本来我が国が置かれてゐる現状に眼を開き、将来を憂慮する気持が無いのではない、彼等にとって一番身近な学校教育の中で、真に教へられることが教へられてゐないから、さういふ孤独の世界に追ひ込まれてゐるにすぎないといふことです。

今日の日本は国内的には空前の繁栄を貪つてゐますが、その存立の基盤たる防衛については、殆どアメリカに依存してゐます。豊富な資源と巨大な軍事力を保有するアメリカは日本なしでも存続できるけれども、日本は食糧、防衛いずれの面に於ても、アメリカなしでは生きられない運命にあるのが現実です。一昨年、私はアメリカ各地を旅行したとき、各層の人々に日本への関心や印象について尋ねてみました。その結果、一般庶民のレベルに於ては、依然としてホンダ、ソニー、カラテの類であり、日本の地理的位置や政治経済の情況に関して正確な認識を持つてゐる人はごく僅かでした。その様な国と日本はいはば一蓮托生の関係にあるのです。私は訪米して改めて、日本のことは我々日本人が心配しなければ、どこの国も本気で心配してくれないのだといふことを痛感しました。

歴史を遡るとき、独立自尊の気風なき民族が滅びた例は枚挙に暇がありません。先に臨調の會長を努められた土光さんは、『日本の自殺』（昭和五十一年、PHP刊）といふ、国民が国の防衛を忘れ個人的欲望の充足のみに走つて、ついに他国の侵略を招いたギリシャ、ローマの滅亡の過程を記した本を読んで、日本を第二のギリシャ、ローマにしてはならないとの一念で、その大役を引き受けられたと聞いてゐます。私は、これら戦前戦中を通じて、孜孜營々として今日の日本の繁栄を築き上げた人々が第一線を去り、戦後教育を受けた世代が社会の中枢を占めるやうになったとき、果たしてこの繁栄を維持できるのであらうか。先程述べました様な教育

現場の混乱と、生徒達に教へられてゐる看過できない教育内容の現状を顧るとき、いはゆる「日本の自殺」は、国家百年の大計たる教育の崩壊が引き金になるのではないかと危惧せざるを得ないのです。

私は今考へなければいけないのは、教師自らが、現在の教科書に象徴される誤った教育内容を正確に批判できる力を身につけ、生徒に父祖の苦闘の歴史と文化遺産を継承し、生き生きとした学が喜びを蘇へらせることだと思ひます。

未だ教師としての経験も浅く、試行錯誤の毎日ですが、教師といふ仕事の責務の重大さを自覚し、これからも努力してゆくつもりです。（昭和五十年、熊本大学法文学部法学科卒）



合宿教室を  
通して学んだこと

関西熱化学㈱ 勤務

天  
本  
和  
馬



松陰東行の折「帰らじと思ひ定めし道なれば  
ひとしほぬる涙松かな」と詠まれた萩南郊涙松の碑





私は現在、兵庫県の化学会社の研究所に勤務してをります。化学会社と申しまして、製鉄用に熔鉱炉で使います。コークスを大量に製造する会社ですので、毎日、原料の石炭と、製品でありますコークスといふ黒い物体と格闘してゐる、いはば炭屋でございます。しかし私はこれらの黒い物体に限りない愛着と親しみをもってをり、毎日コークスが熔鉱炉の中でありつぱな役割を果たすやうにとの願ひをこめて、育ててゐるのですが、けふはそれと離れて、私が学生時代以来、この合宿教室を通して学んだことがどのやうなものであつたかといふことを中心にお話を申し上げようと思ひます。

私は昭和四十五年、あの七十年安保と言はれた年に大学に入学致しました。既に一昔前のことです。大学は左翼学生の引き起した紛争のために、騒然とした雰囲気の中にありました。そのやうな中行はれるクラスでの討論は互ひに自己の主張を通すために、相手の言葉じりとらへて批判したり、たうてい自分の気持ちとはかけ離れたとしか思へない強い調子の主張がなされ、それは全く無味乾燥の言葉の投げ合ひとしか思へないものでした。この合宿教室で私達が心がけてゐる、「相手の気持ちをくみ取らう」とする努力や「自分の気持ちを正確に表現しよう」とする世界とは全く違つてをりました。私は左翼の学生運動家に対する生理的な嫌悪感もあり、これはおかしい、間違つてゐると思ひ、その都度反論したりするのですが、多勢に不勢でむなししい思ひが後に残るだけでした。

そのやうな時、学内で、「古典を通して学ぼう」といふ簡単な案内の掲示を眼にしました。その掲示は当時の学内のケバケバしい政治的主張の看板とは違ひ、地味で目立たないものでしたが、何かしら真面目なものを感じました。それは信和会といふ会の案内でした。その会では当時、「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」といふ本を輪読してをりました。それは、学内の政治運動の雰囲気とは根本的に異り、相手の言葉に耳を傾け、その真意をくみ取らうとする真剣な場でした。自分の気持ちを正確に表はさうと時間をかけて言葉を選ぶために沈黙が続くこともしばしばでした。しかしこのやうな当時の先輩方が、大学紛争の渦中であつては敢然として立ち上り、紛争終結のために努力されたことを知り、私はこの先輩方といっしょに学んでゆけば間違ひはないと思ふやうになつたのです。そしてその年に、今年と同じやうにこの雲仙で行はれました合宿教室に参加することになりました。

その合宿教室には先に亡くなられました、文芸評論家の小林秀雄先生が講師として御登壇になり、「文学の雑感」と題してお話になりました。そして講演の後の学生の質問に答へられて、私にとっては非常に感銘深いお話をなさいました。それは一人の先輩学生の「天皇に対する接し方はどうすれば良いのでせう」といふ質問に対してです。先生は皇居に行かれた時の経験を話され、その中で「新嘗祭の時に、陛下はね、賢所にお入りになるんです。夜ですよ、たった一人でお入りになるんです。それで、何をなさつてゐるんだか分からないのです。誰にも分らな



いんです。むろん、新嘗祭ですから、新しいお米をね、神さまにお供へして、神さまにお礼を申し上げる、一つの儀式があるわけです。それは天皇しか知らない、天皇だけが守っていらっしやる一つの儀式なんです。で、その中へ入って長いこと出ていらっしやらない。その間に、臣下、つまり僕らはね、篝火を焚いて、陛下を待ってゐるわけです。寒いんですよ、寒いからその時に、お酒が出るんです。」と述べられました。私はそのお話を聞きまして、陛下はこん

なにも国民のことを思ひ、長い時間をかけて一心に祈ってをられる。国民になり代って、御先祖の神々にご報告していらっしやる。私は今まで陛下のこのやうな御日常をほとんどといってよいくらい知らなかったことが恥しくなりました。小林先生は更に続けて、「その時にね、アンティミティっていふのは、ああこういふものだな、と僕は分った。このアンティミティは、日本人がみんな、昔の人は持ってたんで

す。ついこの間まで持ってたんです。」とかういふふうにおっしゃいました。小林先生が抽象的な天皇論といった観点からではなく、御自分の経験を通して、御自分の心に感じたままを話されたことに深い感銘を受けました。私はその時、天皇に対するアンティミティ、つまり親しみがなければいくら天皇について論じてもダメだと思ひました。そして、私の父や母が日頃、陛下に対して親しみと敬愛を込めて話題にしてゐたことを思ひ出しました。父や母は、陛下が私達の祖先からこの日本といふ国を受け継ぎ、次の世代に伝へるとともにその御報告も欠かさずになさってをられる。そのやうなことに對して、父や母なりに御敬愛申し上げてゐたものと思はれました。

そして私は、陛下は当時の学生運動の騒然とした様子を御先祖の神々にどのやうに御報告されてゐるのだらうかと思ふと、私は言ひやうのない気持ちになりました。

合宿教室でこのやうなお話を聴いた私は、天皇についてもっともっと知る必要があると思ふやうになつたのです。合宿教室から帰った私は前年の合宿記録「日本への回帰」を読み直しました。実はその合宿教室には、元侍従として、今上陛下の身近に仕へてをられた木下道雄さんといふ方が「宮中見聞談」と題してお話になってをられました。その中に昭和六年に熊本での陸軍特別大演習が行はれ、その終了後、鹿児島から軍艦にお乗りになつてお帰りになるときのお話があります。木下道雄さんはその時、陛下のお供をして、行動を共にしてをられた訳で

す。夜、鹿児島から出港して間もなく、鹿児島の沿岸の人たちが途中でお迎へをしてゐないとも限らないと思はれ、お一人で後甲板にのぼってゆかれた。甲板には誰もゐないと思はれたが、誰か一人海の方を向って挙手の礼をしてゐる後姿が見える。近づいてよく見ると、それは何と今上陛下であられた。木下さんは、さてはお迎への人達の乗った船が来てゐるなと思つて下を見たが一向に船は見当らない。木下さんは不思議に思ひ、側の望遠鏡で薩摩半島の方向をのぞいてみると、海岸線一带に、えんえんと何十キロメートルにわたって赤い紐のやうなものが見えた。それは、薩摩半島の人々が今頃は陛下の乗られた船が沖合を通過する頃と思ひ、ちようちん、たいまつを持って、又篝火を焚いて、全員で陛下をお見送りしてゐたのです。そのお見送りの火が、海岸線に切れ間なくつながって見えていたのです。陛下はその様子を望遠鏡で見られ、暗い甲板の上からただお一人で、沿岸の人々に挙手の礼をなされてをられたのです。私はその箇所を読みましたとき、日本といふ国は何とすばらしい国であらうかと思ひました。陛下の御存在といふものがわかったと思ひました。誰も見てゐない甲板でただお一人で黙々と敬礼を返してをられる陛下と、陛下に伝はるかどうかもわからない遠い沿岸で、そろつてたいまつや篝火を焚いて陛下をお見送りしてゐる人々の姿を思ひ浮べ、私は胸が熱くなる思ひでした。木下先生はその時、この陛下のお姿を、ここにかうして陛下は沿岸に向つて敬礼をしてをられるといふことを、何とか沿岸でお見送りしてゐる人々に伝へたいとお思ひになつたさうです。



「陛下は沿岸の火を認められて、お別れのご挨拶をしておいでになりますよ」と。そして一案を思ひついて、艦長に事情を話して軍艦の探照灯を全部つけてもらふことにしたので。そして探照灯の光で沿岸の人々にここに陛下がをられるといふことを知らせるといふことが出来たのです。沿岸では万歳、万歳といふ声が上がったといふことです。

私はそれを読みましてこの上もなくうれしい気持ちになりました。天皇と国民の間の自然のつながりが確にあります。小林秀雄先生が合宿教室で力を込めて「日本人がみんな、昔の人は持ってたんです。ついこの間まで持ってたんです。」と言はれた、誰に言はれるまでもない自然の感情だったのです。

私はこのやうなお話を通して段々と陛下の真のお姿に接するやうになり、それまで遠い存在と思つてゐた天皇といふ御存在が身近に感ぜられ、この上もなく尊いものに思へて来たのです。

さて私は始めにお話したやうに、民間企業の一社員であります。研究部門と申しましたも小はグラム単位の分析から、大は何トンもの原料を用いての工場の生産に直結する試験まで様々であります。時にはヘルメットをかぶり、世界中から集まる原料の石炭と対面してゐます。大部分が海外から輸入される原料は世界の動きと密接につながっており、政情不安や、海外の港湾ストライキによつても、或は天候によつてもその供給に不安が出ることもしばしばです。

そのやうな中であつては、世界の中の日本といふことを考へずにはをられません。海外の港



湾ストライキはその人達にとっては待遇改善のための一つの手段ですが、日本にとっては致命的なる恐れさへあるのです。私は日本へ輸入される原料が安定するために、自分の仕事が少しでも力になってゐることを思つてうれしくなることがあります。日本の中の一企業で、又その中の一人の人間の果す役割は微々たるものですが、この合宿教室を通して教へて頂いた祖国の生命に連つてゐるといふ思ひは忘れずに持つてゐるつもりです。私はいつても、何か事があると、陛下は今どのやうに思つてをられるのだらうかと考へることにしてゐます。そして陛下が御先祖の神々に安心して御報告なされるやうにと思はずにはゐられないのです。私はこのやうな思ひで、これからも毎日の仕事に力を尽さうと思つてをります。（昭和五十二年、九州大学工学部大学院修士課程卒）



戦後の国語改革について

（株）講談社勤務 藤

井

貢



萩より山口に向ふ旧街道



ただいまご紹介いただきました藤井でございます。私は講談社に入社以来十年間ずっと、おもに子供向けの雑誌・書籍を校正してまわりました。いふまでもなく校正といふ仕事は、原稿と照らし合せて正しい印刷物にするために赤字を入れてゆく作業ですが、一字でも原稿と違ふ文字が印刷されて世に出ることは、その本を買っていただいた読者にご迷惑をかけるばかりでなく、ひいては会社が信用を失ふことにつながります。しかし、校正といふのはそれだけでなく本が出来上る前に「最初の読者」として文章を検討することも校正者の大切な仕事なのです。具体的にいひますと、この文章はをかしいのではないかと常に思ひながら、辞書や百科事典などで調べる、いはば文章のあらさがしをしながら、より質の高い本をつくるといふ役割もなっております。かうした仕事を通じて、現在私が最も痛感してゐますことは、戦後の国語政策および国語教育のあり方がいかに重大な問題をはらんでゐるか、といふことです。

最近、昭和五十七年十月に「当用漢字」を改めた「常用漢字」が制定されて、それまではかな書きが原則であった「皿」「泥」「縄」など百四字の漢字が新たに、いはば「市民権」を与へられて大っぴらに使へることになりました。このやうに時の政府の意向によって国語の一部が一朝にして変はるのは、まさに「国語」が「政策」によって左右されることを示してゐます。このやうなことは戦前までは全く考へられなかったことでした。ところが戦後にはそれが当り前といふ風潮が生れてしまひました。いふまでもなく戦後の「国語政策」の基本は、「当用漢字



社でも「国語政策」にしばられて仕事をしてゐるのが現状です。

また、小学校の教育段階では、ひらがな・かたかなは何学年で教へるべきか、さらに「教育漢字」といって、漢字一字一字についての学年で教へるべきかといふことを「文部省学習指導要領」に定めてをり、教科書検定の規準としてゐます。かうして「国語教育」のあり方は「国語政策」と深くかかはってゐるのです。

（現在は常用漢字」と、「現代かなづかい」ですが、いづれも昭和二十一年十一月に「内閣告示」として公布されてゐます。ここでいふ「内閣告示」とは、公務員が公文書を作成するときに守るべき規準を内閣総理大臣が申し渡すといふことなのであって、必ずしも国民すべてが守らなければならぬ規則ではありません。しかし、新聞社・出版社がそれにさからつたのでは商売が成り立たないといふ次第で、私の会



もちろん私も戦後生れですので、大学生の皆様方と同じやうに「現代かなづかい」と「当用漢字」にもとづく国語教育を受けた一人です。従って、この国民文化研究会の合宿教室に参加するまでは、戦後の「国語政策」について、それを疑問に思ったことすらありませんでした。ところが友達と黒上先生の「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」や吉田松陰先生、小林秀雄先生のご著書を読まうとしますと、今までの「現代かなづかい」「当用漢字」では到底読むことができず、たえず辞書を引かないと口に出して読むことさへかなはぬ有様でした。

私たち戦後世代の者は漱石や鷗外も原文では読めないと思はれてゐますが、そのやうな明治の文学もさることながら「古事記」「万葉集」をはじめ、日本民族の遺した数々の古典文章を読み、祖先の生き方に学ぶことに力を尽さなければ、私たちのあとに続く世代にはますます日本人の生き方そのものがわからなくなってくる事態が待ってゐるやうに思ひます。

さて、私が大学時代、戦後の国語政策に疑問をもち、そのことについて勉強する直接のきっかけとなりましたのは、文芸評論家の福田恆存先生が書かれた「私の國語教室」（新潮文庫・中公文庫）といふ本との出会ひからです。この本を読むうちに、私も福田先生を見習って、「現代かなづかい」をやめて、いはゆる「歴史的かなづかひ」を使って文章を書くことを始めましたところ、大まかな原則を覚えまし、辞書を引けば、案外に難しいことではありませんでした。

かうして卒業後、会社に入り、今の部署に配属が決ったころ、私は上役に「『現代かなづかい』と『当用漢字』はよくないし、まだ三十年たらずの決まりなので、千数百年にもわたるそれ以前の本来のかたちに戻るべきではないでせうか」と尋ねたことがあります。上役は「それはないよ、藤井君」と即座にいはれ、会話は途切れましたが、今にして思へば、出版社の校正者が「現代かなづかい」や「当用漢字」を無視することは仕事を放棄することであり、新入社員だったからこそ許された質問だったやうです。が、このやうにして会社では厳密に「現代かなづかい」や「当用漢字」を使はねばならないといふことはわかりましたが、同時に、「この職場にゐる間、戦後の国語政策をテーマにもっと勉強してみよう」と心に決めました。

ところで、「当用漢字」のよくない点は、その内容の是非よりもまづ漢字を使ふことに制限を加へたことです。幕末・明治から戦前までの国語問題の歴史をふりかへてみますと、漢字をやめて国語をローマ字にしようといふローマ字論や、かなだけにしようとするかな文字論や、子供の漢字学習の負担を軽くしようとする漢字制限論などが各方面から、手を替へ品を替へて持ち出されてゐます。しかしながら、もしもかな文字あるいはローマ字しか使へないとしたら大変なことになるのは一寸考へてみればすぐわかることです。例へば「うみ」「エビ」といってもそれが漢字の「海」「膿」「生(産)み」のどれをさすのか全くわからないし、語句の切れ目がわかりにくい文章になることは容易に想像されます。言ひ換へれば、漢字とかな文字が組み合

されてゐる方がはるかに速く正確に読むことが出来るのです。すなはち意味を受け持つ漢字と読みを受けもつかな文字を交へた「漢字かな交り文」といふ、先祖が築き上げた国語の姿こそ、私達が受け継ぐべき貴い伝統であり、絶やすことなく持続していくべき文化なのです。

そもそも「現代かなづかい」といふものは、昨日の合宿導入講義で福岡県立水産高校の占部賢志先生が話されましたやうに、「現代語音」にもとづくかなづかひであり、現代人が発音する通りに書かうとするものですが、そのために大変な混乱が起つてゐるのです。例へばよく使はれる「合ふ」といふ動詞をとり上げてみますと、「現代かなづかい」以前にはその活用は「合ハ（ズ）」「合ヒ（タリ）」といふやうにハ行四段ですが、「現代かなづかい」では「合ワ（ナイ）、合オ（ウ）」「合イ（マス）、合ッ（タ）」「合ウ」「合エ（バ）」「合エ」と、ア行とワ行にまたがる五段活用になります。本来ハ行一行でをさまてゐた活用語尾が、「現代かなづかい」で発音どほりに書くことに決めた結果、ア行・ワ行二行に分かれ、「合ワ（ナイ）」「合オ（ウ）」と二種類の未然形が併在するといふ不合理・複雑さが生じたのです。ところが「現代かなづかい」はすべて現代語言通りであるかといへばさうではなく助詞の「は」「へ」「を」だけは、「わ」「え」「お」と発音どほりに書いてはいけません。ところがこの助詞「は」「へ」「を」の例外は、小学校低学年の国語教育では、生徒が覚え、身につけるまで、例文を示しながら繰り返し教へてゐるのです。もしそれが可能であるなら、動詞の「合ウ」「教える」は、「合ふ」

「教ふ」と書くことと教へることも可能ではないでせうか。そのほか、「現代かなづかい」では着物を入れる行李は「こうり」と書き、水が凍った氷は「こおり」で、数字の十は「とお」と書けといふのです。このやうなオ列の長音「お」と「う」の使ひ分けが何故生じたかといへばそれは元来「歴史的かなづかひ」で「かうり」「こほり」「とを」と書いてゐたのでそれを改めたためにこのやうな表現をするのだと説明してゐるのです。このことは「歴史的かなづかひ」を知らなければ「現代かなづかい」を使ひこなせないといふことになる。実に奇妙なことが行はれてゐるのです。

最後に、国語審議会漢字部会で国語は「漢字かな交り文」であることを徹底して主張され、漢字を制限した「当用漢字」から、漢字使用の目安の「常用漢字」に改めたときの推進役を果されました、癌研究の権威であられた故・吉田富三博士の「現代かなづかい」批判の文章を引用させていただきました、私の発表のしめくりといたします。

「現代語を現代語音で表記するといふ新仮名は、仮名遣ひの歴史と伝統はこれを無視するといふ宣言に等しい……(略)……今「現代」と称するものが、伝統を破壊して、法を作る者は現代だとするなら、「次の現代」にもまた、同じく法を作る権利があることにならう。かうして日本語の未来は破壊の連続となり、ここに最も憂ふべき「失はれてゆく日本語」があることになると思ふ。言葉の問題はそのまま精神の問題である。伝統を失ふことは道を失ふことであり、

言葉の無法は精神の無法であることを思ふべきである。」（読売新聞社刊「随想集生命と言葉」より）（昭和四十八年、早稲田大学第一文学部卒）





一年のあゆみ

九州大学工学部三年

北 浜 道

亜細亜大学法学部四年

冢 知 浩 一



吉田松陰永訣の歌（松陰神社）



一 昨年の夏の合宿教室が終り、霧島山を後にした僕らの胸に焼きついてゐたのは、これまで殆ど知ることのなかつた天皇陛下の暖かい御心や祖国日本の為に尊い御命を捧げられた方々の遺された激しい御志であった。日本といふ国は、そのやうな先人達の御努力によって相続せられてゐる。この日本に生れ合はせた事の有難さを、何とか一人でも多くの学友に伝へたい、さういふおもひを各自胸に湛へつつ、僕らは大学生活に戻つて行つた。

しかし大学に戻つてみると、そこではまじめに勉強に励む友は多いのだが、そこで交はされる会話はその場限りの話題に終始してをり、凡そ国家とか天皇陛下の事はおろか、各自の人生観上の問題についてすら真剣に考へ合ふといふ風は実に希薄であつた。そしてその中にゐる僕ら自身も、国とか陛下の事を考へるといふ事自体が何か場違ひであるかのやうな感に囚はれる事が度々あつた。合宿での体験を学生生活といふ場の中で、又更には自己の専門の分野の中でどのやうに生かしてゆくか、それは云ふべくして実に至難であつた。合宿での体験を級友に語つても、友は関心を示さない。友の目前の関心事はやはり専門の知識、技術を身につける事である。しかし乍ら、専門の知識、技術を習得することは大切だが、それを本当に人生の中に、社会生活の中に生かしてゆく道が合宿で学んだことではなかつたか。その二つのものは決して別々のものではない。僕ら一人一人は、たとへ専門分野が異なり、知識、技術の習得が不可欠の条件であつても、やはり僕らの人生の根本には日本に生れた事の有難さがあると思ふし、そ

れ以外に僕らの活力の源泉はないはずである。僕らはくじけさうになる気持ちを励ましながらかうして各地区で輪読会や短歌の会が営まれ、それを更に徹底すべく小規模の合宿が次々と開かれたのである。一昨年（昭和五十七年）から昨年（昭和五十八年）の春にかけて行はれた各地区の合宿の内訳は以下の表の通りであった。

△地方合宿▽

主催	年月日	場所	参加大学
東京信和会	昭和57年 9月4日～5日	東京「正大寮」	亜大・早大・明星大 神奈川大・一橋大・拓大
東京信和会	10月9～11日	横浜「杉山神社」	亜大・早大・明星大 神奈川大・一橋大 拓大・千葉工大
大阪信和会	10月9～10日	大阪「一信寮」	立命館大・大阪大

一年のあゆみ (北浜)

福岡信和会	福教大信和会	熊本信和会	福岡信和会	東京信和会	大阪信和会	福岡信和会
5月14～15日	昭和58年 5月7日～8日	12月10～12日	11月20～23日	11月20～23日	11月20～21日	10月23～24日
津屋崎 「宮地嶽神社」	宗像市「美松荘」	八代市「八代宮」	津屋崎「花波荘」	東京御嶽山「藤本荘」	大阪「一信寮」	福岡「明王院」
九大・西南大・福大	福教大・九大	熊大・熊商大・九大・福大	九大・西南大・福大 福教大	亜大・早大・明星大 神奈川大・一橋大 千葉工大	立命館大	九大・西南大・福大

亜大日本文化研究会

5月21～22日

小金井市  
「小金井青少年センター」

亜大

なほ東京地区では、現代日本青年として考へるべき我が国の外交内政上の諸問題について研鑽を深めるべく、学生時代国民文化研究会の合宿に参加され、現在社会の第一線で活躍してをられる方々をお招きして連続講演会を開いた。その内訳は左表の通りである。

△ O B 連続講演会 △

主 催	東京 信 和 会		年 月 日	昭和 2658年 2月27日
場 所	東京「正大寮」	講 師 ・ 演 題	加来至誠先生（外務省） 「現在日本の抱へる諸問題」 岩越豊雄先生 （神奈川県箱根町立吉浜小学校教諭） 「現在の国際情勢について」 山根清先生（防衛施設庁） 「教科書問題について」	



扱て、年の明けた一月八、九日の両日、僕らは福岡葦牙寮に集り、これまでの活動及び四月に新入生を迎へるに當つての心組みをどう整へてゆくかについて話し合った。そしてそこで浮き彫りとなつたのは、僕らの思想運動が、大学に於ける学問研究からともすれば遊離しがちになつてゐるのではないかといふ事であつた。現在、かつての様に学生運動は激しくなく、学生は皆安穩としてゐて、特に表立つた問題は無きが如くである。このやうな中であつて、吉田松陰先生や聖徳太子にいったい何を学ぶ必要があるのか、極言すれば僕等自身にとつて大学に於ける学問とは何か、といふ事を根本から見つめ直さなければならぬ、春季合宿はさういふ意図の下に、場所も松陰先生ゆかりの地、萩の「長寿寺」に於て行ふことになつた。

合宿は三月十九日から二十一日までの三泊四日間行はれたが、その内容は次頁に掲げた日程表の通りである。合宿の全貌を記録する紙数は無いが問題点を中心に略記しておきたい。

第一日の夜の討論で友の一人が、ある先輩から「君は国を憶ふといふが、それは君の心の一番奥底から、ぎりぎりのところから生れた気持なのか」と問はれ、答へに窮したといふ体験が問題となつた。この友はその後いろいろな体験の中から「自分の置かれた場で、与へられた職分に精一杯尽す時に、自分も国を支へる一端となり得てゐる事を沁み沁みと感ずるやうになつた」と述べ、又その事を基に「国を憶ふ」といふ事を自分なりに深めて来た事を述べた後、「しかし乍ら、現在の国際情勢の中で日本が直面してゐる危機といふものについてはまだ充分には

実感できない」と現在の気持を率直に述べてくれた。この友の話は、我が国の抱へてゐる問題

△春期合宿日程▽

3月21日(月) 第三日	3月22日(火) 第四日
(起 床)	
朝 の 集 ひ	(起 床)
朝 食	朝 食
全 体 輪 読	全体所感発表
小田村寅二郎先生御講話	
萩市内紹介(山根先輩)	昼 食
萩市内散策	夏合宿へ向けての事務 連絡及び地区別話し合ひ
	閉 会 式
夕 食 入 浴	
所 感 披 瀝	
夜 の 集 ひ	

		3月19日(土) 第一日	3月20日(日) 第二日
		春季合宿日程表	7:00
8:00			朝の集ひ
9:00			朝食
10:00			学生発表(是松秀文)
11:00			質疑応答 全体輪読
12:00			昼食
13:00			全体輪読
14:00			
15:00			
16:00			
17:00	開会式 自己紹介 合宿諸注意		
18:00			
19:00	夕食 入浴		夕食 入浴
20:00			所感披瀝 全体輪読
21:00	所懐表明文を 読んでの討論		
22:00			
23:00			
24:00	就寝	就寝	

を我が事の如く感じられるやうになりたいといふ気持の披瀝であり、それは又その場にゐた僕らの等しく抱いてゐた思ひであった。しかしこの思ひは、それを求める僕等自身の切実な思ひが欠落すれば、単なる言葉だけのことに終つてしまふ危険を孕んでゐる。この先輩の問ひは、ともすれば形式化し硬直化する僕らの心の姿勢に対する本質的な指摘であり、又自己の学問の中に「国を憶ふ」といふ事をどう位置づけるかといふ、日本青年として考へるべき根本的問題を投げかけるものであった。

二日目の討論の中では福岡教育大学の山田輝彦先生の御話が心に沁みだ。先生は「私が歴史の見方を教へられたのは小林秀雄先生からでした」と御自身が敗戦当時の思想的混乱の中で迷はれる中、小林先生の「私の人生観」を手にされた時の御体験を沁み沁みと話してゆかれた。そしてその書物の中の「昨日も今日も生き続けてゐる自己のいのちの持続感を持って。簡単に反省などして自分をごまかすな」といふ言葉に、「それまで低迷してゐた自分のいのちが掬ひ取られる思ひがしました」とその時のよろこびを話されたが、先生の御話しに耳傾けてゐた僕ら学生自身も、先生の云はれる「いのちを掬ひ取られる思ひ」を沁み沁みと味はふことができたのである。

その後、黒上正一郎先生の「うたと消息」から、先生の思想教化活動の如実に偲ばれる御手紙を皆で読み味はって行った。黒上先生は次のやうに書かれてゐる。



春季合宿が行はれた萩「長寿寺」

「たとひ自らを行ひ他をも念じて修行しても『若し自他を存する』即ち自己に執着して自己の解脱をねがひ或は他を念ふとしても、そこに自己の好悪を存して自己中心の思想を固執する時は『則ち修するところが広からず』つまりあらゆる人の心にめざめることが出来なくして、人と共に苦樂を同じうする能はざるに至って、真の教化はその意義を失ふことになるとの仰せであると存じます。」（三十七頁）

ここで黒上先生は人の教化といふ問題について論じてをられるが、僕は友を輪読会や合宿に勧誘する時の切実な経験に引き比べて読んで行つた。友を誘はなければならぬ、と思つて話をしては友の心は動かぬし、かへつて友の心も見えて来なくなる。誘はねばならぬといふ義務感で心が縛られるからである。僕らが友に働きかけるのはこのやうな義務感であつてはならない。義務感には自他を分つ思ひがある。黒上先生

の御指摘は僕らの精神の根底にかかはる問ひかけであつた。

三日目は、午後から明治維新の原動力となつた幕末の志士達の眠る萩を散策したが、その前に、国文研の理事長の小田村寅二郎先生に吉田松陰及びその周囲に生きた方々について話して戴いた。先生は松陰先生を支へてゐた叔父玉木文之進や兄杉梅太郎の事を話された後、「松下村塾聯」を朗々と詠み上げられたが、中でも「一己の労を軽んずるに非ざるよりは、安んぞ兆民の安きを致すを得ん。」との言葉に、僕らは自分が任ずべき問題に取組む時の心の姿勢を正される思ひがしたのである。

一方、この合宿が行はれた直後、三月二十六日から二十八日まで、福岡市郊外津屋崎海岸の「花波荘」に於て女子学生による春季合宿が行はれた。

第一日目は、鹿兒島で小学校の教師をされてゐる内山なな子先生に御話し戴いた。先生は百分で求めようとしなければ何も見えてこない」といふ小林秀雄先生の言葉をあげながら、大事にしたいことをずっと心に灯し続けてゆくことの大切さを話された。そして社会で働かれる中で気づかれた、言葉の深さ、励まし合へる友の有難さを心を籠めてお話し戴き、これから私たちが学生生活を送ってゆく上での大切な指針を示して下さった。

二日目は筑紫女学園短大の助教飯田正美先生が、今日の競争社会に於ける男性と女性の生き方の相違として、物と物との関係を重視する男性に対して、女性は人と人との関係を重視する



ところに本来の生き方がある事を指摘され、又女性は生き物を感じ取りやすく、人間尊重、共感能力に優れてゐる事を挙げられた後、「女性の使命は社会の中に生命のいぶきを吹きこむことです。」と言はれ、具体的に社会で、又家庭でどのやうにそれを実現してゆくかについて、先生御自身の御体験の中から考へを述べられた。

最終日は、福岡県立修猷館高校講師の小柳陽太郎先生が、小林秀雄先生の「お月見」の文章を引用され、日本人が自然の動きに対していかにこまやかに心を動かしてきたかを話された後、徒然草第百五十五段の「春暮て後、夏になり、夏果てて、秋の来るにはあらず。」といふ文章や古事記の一節、水上勉氏の「花守りの記」などを引用しながら、自然の流動し、循環してやまない姿を日本人がいかにこまやかに見つめて来たか、いかに大切に育んで来たかについて語られた。そのあと先生は正岡子規の病床詠を一首一首丁寧に読み味はってゆかれ、自己の生命の短さを知り、生命の尊さを感じた子規が、自らの死を予感しながら、移ろひゆく自然の美しさ、尊さをいとほしんでゆく様を偲んでゆかれた。

○ 四月に入つて、前途洋々たる学生生活に希望で胸ふくらませつつ新入生が門を潜つて来た。僕は、現下の学園内に絶えて無い、本当に心籠る生きた言葉の交はされる場を実現しようと、新たなる友に呼び掛けて行つた。しかし乍ら、何か求めるものあって入学して来ても、それを

自己一個の枠に止めて了ひ、外に問ひを發する精神の弾力を失った傾向には抜き難いものがあり、僕らの呼び掛けに応へてくれる友は少なかった。だが一方、何とかしてこの低迷した学風を切り開かんと、講演会、合宿等を開いて友に呼び掛けた甲斐あって、呼び掛けに応じてくれた友も多く、それらの学生と共に昭和五十八年八月、雲仙の地に於て、昭和三十一年の出發から実に二十八回の全国学生青年合宿教室は開かれたのである。

△講演会▽

主催	年月日	場所	講師・演題
九州大信和会	昭和58年 4月27日	九大教養部 学生会館第二会議室	講演テープを聞く会 「小林秀雄―「信ずることと知ること」」
西南大信和会	5月23日	西南会館一号会議室	山口秀範先生（大成建設海外事業部） 「国際人として生きる道」
熊大信和会	5月28日	熊大教養部 B-41教室	山田輝彦先生（福岡教育大教授） 「思想家としての小林秀雄」

<p>亜細亜大 日本文化研究会</p>	<p>福岡大信和会</p>	<p>九州大信和会 (研究発表会)</p>	<p>九州大信和会</p>	<p>福岡教育大信和会</p>
<p>6月27日</p>	<p>6月25日</p>	<p>6月18日</p>	<p>6月4日</p>	<p>6月2日</p>
<p>亜大二号館223教室</p>	<p>福大二号館211教室</p>	<p>九大教養部10番教室</p>	<p>九大教養部26番教室</p>	<p>福教大・共通講義室 201教室</p>
<p>名越二荒之助先生(高千穂商科大教授) 「教育荒廃の根源とは何か」</p>	<p>黒岩真一先生(大牟田北高校教諭) 「日本の将来と教師の役割」</p>	<p>松井哲也(九大院二) 「学問と恋愛」 上村栄章(九大院一) 「吉田松陰と現代青年」 北浜道(九大工三) 「歴史に生きる」</p>	<p>小柳陽太郎先生(修猷館高校講師) 「学問と人生」</p>	<p>占部賢志先生(水産高校教諭) 「詩と哲学」の復興― 現代青年の課題として― 脇本光法(福教大教四) 「友よ!と呼べば友は来りぬ」</p>



合宿教室のあらまし

福岡教育大学四年

是 松 秀 文

留魂録  
身はたとい我粉の所也に  
朽ぬも留置まし大和魂  
十月念五日 三十一回生士  
一余幸てまふ路百支津と懸新し就中  
趙ノ貴高ヲ希と楚ノ盛手ヲ仰く諸知友和  
ル所リ故子妻ヲ送別ノ句並趙多士二葉  
荆楚深憂以屈平ト云々は事也然レ三月  
十日 漢東ノ行ヲ聞シヨリ一試字ニ大  
ノ付ヨリ時ニ子建天守ヲ踏ん金堂ヲ用ヒテ  
一白楮布ヲ採テ孟子至衽席不勸者也





第二十八回全国学生青年合宿教室は、昭和五十八年八月六日より十日迄の四泊五日間、雲仙国立公園、有明ホテルで開催された。湯煙りの立つ雲仙山中の静かなこの地は、正にわれわれの学問の出発点にふさはしき格好の地であった。合宿三日前、準備及び運営に当たる国文研会員数名並びに幹部学生三十余名が集合し、事前の合宿が営まれた。わづか一泊二日の合宿ではあったが、発表・討論・輪読が真剣に行なはれ、合宿教室に臨む決意を互ひに確認し合ふ中で、新しい友を迎へむとする緊張感が、一人一人の胸内に高まって行つた。合宿前には準備が行はれた。多くの作業も分担され、着々と進められる。玄関前には、「友よ！と呼べば友は来りぬ」と墨書された白い横断幕が、ひぐらしの鳴きしきる雲仙の杉木立に高々と掲げられ、朝の集ひの行はれる広場には、明治天皇の御製「あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな」と墨痕鮮やかに大書されたのぼりも立てられた。夕刻、作業完了。あとは全国から集ひ来る友を待つのみとなった。

参加者の内訳は次の通りであった。

（学生班 七十二大学）

東北大1、東京大2、一橋大4、防衛大8、京都大1、大阪外大1、和歌山大1、  
 岡山大1、広島大1、山口大1、九州大17、福岡教育大12、佐賀大5、長崎大5、  
 熊本大10、宮崎大5、大分大1、鹿児島大4、大阪教育大1、神戸市外大1、

九州齒科大1、北九州大1、都留文科大1、早稲田大21、亜細亜大15、拓殖大17、  
高千穂商大7、東京女子大1、国学院大3、明治大1、関東学院大1、中央大3、  
日本体育大1、日本大10、土浦短大1、大東文化大1、千葉工大1、明星大1、  
神奈川大1、山梨学院大1、岐阜医療技術短大1、愛知学院大3、椋山女学園大2、  
京都産業大1、京都女子大1、京都女子短大1、大谷女子大1、関西大1、  
四天王寺国際仏教大1、梅光女学院短大1、武庫川女子大2、関西外大3、立命館大1、  
岡山理大1、広島修道大1、広島女学院大2、広島工大1、徳山大4、西南大6、  
福岡大4、福岡工大1、九州産業大2、久留米大1、九州造形短大1、中村学園大3、  
佐賀女子短大2、大分芸短大1、熊本商大1、尚綱大2、ECC外語1、  
東北電子計算機専門学校1、コピーライター養成講座生1、高卒3、

計二二九名（うち女子五三名）

（社会人・教員班）会社員、小・中・高教員など

計一九名

（招聘講師）二名

（大学教官有志協議会・国民文化研究会）六三名

（見学参加者）四名

（事務局）十名

総計 三二七名

参加者は、合宿申込書のアンケートを基に八名及至十一名を単位とする班に編成され、事前合宿参加学生及び国文研会員が班長となった。男子学生班は二十三箇班、女子学生班は六箇班、社会人班は三箇班に分けられた。

以下、合宿教室の流れを記すが、各講師の講義内容については印象を記すに止めた。講義内容の詳細は、本書に掲載されてゐるのでそちらをお読み戴きたい。

### 第一日（八月六日）

#### △開 会 式▽

午後二時、愈々開会式である。期待と不安と緊張の入り混じった中、早稲田大学三年・藤新成信君の力強い「開会宣言」により、合宿教室の幕は切って落された。参加者一同「国歌」を斉唱した後、祖国日本の平和を念じ「戦時平時を問はず、祖国日本の為に尊い命を捧げられたすべての祖先の御霊」に対し、一分間の黙禱を捧げた。

8月8日(月) (第3日)	8月9日(火) (第4日)	8月10日(水) (第5日)
(起 床) 朝の集ひ食 朝 食	(起 床) 朝の集ひ食 朝 食	(起 床) 朝の集ひ食 朝 食
(講義) 「古典と私たち」 小堀桂一郎先生 (質疑 応答)	(講義) 「国家は“文化”の 単位である」 小田村寅二郎先生 (質疑 応答)	運営委員長所感発表
		全体感想自由発表
		「合宿をかへりみて」 宝辺正久先生
記 念 撮 影	班 別 討 論	来 賓 御 挨 拶 倉 成 正 先生
班 別 討 論		班別懇談・第2回和 歌創作・感想文執筆
昼 食	昼 食	閉 会 式 (昼 食)
「短歌導入講義」 山田輝彦先生	(講義) 「いのち蘇る日を！」 小柳陽太郎先生	
仁田峠・妙見岳登山	班 別 討 論	
短 歌 創 作	地 区 別 懇 談	
夕 食 入 浴 散 歩	夕 食 入 浴 散 歩	
「古典講義」 東中野修先生	「創作和歌全体批評」 夜久正雄先生	
慰 靈 祭	班別和歌相互批評	
班 別 懇 談	夜 の 集 ひ	
(就 床)	(就 床)	

合宿教室のあらまし（是松）

第二十八回「合宿教室」日程表		8月6日(土) (第1日)	8月7日(日) (第2日)
	6:30		(起床) 朝の集ひ
	8:00		朝食
	9:00		(講義) 「急変するアジア・ 太平洋世界」
	10:00		齋藤忠先生 (質疑応答)
	11:00		班別討論
	12:00		昼食
	1:00		(講義)
	2:00	開会式	「輪読導入講義」
		運営委員長挨拶	長内俊平先生
	3:00		
	4:00	班別自己紹介 班別輪読	班別輪読
	5:00		
	6:00	夕食 入浴 散歩	夕食 入浴 散歩
	7:00		
	8:00	(講義) 「詩と哲学の恢復を」 占部賢志氏	青年体験発表 (白浜・天本・藤井)
	9:00	班別討論	班別討論・輪読
	10:00	(就床)	(就床)

続いて主催者を代表して、国民文化研究会理事長・小田村寅二郎先生が「私たちの生れ育った日本の長い歴史伝統は、あらゆる人の真心によって支えられてきたのです。さういふ人の真心を思ひ人間と深い密着性をもった言葉といふものを通して、自らの思ひを馳せてゆくことの大切さに気づいて欲しい」と合宿の主眼について話された。次いで参加学生を代表して九州大学三年・北濱道君が、「この合宿で御講義される先生方は、人生を真剣に模索してゆかうとする僕等の願ひに、きつと応へて下さることと思ひます。この四泊五日、共に励まし合ひ頑張りませう」と語り、開会式を終了した。

続くオリエンテーションでは、古川修合宿運営委員長（日産自動車勤務）が登壇され、班構成、運営体制の紹介の後、御自身の学生時代の合宿経験を振り返りながら、「お互ひが或る一人の友達がかかへてゐる問題に真剣に取り組んでゆく、そのことが自らの人生を真剣に生きてゆくことのあかしでもあると思ひます。自分がわからないと思ふ時は、臆せずその気持ちを班員にぶつけていって下さい」と訴へられた。最後に、合宿全般に亘る注意事項が、福岡県立筑前高校教諭・酒村聡一郎指揮班長より伝達された。この後、参加者一同は、各自の班室へ入り、合宿参加の動機や、日頃の生活ぶり等を含めた「自己紹介」を行ひ、昨年の「合宿教室」のレポートである「日本への回帰——第十八集」の輪読を行った。





班別討論

△講義▽

合宿導入講義として、福岡県立水産高校教諭・占部賢志先生が「詩と哲学の恢復を——現代青年の課題として——」と題して話された。先生はまづ、アンケートを読まれての参加者の真摯な思ひについて触れられ、「皆さんはこの様な思ひを抱き、集った。そして、自己紹介で、各々が自分の名を名のり、所在をはっきりと示すことによって、お互ひに学ぼうといふ気持ちを表明し合った。人生の大事は、このやうに見も知らぬ者同士が、自分の名を名のるところから始まるのではないか」と語られ、「自分の名を名のり、そこから胸襟を開き語り合ふことが、今の大学ではほとんど見られない」と、現在の大学の風潮を指摘された。次いで、米国教育使節団報告書を取り上げられ、仮名遣ひを制約した占領軍の国語改革について、「言語に対して、それを抑へようとするものがあることは、我々の文化

感覺、精神がどこかで拘束されてゐることである」と言語と精神の密接な關係を示され、現代価値觀の由來が戦後の占領軍の教育改革に大きく関はつてゐることを明らかにされた。そして、戦後、言葉が觀念化し、スローガン化してゆく中で、その風潮を憂へた三島由紀夫氏の「今の日本では言葉を正すといふこと以外にもう道はないと思ひつめてゐる」といふ言葉に出會つた時の衝撃を、そしてその言葉が現代においても息づいてゐることを、先生御自身の深刻な共感として述べられ、言葉を体験的に生きたものとして味はつてゆくことの大切さを強く訴へられた。続いて、先生は、吉田松陰の二十歳前後における日本全国周遊の経験について触れられ、「西遊日記」「兄杉梅太郎宛書簡」（嘉永四年八月十七日）「東北遊日記」等を基に、松陰の躍動し、揺れ動く心を偲びながら、心をこめて読んでゆかれた。そして最後に、「松陰の姿を偲ぶ時、合宿に集つた皆さんも、同じやうな道を辿りながら、今価値ある學問を握む出發点に立つてゐると思へる。先人の言葉や様々な人の言葉に触れての、自らの心の発動の機といふものを大切にしていって下さい」と語られ、参加者一同は合宿への思ひを新たにしたのであった。

#### △班別討論▽

夕食後、講義を受けての班別討論に入った。初めは一人一人が、講義を聴いての自らの心に残つた言葉、あるいは疑問点等を出し合つて行つた。しかし、既成の知識の応酬に終つてし

まったり、また自ら感じたことを思ふやうに言葉に出来ず、もどかしい思ひをしたり皆が心一つにして語り合ふことの難しさを、一人一人が痛感した。そして、そのやうな苦闘の中で、遅々としてではあったが一人一人が、本当に友と語り合ふことの意味をつかんで行った。やがて、皆はもう一度、講師の先生が自分たちに何を訴へられようとされたのか、そこに立ち返らうとの思ひを抱き、お互ひが友の語る言葉に真剣に耳を傾けようと努めて行ったのであった。討論は、この後も講義が終った後、毎回は行はれた。予定時間内に充分語り尽せず、もどかしく思ふ事も度々であったが、一人一人は心を開いて真剣に語り合ふよるこびを、身を以て体験して行ったのである。

## 第二日 (八月七日)

### △講義▽

第二日目は、国際政治評論家・齋藤忠先生の御講義から始まった。先生は一昨年、昨年と引き続き今回で三度目の御登壇である。本年の演題は「急変するアジア・太平洋世界——祖国の明日への祈り——」である。先生はまづ容易ならぬ国際情勢の中で、国を憂へて立った人々の上を思はれつつ、核兵器の問題に触れられ、広島原爆記念碑の碑文の言葉に籠る自虐的精神を

厳しく指摘された。そして、ソ連の中距離核ミサイルSS20の欧州配備等の例を以て、現代の世界の厳しい実情——特にアジアの危機について喝破され、「今、日本が本当に為すべきことは、日本本来の姿に目覚め、独立国家として堂々と物が言へる国にすることです」と訴へられた。さらに、大東亜戦争がアジアを救ふ為であった点を指摘されると共に「祖国を愛し、同胞を愛して戦場に赴いていった人々のことを知って欲しい。日本といふ国が、どんなに優しい国であるか、美しい愛の国であるかを知ったならば、命をかけてこの国を守らうと思ふのは当然です」と語られ、最後に、先生の御友人であられた岸本英夫氏が癌との闘ひの中で、人生の真の喜びを求め続けられたことを偲びながら、氏がよく歌はれたといふ「出船の歌」を壇上でしみじみと歌はれ、御講義を終へられた。

#### △輪読導入講義▽

昼食後、開発電子技術㈱専務取締役・長内俊平先生による「輪読導入講義」が行はれた。先生はまづ齋藤先生が語られた『美しい愛の国』といふ御言葉を引きかたて、「美しい愛の国とは、他人の悲しみが、自分の悲しみとなる様な国でせう」と語られた。そして、聖徳太子の『自他の二境を等しうす』との御言葉に同様の御心を偲んでゆかれ、日本人は自他が一つとなる世界を願ひ大切にしてきたことを語られた。次に先生は、十七条憲法の条文を味はってゆかれ、第一条の『人皆

黨あり』との御言葉に、私達がとかく自分の殻に閉ぢこもりがちである事実をきびしく指摘された。そして、その様な私達が如何にすれば和の世界を実現してゆく事が出来るのかを、第十条の『共に是れ凡夫のみ』といふ御言葉を引かれて、「君は自分を本当に知ってるのか、もしかしたら、自分自身が傲慢な怪物かも知れないではないか。自分ほど思ひ通りにならぬ、いたらぬ者はないと痛感した時に、初めて愚かな者同士が互ひに手を取り合って一步一步向上してゆく道が開けると思ひます」と語られた。又、同じく第十条の中の『衆に従ひて同じく擧へ』といふ御言葉が「何事においてもまはりに従へといふ事ではなく、非は非として正しながらも、常にお互ひが凡夫であるといふ痛感を忘れるべきではないといふ御指摘であると思ふと述べられた。最後に先生は、黒上正一郎先生の「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の一節を朗々



女子班の語りひ



と読んでゆかれ御講義を終へられた。

### △輪 読▽

御講義の後、青年研究発表をはさんで都合四時間の輪読に入った。輪読は、本合宿の柱の一つである。「輪読では何度も唱へる様に文章を読んで下さい。太子様の御声が聞えて来る事を願ってをります」との長内先生の御言葉を信じ、参加者一人一人はその事を自分の内心に実現しようと言葉に籠もる思ひを偲んで行った。しかし、読めども読めどもなかなか思ひが伝はつて来ず、苦しい思ひをする事もしばしばであった。輪読は、正に自己の内心が厳しく問はれる場である。だが、たとへ一つの言葉でも自分の胸内に響いて来る言葉、或は本当に自らの感じた思ひを語る友の一言によって、自らのくぐもってゐた思ひが晴れてゆく。この時のよろこびは、たとへ様のないものである。今回取り組んだのは、黒上正一郎先生の御著書「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の第二編の初めの部分であった。難解な書物であり、時間も限られてゐたが、班員一人一人が真剣に取り組み中で、黒上先生の真心籠もる御言葉が、しみじみと胸にしみ入って来る様であった。

### △青年体験発表▽



最初に登壇された熊本県立八代高校教諭の白浜裕氏（三十一歳）は、教育現場で違法なストライキや校長の吊し上げを行ふ教師の姿を、日々目の辺にされての思ひを、夏目漱石の『師弟ノ和熟ハ育英ノ大本タリ』といふ文章を引用され、「師弟の間の信頼が失はれてゆくことは、国家の衰退につながる」と語られ、また教師自身が自己の判断力を失ひ、集団としてしか行動できなくなつてゐることを憂へて、「まづ自分自身が生徒に信頼されるやうな生き方をして行かなければならないと思ふ」と述べられた。続いて、教へる内容の問題として、教科書問題を取り上げ、事実をありのままに見ることの大切さを語られ、最後に、アメリカ訪問の経験から「我々日本人が日本を考へなければ、誰も考へはしないことを痛感した」と述べ発表を終へられた。

続いて登壇された榎関西熱化学勤務の天本和馬氏（三十三歳）はまづ、大学入学当時、古典輪読の案内をしてゐた先輩の姿勢に惹かれ、学んでゆく中で「天皇に対してどの様に考へたらよいのか」と疑問を感じる様になつた折、合宿教室に於て、小林秀雄先生が陛下に対するアンティミティの存否について語られたことに、強い印象を受けた体験を述べられた。そして侍従次長であられた木下道雄先生が語られた話を紹介され、「夜、只御一人甲板に立たれ沿岸の篝火に向ひ礼をなさる陛下の御姿、そして浜辺で目に見えぬ陛下を見送る人々、その自然な真心のつながりに日本の美しさを感じます。そして、私自身折にふれて、陛下は今何を思はれてゐる

るのだらうと思ひつつ、日々の仕事に勤しんでゐます」としみじみと話された。

最後に登壇された講談社勤務の藤井貢氏（三十二歳）は戦後の混乱時に実施された「現代かなづかい・当用漢字」をめぐる国語の問題を提起され、「表記が複雑といふ短絡的な理由によるこの政策は、言語伝統を無視したものである」と訴へられた。そして、現代かなづかいと歴史的かなづかひの違ひを具体的に述べられ、「言葉の問題は精神の問題であり、この様に誤まった理由と力で言葉を振ち曲げていったならば、日本語の未来は勿論、日本人の精神そのもの破壊の連続となつてしまふであらう」と痛切な思ひを訴へ発表を終へられた。

### 第三日（八月八日）

#### △講義▽

合宿三日目の朝、御二人目の招聘講師、東京大学助教授の小堀桂一郎先生の御講義が行はれた。演題は「古典と私たち」である。先生はまづ、紀元前から中世に亘る西洋の古典の流れについて触れられ、「いくつもの試練を経て、厳しく淘汰されて来たものが古典であり、それは内に強い生命力を湛へてゐる」と「古典」といふ言葉の概念を把へられた。そして、古典の学びやうとして直接古語を味はふことの重要さを指摘され、「母国語で書かれた古典が十二、三

世紀以前に遡ることの出来ない西洋では、古典との間には距離があるが、母国語で書かれた遠い時代の古典をもってゐる日本においては、我々と古典は別ちがたくつながってゐる」と日本の古典の素晴らしさを明らかにされた。そして、私達と古典との内的関係について「古典とは、私達の祖先が、事に当って、如何に感じ、何を為したかといふ、思想と行動の記録です。その文章には姿があり、そこにはそれを著した人の心の姿が表れてゐます。そこを読みとり、先祖の息吹きに触れるといふ事は、私達自身の精神の原形質を知る、言はば自分との出会ひといふ事にもなるのです」と語られ「古事記」を繙いてゆかれた。先生は建速須佐之男命や大国主命の「国譲り」の話に表はれた、古代の神々の心情を親しみを以って話され、また、天照大神が祭られる神であると同時に祭る神である事に注意を喚起され「古事記」には唯一絶対神が出現して来ない事に言及され、「これは、皇室の御存在を考へる上でも重要なポイントである」と語られた。更に先生は、現代に生きる私たちにとっての古典の持つ意味について、「古典のもつ連続性は『道』と呼んでもいいものです。その一本通った道は、私たちが出会ふ危機的な瞬間にあってわが身を託すべき『道』となるものです」と古典が、豊かな、質の高い国民的な精神文化の遺産であることを語られたのである。

△短歌創作導入講義・短歌創作▽

参加者は、午後の仁田峠登山の後、短歌を提出する事になってゐた。それに先立ち、福岡教育大学教授・山田輝彦先生による短歌創作導入講義が行はれた。先生はまづ、新聞歌壇に代表される現代短歌のあり方を批判され、歌を作るにあたって自らの心を正確に見つめることの大切さを説いて行かれた。そして、舌癌におかされ一年に亘ってこの病と闘ひぬかれた、広瀬誠氏の闘病中の床上詠「手術のあと」といふ一連の連作を朗読され、「これらの歌が生に執着する本能ではなく、与へられた自らの命を精一杯、尽して生きてゆかうとする、美しい心情の発露である事が歌の調べから伝はって来ます」と語られた。その中でも「事しあらば火にも水にも入りなむと妻は夜すがら我を看とれり」「わが背子は物な思ほしと万葉の歌唱へつつ妻は祈るも」といふ二首に触れられ、広瀬さんの奥様が小学校の時、先生から「わが背子は物な思ほし事しあらば火にも水にもわれ無けなく」といふ万葉集の歌を教へられたことを紹介され、「まだ幼い小学校六年生の時に聞き及んだ歌を生涯心に刻んでゐた妻が、その歌を唱へつつ夫の無事を祈る。それを聞いた夫は、苦しい生を生きる力を得る。まさに、歌は詠み交はされて人生の中で力となつてゐるのです」と語られ参加者一同、その御話に深い感銘を受けたのであった。

御講義後、全参加者は仁田峠、妙見岳へと出発した。合宿が始まって以来、曇りがちだった雲仙の空もすっきりと晴れ上り、絶好の散策日和である。バスは一行を乗せ、仁田峠へと向つ

た。仁田峠到着後、それぞれロープウェイで、或は徒歩で、友と談笑しつつ雲仙の緑深き山道を登り、そして山頂を征服。妙見岳山頂からの眺めは格別であった。遠く有明海、天草灘そして橘湾を望むことができる。参加者は体中に山の新鮮な空気を浴び、その後、一路ホテルへ向ひ到着後、参加者全員は短歌を提出した。

#### △古典講義▽

三日目の夜には昭和四十六年に鹿児島大学を卒業、大阪大学の大学院を経て現在亜細亜大学助教授として社会思想について教鞭をとってをられる東中野修先生により古典講義が行はれた。

先生はまづ、明治天皇御製

いかならむことある時もうつせみの人の心よゆたかならなむ

を紹介され、この御製に示された「心が豊かであるとはどういふ事であらうか」と、考へつゞけてゐた時、「黒上先生の御本の中に『目に見えぬ「まこと」』といふ言葉があるが、その目に見えぬ『まこと』を感じようとすることで私達の心は豊かな心に一步でも近づけるのではないか」と考へる様になつたといふ御自分の体験を披瀝された。次に、吉田松陰が刑死前に父・兄に宛てた書簡や江戸護送時に諸友に遺した文章に触れ、中でも「至誠にして動かざる者は未だ



之れあらざるなり」といふ孟子の言葉について、「物事を本当に知るといふことは自らの身をもって知ることである」として、孟子の言葉を自らの人生において実証しようとされた松陰のことを語ってゆかれた。そして、「誠を思ふ」といふことについて『講孟余話』の文章を読みながら、「私達の現実には、信ずることよりも信じないことの方が多し。いつの間にか疑ひ、相手を責めることがある。しかし、そのやうなことができるほど自分は正しいのかと自らを振り返る時、不思議と心を通ふ。心と心を通ふ時、私達は実に多くのことに気づかされるのです」と述べられ、最後に、「信じ合ふ者同士が、信じる先生の書物を読み、かうありたいと念じながらつゞけてゆく勉強が大切です。そして、自分の経験を大切にしつつ、自分よりも高い精神に学んでゆく所に広やかな世界が開けて来るのです」と述べ御講義を終へられた。

#### △慰霊祭▽

慰霊祭に先立ち、山口県立南陽工業高校教諭・宝辺矢太郎氏により慰霊祭の説明が行はれた。その後、満天の星空の下、各々の思ひを胸に抱いて祭壇の前に全員が整列した。篝火が焚かれ、慰霊祭は厳かに始められた。御抜に代へて、長内俊平先生が、三井甲之先生の遺歌

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを



を二度朗詠され、戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い生命を捧げられたすべての祖先の御霊に対し黙祷を捧げ、降神の儀が行はれた。献饌の後、参加者一同を代表して高木尚一先生が祭文を奏上され、明治天皇御製・今上天皇御製を加納祐五先生が拝誦された。玉串奉奠の後、皆で「海ゆかば」を斉唱最後に昇神の儀が行はれ慰霊祭は終わった。

左に慰霊祭に於て拝誦された御製並びに祭文を記して置く。

（明治天皇御製）

夏草

ふるさとの庭の夏草ふみ分けてみればむかしのみちはありけり



朝の集ひの広場に掲げられた明治天皇御製の幟

落葉有聲

なかなかに風のたえたるよはにこそおつる木の葉の音はきこゆれ

社頭杉

しげりあふ杉の林をかこひにてちりにけがれぬ神のひろまへ

思往時

をりをりにおもひぞいづる国のため心くだきし人のむかしを

をりにふれて

戦のにはにたふれしますらをの魂はいくさをなほ守るらむ

かぎりなき世にのこさむと国のためたふれし人の名をぞとどむる

神祇

わがこころおよばぬ国のはてまでもよるひる神はまもりますらむ

述懐

末つひにならざらめやは国のため民のためにとわがおもふこと

(今上天皇御製)

社頭雪

ふる雪にこころきよめて安らけき世をこそいのれ神のひろまへ

松上雪

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ

○

（祭文）

風の音さやかに、山の木々のみどりしづまるこゝ雲仙の地に今宵昭和五十八年八月八日、われら第二十八回学生青年合宿教室参加者一同相集ひて、みくじのため尊きいのち捧げましてとこしへにみくにまもりますみおや達、いくさびと、同胞、友らのみたまなごめのみ祭りは仕へまつらむとす。

日本をめぐる国際情勢はいよいよよけはしく、いく重にもとざされしまなびの道をきりひらくべき我らのつとめはいよいよ重く、この神代さながらの自然の大地に集へる我ら、明治天皇、今上天皇の御製に、聖徳太子のみ教へに国民のゆくべき道のしをりを仰ぎつつ、かたみに心通はせみ国のことを憂ひつつ合宿もはや半ばをすごせり。

講義の聴講に、班別討論に、はたまた和歌の創作にその他くさぐさのわざに、かたしとて思ひたわまず千早ぶる神のみまもりを祈りつつ、いまよりのちもまなびやに、またつとめには力を合はせ、しきしまのみちいやつきつきにふみひらかむと、うけひまつることのよしをい

ましみことたちきこしめしたまへ。

天にますみ祖のみ霊よ、願はくは我らのゆくてをまもらせ給へと、第二十八回学生青年合宿教室参加者一同に代り、高木尚一謹み敬ひ恐み恐み白す。

以上慰霊祭の概略を述べたが、実はこの祭文を読んでいた高木尚一先生は今年（昭和五十八年）十一月二十四日脳溢血のため急逝、七十一歳の生涯を閉ぢられたのである。御高齢にもかゝらず朗々と御読みになった祭文のおことばが雲仙の夜空に遠くひびいて身のひきしまるおもひをしたあの日の感動が今かうして祭文を転記しながら昨日のことのやうに蘇ってくる。高木先生は私達が日頃お慕ひしてゐる黒上正一郎先生から直接教へをうけられた最後の方であった。謹んで御冥福をお祈りしたい。

#### 第四日（八月九日）

##### △講義▽

四日目の朝は、国民文化研究会理事長・小田村寅二郎先生の御講義に始まった。演題は「国家は『文化』の単位である」である。先生はまづ、「世のため、人のため」といふ言葉を紹介



左より小田村、小堀、斎藤、山田の諸先生

され、「この言葉が世界人類のために等といふ言葉に較べて、何と生き生きとして、何と判り易い言葉ではありませんか」と話され、その言葉のもつ雰囲気は蘇ってはじめて家庭の中に秩序が戻ることを指摘された。続いて『大学』の「修身齊家治国平天下」といふ言葉を示され、身・家・国・天下の相互関係を詳しく説いてゆかれた。先生はその中で「家」と「国」との関係について触れられ、その間には「生命的一体感」といふ紐帯があるが、「国」と「天下（世界）」との間は「相互理解と互譲と忍耐による共存意識」があるにとどまる、とこの二つの間の本質的な相違を指摘された。次に、大東亜戦争時にシドニー湾深く特殊潜航艇で潜入し、戦死した日本海軍軍人に対して行はれた豪州の海軍葬の実況録音を紹介され、祖国のために命を捧げるといふ厳肅な行為が敵味方や民族の違いを超えてかくも共感を呼び、畏敬を以て迎へられるといふ確

乎たる事実を示された。そして、具体的な、生きてゐる国とは何かといふことについて、「『国』とは一定の土地、一定の言語、一定の伝統からなる一つの生命体と見るべきものであり、文化はさういふ国なき所には生まれぬ。祖国日本が守られ続ける所にこそ、文化が息づく源泉がある」と強く訴へられた。最後に、「一人出家すれば魔宮皆動ず」といふ言葉を紹介され、「日々の生活の中で国に思ひを寄せつつ生きてゆくといふ意志を、皆さん一人一人が是非確立して欲しい」と語られ御講義を終へられた。

### △講義▽

合宿教室最後の講義は、福岡県立修猷館高等学校講師・小柳陽太郎先生による「いのち蘇る日を！」と題する御講義であった。先生は初めに、「戦争肯定」といふ言葉の不正確さを指摘され、戦争が厳然たる悲劇として私達の前に存在してゐること、そしてその悲劇は人間が人間である以上、永久に繰返されるものであるといふきびしい現実について述べられ、更に「このことを認めるといふことは決して好戦的といふ言葉で表現されるやうなことではないのです」と強く語られた。そしてこのやうな現代の風潮の背後には「どこかに誤りがあったといふ目で歴史を見る」姿勢があることを指摘され、「歴史の正しい接し方は、さういふ傲慢な心をすててその時代に生きた人々の喜びや悲しみを共に感じようとするのではないか」と訴へられた。つゞい



て先生は、以上のやうな社会風潮の原因の最たるものとして昭和二十年十二月占領軍によって発せられた「神道指令」を挙げられ、それが今に至るまで日本を支配してゐることを明らかにされた。そして、「このやうな占領政策に操られた物の見方ではなく、神代から脈々と流れてきた日本の歴史を自分の目で見、自分の心で憶念するといふ態度を回復しなければならぬ」と語られた。そして、日本人が遠い昔からどういふ気持ちで生きてきたかといふことを、御製を以て明らかにしてゆかれた。私たちは、日本に大切に伝はってきた日本のいのちが、おそ敵にあらはれてゐる御製にふれ、日本の国の姿を垣間見る思ひであった。先生は最後に、「御製を味はふ中で感じられる陛下の御心を信じ、その御心に随順することによって、戦後を風靡した何の根拠もない心のわだかまりを洗ひ流して欲しい」と一同に呼びかけられ、御講義を終へられた。

### △短歌全体批評▽

前日提出された短歌は、事務局の方々を中心に徹夜の作業を経て、ガリ刷りの部厚い歌稿に纏められ、我々の手に渡された。そして夕方、亜細亜大学教授・夜久正雄先生による「短歌全体批評」が行はれた。先生は一首一首の歌に作者の思ひを偲びつつ批評してゆかれた。中でも自然を詠んだ歌を取り上げられ自然をよく味はふことの大切さを指摘された。そして昨日の慰

靈祭の折、加納先生が拝誦された明治天皇御製

なかなか風のたえたるよはにこそおつる木の葉の音はきこゆれ

を引用され、明治天皇が深く自然を見つめてをられたことを偲ばれつつ、「自然に深く心を寄せ  
ることは、友を思ひ家を思ひ国を思ふ心を深める努力と同じです。この『思ひを深める努力』  
を是非やって頂きたい」と呼びかけられた。先生は、直截にしかもさはやかに感想を述べてゆ  
かれ、時には爆笑も起って、緊張した雰囲気もなごむ、楽しい一時であった。

この後、各班毎に班別短歌相互批評が行はれた。作者の気持を班員皆で偲び、互ひにより正  
確な表現にしてゆかうと努め合ふ中で、おのづと皆の心は開かれて行った。そして、このやう  
な研鑽を通して、歌を詠むといふことが自己を知るといふ事につながってゆくものだ、一人  
一人は実感して行ったのである。

### △夜の集ひ▽

厳しい日程をこなして来た参加者も、この時ばかりは合宿の疲れも見せず大いに宴に興じた。  
班毎、大学毎、地区毎、様々のグループが登場し、歌あり、踊りあり、爆笑と拍手の連続で  
あった。三井甲之作詞、信時潔作曲の「神洲不滅」「進めこの道」の大合唱によって宴が閉ぢ

られた後も、各部屋では尽きせぬ語らひが深更まで続いた。

第五日（八月十日）

△全体感想自由発表▽

この合宿教室に学ぶ中で感じた様々な思ひを、忌憚なく披瀝し合ふ全体感想自由発表の時間になった。まづ初めに、急拠社用のため合宿地を離れた古川本合宿教室運営委員長に代って運営委員の一人である占部賢志氏が登壇され、東京に帰られても刻々に合宿を案じられて度々電話をかけて下さる古川運営委員長のことや、遙かロンドンの地より合宿に思ひを馳せ電報を打って下さった山口秀範氏のこと等にふれられ、「幾多の方々の目に見えぬ篤い思ひが私達を支へて下さったのです。」と合宿を蔭から支へて下さってゐる方々を偲んでゆかれた。そして、「合宿では、それぞれが精一杯持味を生かして自分の言葉を語らうとした。この一人一人が他人事としてではなく、我が事として受け止めようとした、そのお互ひの苦しい努力の中に本当の『経験』はあるのです」と語られ、「私達はかうしてその努力を共にしてきた友達を一時に好きになつたのではないでせうか。さういふ目に見えぬ力で支へられてゐるといふ実感の中に、国といふことも息づいてゐるのではないでせうか」と参加者一人一人の胸の内に思ひを馳せられ、所感を披瀝された。

占部賢志委員の所感に続いて、二十名を超える友らが特別に指名されることもなく、次々と登壇してこの合宿における得難い体験や、込み上げてくるさまざまな思ひをうちつけに語った。その姿は聴く者に、深い感動と共感を呼び起こしていった。

#### △合宿をかへりみて▽

全体感想自由発表の後、宝辺商店株式会社で国文研の副理事長であられる宝辺正久先生が登壇された。先生は、「人生、学問、祖国を語るとは、自分の心をありのままに述べたい、人の話に耳を傾けて聴かうといふ事であった。そしてこれは心を労する事であったが、我が胸に刻みつけようとした、その集中した思ひはいつまでも残るのです」と述べられ、更に「日本蔑視の風潮を指摘された先生方の痛憤の言葉を是非胸に留め、一人一人が自らの志として立ち上がって行って下さい」と参加者一同に強く訴へられた。

#### △来賓御挨拶▽

その後、御忙しい中を駆けつけて下さった自民党幹事長代理・元経済企画庁長官・衆議院議員の倉成正先生が御登壇された。先生は現在の大学に於ける講義が知識の切り売りで人格的な接触といふものがほとんどないことを指摘され、そのやうな中であってこの五日間合宿教室で

学ぶことの大切さを語ってゆかれた。次に先生がシンガポールの指導者と会談された際に、「ゴ・」  
「ゲンスイ副首相が「我が国では現在近代化を図るために教育の改革に力を注いでゐる。それには教育の中に朱子学を導入すべきだと考へ、ハーバード大学から先生を招請することになった」と語ったことについて、「今日の中国は別として、一番影響を受け、学問的背景を持つてゐなければならぬはずの日本から先生を呼ばないでアメリカから呼ぶといふことは、真剣に考へなければならぬ問題ではないか」と述べられた。そして、東南アジアの人たちの心が日本から完全に離れてゐる事実を指摘され、「私たちはアジアの人たちと心を通はせる努力を、またその勉強をしてゆかなければなりません」と今後の日本の役割について訴へられた。また、ヨーロッパのある政治家の「この世からソビエトと日本がなくなればハッピーである」との発言にふれられ、「このやうな目で日本が見られて



挨拶される倉成正先生



ゐるといふ現実を忘れることなく、世界の中にあつて本当に日本といふ国は、尊敬すべき国であるといふ国に育てて行かなければならないと思ふ」と切々と語られた。さらに、世界中で、現在二億の人々が生命の危険にさらされ、また八億の人が飢えて悩んでゐる現実を指摘されて、「この恵まれてゐるわれわれの生活も、いつ何時大きな災厄に見舞はれるかもしれません。その時こそ、われわれが心の寄りどころとする魂の問題を、心の問題を、もっと大切に行かなければならないのではなうか」と、これからの生きてゆく日本人の寄るべき基とも言ふべき問題を力強く提出された。先生は最後に、「多くの先輩が、築き上げてきたこの美しい日本を、伝統ある日本を、皆さん方の力によって本当に素晴らしいものにして次の時代に引き継いでいくことが大切であると思ひます。」と語られた。僅かな時間の御挨拶ではあつたが参加者一同に大きな印象を残したお話であつた。

#### △閉会式▽

国歌が斉唱され、全員の声が一つに融け合ひ、講堂に力強く響き渡つた。まづ参加者を代表して、早稲田大学三年の藤新成信君が「小田村先生の言はれた、世のため、人のため」といふ御言葉が本当に素朴な気持ちとして、湧いて来るのを覚えた。この五日間のことを本当に大切にしていゆき、友を信じ励まし合つてゆきたい」と力強く挨拶した。続いて、主催者を代表して、





閉会の挨拶をされる加納先生

元日特金属工業㈱常務取締役の加納祐五先生が、「皆さんの合宿中の気持ちは、一人一人様々であったと思ひます。ただ、その中で絶対に信じられることが二つだけあります。一つは、お互ひに心を開いて相手の心を本当に偲ひ合はうといふ懸命の努力をしたこと、そして一つは、お互ひに語り合った友の真心については少しも疑ふことはなかったといふことです。さういふ切実な気持を持ってお互ひに生きることが、この合宿では実現出来たのだと確信してゐます。そして、さういふ疑へない二つの事実の上に立って営まれた合宿生活の、その中に、国のいのち、あるいは日本のいのちといふものはおのづから見えて来るものだと思ひます。共に励まし合った友達が身近にゐるのだといふ事をどうか忘れずに、学びの道に励んでいって下さい」と呼びかけられた。次に全員で、神洲不滅を斉唱した後、九州大学三年・有村浩明君が力強く閉会宣言を

行った。最後に、参加者一同、国文研の先生、先輩方に対し感謝の言葉を述べ、全員で「進めこの道」を斉唱して、四泊五日間の合宿全日程を終了した。

○

愈々、四泊五日間寝食を共にし語り合ってきた友達と別れる時がきた。参加者一人一人は、名残りを惜しみつつ、固い握手を交はし、来年の再会を誓ひ合って島原へ或は諫早へと去ってゆくバスに手を振って別れを告げたのであった。

合  
宿  
詠  
草



吉田松陰先生墓



〈講義〉

齋藤先生の御講義を聴きて

亜細亜大 法 三年 林 広 樹

先生の切なる思ひ伝はりて目を閉ぢ聴けば涙のいづる

九州大学 工 三年 北 濱 道

齋藤忠先生の御講義をお聞きして

先生の教へ子達を送らるる御心胸に伝はりてくる

胸をつくそのかなしかる御しらべに師の御心の偲ばるるかな

佐賀大 教 四年 一ノ瀬 千 秋

山田先生の御講義を受けて

重病に臥したる夫を見守りて詠まれし歌のしらべかなしも

耐へがたき悲しき運命をそのままに見つめし歌のかくも雄々しき

大東文化大 経 四年 出 島 正 人

小田村先生の御講義を聞きて

「人の為世の為に」ぞと語りゆく師の御言葉はわが胸内に沁む

熊本大学 工 四年 堺 美智雄

小田村先生御講義の折、日本海軍軍人に対するオーストラリア海軍葬の実況録音を聞きて

日の丸でおほひまつりし柩をば運ぶ靴音近づきにけり

丈夫のみたまおくるか空砲の響き渡れる音ぞかなしき

憎むべきは日本なりと言ひつつも此のみまつりを行なひ呉れし

み戦いさのさ中にあるも少将は武勇たたへて弔ひ呉れし

国の為いのちささげし丈夫の戦ひぶりを範とすべしとふ

靖国のみたままつりもままならぬ今の日本の世にしぞあれば

福岡教育大 教 四年 森 田 重 隆

小田村寅二郎先生の御講義でシドニー海軍葬の実況録音をお聴きして

四十年前葬儀されしを録音ゆまなこつぶりてしめやかに聴く

日の丸を棺の上にかけられし外国人のみ心偲ぶも

四十年前命すてにし丈夫の上偲ばれて涙流るる

いざやいざこの合宿を去りて後も御霊まもりつ励みゆきなむ

亜細亜大 経 四年 今 出 智 之

ロンドン在住の山口秀範さんの電報をお聴きして

異国より届きし和歌に偲ばるる先輩の思ひのありがたきかな



△友とのかたらひ・班別討論▽

宮崎 大 教 一年 植 村 安 浩  
 思へども言葉にならぬはがゆさにつきることなき努力をちかふ

亜細亜大 経 二年 藪 本 昭 裕  
 真剣に涙をためて語る友の心思ひて話聞き入る

大谷女子大 文 三年 中 尾 純 子  
 感動を言葉つまらせ語る友の心感じて涙こみあぐ

和歌の相互批評

いかにせば友の気もちに近づくと胸内偲びていくたびも読む  
 ひたすらにただひたすらに友どちの胸内偲びて時を忘るる

九州大 法 三年 有 村 浩 明  
 合宿の最後の夜に

班友の語る言葉の端々に真心感ずと友は語りぬ  
 瑞々しき言葉に触れて我もまた新たに学びゆく力湧くとふ  
 湧き上がる喜び面にあらはるる友の姿に心弾むも

最後の班別懇談会の折に

九州大 文 二年 竹内昭彦

四泊をとくに過せしみ友らといよ最後の語らひを持つ  
ぽつぽつと想ひを語るみ友らを見ればますますしたはしきかな  
語らんと思へど涙こみ上げて言葉出でこぬ事のくやしき

最後の班別懇談にて

一 橋大 商 四年 坂本 慎

み友らはゑみをうかべてそれぞれに己が思ひを語りたまへり  
み友らの面をながむれば合宿の楽しい日々が思ひ出さるる  
別れてもその思ひを温めむこのみ友らと便り交はして

班別討論をふり返って

日本大 文理 三年 金谷美保

力んでは苦しからむと話されし言の葉今はありがたく思ふ  
力まずにじつくり見つけて静かなれど力のこもれる言葉もちたし

慰靈祭にのぞみし折に

長崎大教三年伊藤和久

見上げたる夜空静かに星輝きてその美しさよ漁火のごと  
あまた降る夜空の星の中流れゆく天の川こそ美しかりけれ

榑宣伝会議コピーライター養成講座生 布瀬千代子

雲仙の夜はしづかに深まりてみたままつりの時は来たりぬ  
大人達が心をこめてつくられし祭壇揚げば胸せまりくる  
師の君は心をこめて綴られし祭文しづかに読みたまふなり  
師の君は力を合はせしきしまの道を開かむと語りたまひぬ  
身を正し大人の言の葉胸にだき学びの道を我も歩まむ

△レクリエーション▽

亜細亜大 経営二年 吉川理夫

足休め一息せんとふりむけば眼下に見ゆる海ぞ広しも

九州大 工一年 森川公私

息はずませ石段踏みしめ登りくればはてなく続く海の見ゆるかな

尚 綱 大 文 一 年 山 方 富美子

遥かなる有明海を友だちと眺むる心地すばらしきかな

熊 本 大 医 二 年 山 田 和 慶

峠よりおだやかなる海ながむれば緑おぼろに故郷の島見ゆ

福 岡 教 育 大 教 二 年 浜 口 敦 子

天皇も歩まれしてふ雲仙の夏草深き山の辺の道

福 岡 県 立 水 産 高 教 諭 松 尾 延 明

白き雲わづかにかかる天草のふるさとの島なつかしきかな

鹿 児 島 県 立 中 種 子 養 護 学 校 教 諭 宮 下 春 幸

ふるさとの島の見ゆるを指さして教ふる友の面輝けり

〈全体感想発表・閉会式〉

愛 知 学 院 大 商 四 年 竹 蔦 順 一

感想発表をきいて

友どちの真心こめし言の葉に吾が胸ふるへ涙こぼるる

中 村 学 園 大 家 二 年 小 林 美 貴

全体意見発表を聞きて

壇上で己が真心伝へんと勇気を持ちて友らは語る

晴ればれと語る姿に気づかざる我の心のつたなかりしを

歌を詠むことが心を浄化することを信じて励みゆきたし

福岡教育大 教 四年 是 松 秀 文

閉会式の折に加納先生の御話をお聴きして

師の君の話されしままに御言葉を信じたしとふ思ひこみあぐ

四天王寺国際仏教大 文 二年 新 宮 峰 子

声あはせ先生方の歌ひ給ふ「進めこの道」雄々しくひびく

日の本の道ひたすらに歩まれし誇りあふれて雄々しき歌ぞ

我もまたみあとに従ひこの道を進みゆきなむ小さき身なれど

△別 れ▽

中央大 法 二年 京 田 清 人

集ひ来て共に学びし友どちと別れゆく日のはや迫り来る

宮 崎 大 農 四年 鹿 毛 義 弘

各地より集ひ来たれる友どちと別れを惜しむ雲仙の地にて  
様々に語り明かして通ひあひし友は心の支へなりけり  
再会を約して去りゆく友どちの後姿の雄々しく見ゆる

九州大法三年 與島誠央

これよりは共に便りを交はし合ひ支へあひつつ学ばむと思ふ  
帰りては心なえゆく時もあらむ日々のなりはひにまぎれつつあれば  
悩みあらば悩みをうちつけに書き綴り励まし合ひつつ友よ学ばむ

〈講師・国民文化研究会会員〉

国際政治評論家 齋藤忠

命ありてまた訪ね得し雲仙の空かくも晴れて日陰やさしき  
なつかしき思ひ出を胸に歩み入る湯けむりの町よ風さわぐ森よ  
殉教の碑はいづこぞと路問へば花売るひとの優しかりけり  
風吹き通る町を行きつつふと思ふわが若き日はすでに帰らず  
思ひ出はかくも悔のみ先立ちて面伏せて行く夕風の町

国民文化研究会理事長・亜細亜大教授 小田村 寅二郎



合宿もはや半ばとはなりにけり時経ちゆくを気づかぬままに  
緊張の連続といふ日々なればかく疾く時は過ぎゆくらむか

年に一度心知り合ふ友どちの遠く寄り来て励む集ひよ

若きらにわれらが思ひ通ふべき道ここにありと信じてやまず  
窓の外の木々の緑は活き活きとまみにうつりて見るに清しも

（助労働科学研究所常務理事・高千穂商科大講師

高 木 尚 一

松ひのき山肌おほひ雲仙の里の朝日は眼にさやかなり

午<sup>ひる</sup>近く蟬なき出でし湯けむりの長く影ひく日ざかりの道

合宿を終へしやすらぎ来む年に向ふ決意につながりてあり

男をみな力合せて日の本のまなびの道を正しゆかなむ

千早ぶる神まもりますくにつちの草木ゆたかにいのちあふるゝ

元（株）日特金属工業常務

加 納 祐 五

雲仙合宿にはじめての朝を迎へて

寝覚めして窓をひらけばやうやうに夜は明くるらし茜さしつ

新月の淡くかかりてひとひらの雲さへ見えぬあかつきの空

空かぎる山の嶺はなほ暗くして地はひたすらにしづもりてあり

雨霧のおほき山ぞと聞きしかどよき日なるらむけふのひと日は  
三百の友らこもりてあるからに天も恵みをたれたまひしか  
空の色はまなくうつりて新しき月の光の消えなむとせり

亜細亜大教授

夜久正雄

小田村兄の御講義を聞きて

家思ふ心すなはち国おもふ心に通ふと友は説かるる  
国おもふ心の深き人にして世界の平和をたれ願はざる  
国のこと忘れて世界人類の平和を言あぐる人多くして  
国のこと深く思へば戦のもととなるとふ偽りの説  
偽りのそら言の論を君強くただされにけりこたびの講義に  
われらこそ真に平和を願ふぞと説かるる言葉うれしかりけり  
国おもふ深き心に説く君の言葉にわれは身を正さるゝ

○ なき友のおもかけ立ちて消えにけり暁の夢うつともなきに

福岡教育大教授

山田輝彦

鳴きしきるかなかな聞けば国破れ山河残りしかの日思ほゆ

八月は国民こぞり黙しつ亡き人しのぶ月にあらずや  
いたづらに反戦の声のみ高しみたまをろがむ心忘れて

一とせに一たび会ひてたちまちに通ふころよ何にたとへむ  
病む友はいかにいますや若き日の激しきのちよびさませいま

榎宝辺商店取締役

宝 辺 正 久

閉会式、その後

高らかに君が代祈るそれぞれのひとつ心にうたふうれしさ  
別れゆく友らとうたふ声高くすみてとゞろく天つみそらに  
朝夕にむかひなれたる赤松の林うつくし真日てりそひて  
普賢岳さやかに はれて見ゆるなり心つくして行けと如くに

開発電子榎取締役

長 内 俊 平

家なる妻へ

最先に妻に告げやらむ聖王の御本の講義今終れりと

いたらざる身をはげまして友どちに心をこめて語りかけたり  
この朝けあさみどり澄みわたりたるの大み歌かかげありけり集ひの庭に  
語るべきことどもむねにうづまきてよべの一夜はねずてあけたり

語り終へし我に寄りきてねぎらひのことばを友らはかけてくれたり  
都より大空近きこちする空のさまなどまた便りせむ

團こんや別館代表取締役

青 砥 宏 一

班員（女子）を送る

にこやかに笑ひて別れのあいさつに来る乙女子の何ぞはしきも  
はじめごろ発言なかりし乙女子のさやかな顔をみればうれしも  
来年も又会ひませうとあいさつを交はしつ手にぎりわかれゆくかも  
バスはいま友らをのせて出でてゆくまさきくませよ又あふ日まで

舞岡八幡宮宮司

関 正 臣

廣瀬誠兄に（雲仙合宿第三日、山田輝彦兄の「和歌創作導入講義」あり。

資料『坂の沼琴』の「手術のあと」引用）

火の国の雲仙岳の合宿に君が調べを我等聞きけり

萬葉の歌さながらに「わが背子」を支へ了せし君の妻はも

萬葉の歌のしらべのくしびなる力しみじみ今思ふなり

百千年今につたはる言の葉のいのちは君を生き返らしき

君がみ歌聞きつつ居れば自づから涙にじみてとどまらぬかな

山口秀範君のうたをよみて

福岡県立修猷館高講師

小柳陽太郎

ローマ字にて綴られし歌よロンドンの友のたびにしこれのみ歌は  
よみゆくまゝにたけきみ心しぬばれてひたなつかしき友のおもわの  
はろかなる合宿の地を偲びつゝ友のころはうちふるひけむ  
信なき国の栄ゆるはつかのまとふことばにこもるおもひかなしも  
海原を遠く距つともたちまちに心はかよふ君がみ歌に

榊ファミリー常務取締役

松吉基順

天皇のみ歌の碑いしづみ 拝さんと野岳のりへ向へば鶯の鳴く

大御歌のみやまきりしま高原たかはらにむれ咲く頃を思ひやるかな

天皇のみ歌を拝し高原に立てば小鳥の飛びゆける見ゆ

見わたせば千々石の海は白く光り吹きくる風のいやすずしかも  
眠まなしたのあしどりの池は緑濃き山肌うつつして静まりてあり

三年前白きをめでて歌詠みし仁田峠のうつぎの花はも

亜細亜大助教授

東中野修

閉会式の折

“君が代”と歌ひ始むればたちまちに熱きなみだの目にはあふれく  
“君が代”と今上天皇しのびまつり歌へばなみだとどめかねつも  
うねるごとき大きな歌声耳にしつつ声つまらせてわれも歌ひぬ

九州大医学部循環器内科

小柳左門

さはやかに晴れたる朝の光さして山の緑の目にしむごとし  
赤松の幹は見事なる色なして松葉の緑ひときは美し  
美しき山の緑をたたへつつ朝まだき道友と歩きぬ

熊本県立八代高教諭

白浜裕

小堀桂一郎先生の御話を聴きて

しづかなる御声のうちに師の君の学問まなびの姿勢すがたしのぼるるなり  
古事ふるごとの記かみの神々うつつにぞいますがごとく思はるるなり

南陽工業高教諭

宝辺矢太郎

閉会式にて

友皆と歌ふ君が代は雲仙の大地とよもしひびきわたりぬ  
大君の御代とこしへにあれかすと祈りて歌ふ君が代尊し  
我が前の友も力の限り歌ふそのこころ偲べば涙もよほす



小柳陽太郎先生の御講義

九大医学部循環器内科

長澤一成

たゝかひは正邪にあらざ悲劇なりと師はかたらるゝ御声ふるはせ  
若きらに語りゆかるゝ師の声は高なりひゞきぬほとばしるがに  
渾身の力のかぎり師の君は若きらに語らるゝ「いのち蘇れ」と  
かなしきまでに御思ひあふるゝ師の声に涙流れ来てとゞめかねつも

## あとがき

合宿を終へしやすらぎ来む年にい向ふ決意につながりてあり

この歌は昨年の夏、高木尚一先生が合宿を終へて雲仙を去るにのぞんで残された御歌であった。合宿の終わったあとのしばしのやすらぎに身を任せるいとまもなく、七十を越えた御歳でありながら、再び来るべき年に向ふ決意を胸に山を下りられる、その御歌にみなぎる先生の御氣持は実に瑞々しい。だが先生はそれより僅か四ヶ月、十二月に脳溢血で倒れられたまま遂に不歸の客となられ、あの温顔に接することは永久に出来ぬこととなってしまった。

合宿三日目の夜、夏とはいへ、雲仙の山に吹きわたる風、身にしみる慰霊祭において御高齢ながら力に満ちた御聲でおよみになった祭文のしらべが夜空にひびきわたったのも、昨日のやうにありありと偲ばれるけれども、先生今やなし。無量のおもひを残して世を去られた御心をおもへば、この一首の歌がたゞならぬ力をもって私たちの胸に迫ってくるのである。

合宿レポートの編集の筆をとってゐる間、私たちの心をよぎったものは、あの忘れがたい先生の温容であり、この歌にこもるおもひであった。

先生はよく「決定<sup>けつじよう</sup>」といふ言葉を口にされた。昭和五十二年、同じく雲仙で行はれた合宿の全体感想発表の折には

決定の心を得しか壇上にますますに立てる友らたのもし

といふ歌をよまれてゐるし、一昨年、霧島合宿の折も「日本の危急が告げられる時、我々は自分が未熟だといふ限定された気持をすてて、祖国のいのちともろともに戦ひ戦ひすゝむべし」と決定する外はない」と書き記してをられる。まさしく先生の御言葉通り、いかに力拙くとも、祖国の危急を前に、心を一つに定める以外に道はない。その道をもとめて私たちの営みは今年も続けられてゆく。福岡において三月十九日から三泊四日の春季合宿がもたれたあと、各大学で迎へる新入の学生を誘つて八月四日から九日まで、今年阿蘇の地において第二十九回の合宿教室が開かれる。全国の若き友らの集ふ日を遥かに望みつ、編集の筆を擱きたい。

昭和五十九年三月一日

編集委員

山田輝彦  
小柳陽太郎

社団法人 国民文化研究会関係図書目録

A 先師・先輩の遺著

書名	著者・編者	発行年月日	判・頁数	頒価
聖徳太子の信仰思想と 日本文化創業 (増補再版本)	黒上 正一郎	四四・一〇・一五 (現在四版)	A5判 三〇四頁	千一、八〇〇円 千三〇〇円
憂国の光と影 — 田所広泰遺稿集 —	小田村寅二郎編	四五・三・一〇	四六判 五四三頁	千一、八〇〇円 千三〇〇円

B 国文研叢書 (新書判)

No.	書名	著者・編者	発行年月日	頁数	頒価
No. 1	古事記のいのち — 改訂版 —	夜久 正雄	四一・三・二五 (原 版) 四八・一一・一 (改訂版)	三二六頁	千七〇〇円 千三〇〇円
No. 2	日本精神史鈔 — 親鸞と実朝の系譜 —	桑原 暁一	四一・一一・二五	二七九頁	(品切)

No.11	No.10	No. 9	No. 8	No. 7	No. 6	No. 5	No. 4	No. 3
続 日本精神史鈔 —花山院とその系譜—	欧米名著邦訳(明治)集 —文献資料集—	歴史と人生観 —マルクス主義の超克—	日本思想の系譜 —文献資料集(近代その二)—	日本思想の系譜 —文献資料集(近代その一)—	日本思想の系譜 —文献資料集(近世その二)—	日本思想の系譜 —文献資料集(近世その一)—	日本思想の系譜 —文献資料集(古代・中世)—	弁証法批判の歴史
桑原 暁一	小田村寅二郎編	川井修治	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	高木 尚一
四五・一二・二五	四五・三・二〇	四三・三・一五	四四・三・二五	四四・三・二五	四三・一〇・一	四三・二・一	四二・三・二五	四二・二・二五
三一〇頁	四八三頁	二八三頁	三八一頁	四〇三頁	四〇九頁	三一七頁	三〇九頁	二四一頁
(品切)	千九〇〇円 千三百〇〇円	千六〇〇円 千三百〇〇円	千八〇〇円 千三百〇〇円	千九〇〇円 千三百〇〇円	千九〇〇円 千三百〇〇円	千七〇〇円 千三百〇〇円	千七〇〇円 千三百〇〇円	千五〇〇円 千三百〇〇円

No.20	No.19	No.18	No.17	No.16	No.15	No.14	No.13	No.12
続いのちささげて —戦中学徒・遺文遺詠抄—	いのちささげて —戦中学徒・遺文遺詠抄—	明治天皇御集研究	日本における マルクス主義批判論集	国史の地熱 —聖徳太子と楠氏の精神—	白村江の戦 —七世紀・東アジアの動乱—	ヨーロッパにおける マルクス主義批判論集	短歌のあゆみ —続「短歌のすすめ」—	短歌のすすめ—創作と鑑賞—
国民文化研究会編	国民文化研究会編	三井甲之著	戸田義雄編	桑原 暁一	夜久正雄	桑原暁一編	山夜田久輝正彦雄	山夜田久輝正彦雄
五四・四・二〇	五三・二・一五	五二・二・一〇	五一・三・一〇	四九・一〇・二五	四九・一・一〇	四八・二・一〇	四六・二二・一	四六・四・一
四四〇頁	四五〇頁	三五四頁	三二〇頁	二九三頁	三二四頁	三三八頁	三一六頁	三〇九頁
千九〇〇円 千三〇〇円	千九〇〇円 千三〇〇円	千七〇〇円 千三〇〇円	千七〇〇円 千三〇〇円	千七〇〇円 千三〇〇円	千七〇〇円 千三〇〇円	千七〇〇円 千三〇〇円	千六〇〇円 千三〇〇円	千六〇〇円 千三〇〇円



C 「合宿教室」レポート

回数	開催地 (人員)	年	書名	主要講師	判・頁数	定価
(2)	霧島 (九二名)	31	混迷の時代に指標を求めて	広田洋二・日下藤吾 夜久正雄	A5判 八八頁	〒一五〇円 〒二〇〇円
2	福岡 (二二七名)	32	民族自立のために	竹山道雄・高山岩男 浅野晃	A5判 五三頁	(品切)
	岡山	32	民族復興の根底を培うもの	木下尚一・石村暢五郎 高木一	新書判 一三三頁	〒一〇〇円 〒二〇〇円

No.24	No.23	No.22	No.21
明治の精神 —近代文学小論—	戦後教育の中で	とつちやんの先生の 国語教室 —桑原晩一・遺稿から—	社会主義理論との戦い —山本勝市博士論文選集—
山田輝彦	小柳陽太郎	国民文化研究会編	加納貞祐 三浦貞蔵
五七・一二・二〇	五六・一二・二〇	五六・一・二〇	五五・二・一
三三五頁	二九八頁	一七二頁	四〇七頁
〒八〇〇円 〒二〇〇円	〒七〇〇円 〒二〇〇円	〒四八〇円 〒二〇〇円	〒九〇〇円 〒二〇〇円

11	10	9	8	7	6	5	4	3
雲 (二四〇名) 仙	別府・城島 (二二五名)	桜 (二〇二名) 島	雲 (二〇二名) 仙	阿 (二一五名) 蘇	雲 (二〇八名) 仙	雲 (二〇〇名) 仙	阿 (二六〇名) 蘇	佐 (七二名) 賀
41	40	39	38	37	36	35	34	33
日本への回帰 — 第二集 —	日本への回帰 — 第一集 —	新しい学風を興すために — 第三集 —	新しい学風を興すために — 第二集 —	新しい学風を興すために — 第一集 —	続々 国民同胞感の探求	続 国民同胞感の探求	国民同胞感の探求	民族の明日を求めて
戸川 福田 尚 恆存・木内 信胤	岡内 木内 信胤 潔・花見 達二	小林 木内 信胤 秀雄・広田 洋二	竹山 木下 広居 道雄・木内 信胤	黒岩 福田 一郎 恆存・木内 信胤	津下 小林 正章 秀雄・木内 信胤	佐藤 木内 慎一郎 信胤・花田 大五郎	野口 花田 恒樹 大五郎・中山 優	森部 勝部 三十郎 真長・木下 彪
新書判 三二〇頁	新書判 二九五頁	新書判 二九八頁	新書判 二九八頁	新書判 二四八頁	B 6判 三二五頁	B 6判 四三三頁	B 6判 三六五頁	新書判 二五〇頁
(品切)	(品切)	〒三〇〇円 二五〇円	〒三〇〇円 二五〇円	(品切)	〒五〇〇円 二五〇円	(品切)	〒五〇〇円 二五〇円	〒二〇〇円 一〇〇円

20	19	18	17	16	15	14	13	12
(阿蘇 四三五名)	(霧島 五二八名)	(雲仙 四三三名)	(阿蘇 四〇二名)	(霧島 三〇二名)	(雲仙 四九一名)	(阿蘇 四〇三名)	(霧島 三三三名)	(霧島 三三六名)
50	49	48	47	46	45	44	43	42
日本への回帰——第十一集——	日本への回帰——第十集——	日本への回帰——第九集——	日本への回帰——第八集——	日本への回帰——第七集——	日本への回帰——第六集——	日本への回帰——第五集——	日本への回帰——第四集——	日本への回帰——第三集——
木内 信胤・福田 恆存	小林 秀雄・木内 信胤	木内 信胤・村松 剛	木内 山本 信胤・胡 勝市 蘭 成	木内 村松 信胤・戸田 剛 義雄	小林 秀雄・木内 信胤	岡下 道潔・木内 信胤	木内 竹山 道雄・高谷 信胤 覚藏	木内 信胤・太田 房雄・山本 耕造 勝市
新書判 三三四頁	新書判 三〇六頁	新書判 二九〇頁	新書判 二九八頁	新書判 三二二頁	新書判 二六五頁	新書判 二九五頁	新書判 三二四頁	新書判 三〇七頁
〒五〇〇円 二五〇円	(品切)	(品切)	〒三〇〇円 二五〇円	(品切)	(品切)	(品切)	〒三〇〇円 二五〇円	〒三〇〇円 二五〇円

D その他

(国民同胞感の探求三部作は「理想社」より刊行)

26	25	24	23	22	21
阿蘇 (三五三名)	雲仙 (四三一名)	霧島 (二六八名)	阿蘇 (四四〇名)	雲仙 (三三二名)	佐世保 (三七二名)
56	55	54	53	52	51
日本への回帰—第十七集—	日本への回帰—第十六集—	日本への回帰—第十五集—	日本への回帰—第十四集—	日本への回帰—第十三集—	日本への回帰—第十二集—
齋藤 忠・村松 剛	法眼 晋作・福田 恆存	木内 信胤・高山 岩男	小林 秀雄・木内 信胤	木内 信胤・衛藤 藩吉	木内 信胤・村松 剛
新書判 三一九頁	新書判 三二二頁	新書判 三〇〇頁	新書判 三三八頁	新書判 三三四頁	新書判 二八五頁
〒五〇〇円 二〇〇円	〒五〇〇円 二〇〇円	〒五〇〇円 二〇〇円	〒五〇〇円 二〇〇円	〒五〇〇円 二〇〇円	(品切)

歌よみに与ふる書・他四編	書名	著者・発行者	判・頁数	頒価
		正岡 子規 (国民文化研究会発行)	新書判 一一二頁	〒二二五〇円

今上天皇御歌解説 (附)万葉集論	三井甲之 (斑鳩会発行)	新書判 一五七頁	〒四〇〇〇円
明治・大正・昭和 「謹選 詔勅集」	(斑鳩会発行)	新書判 八五頁	〒二二〇〇円
式典曲「神洲不滅」 行進曲「進めこのみち」	三井甲之 —日本学生協会の歌— 作詞 —作曲—	各A 四五頁判	各一〇〇円 〒各 一一二〇円

E 関係図書

書名	著者・発行者	判・頁数	定価
新輯 日本思想の系譜 (上・下) —文献資料集—	小田村寅二郎編 (時事通信社)	A5判 (上)八五七頁 (下)九一二頁	上・下各 三、〇〇〇円
日本思想の源流 —歴代天皇を中心に—	小田村 寅二郎 (日本教文社)	四六判 三〇五頁	一、二〇〇円
THE KOJIKI IN THE LIFE OF JAPAN (国文研叢書 No.1. 「古事記のこゝち」の翻訳)	(訳者) G. W. ROBINSON [THE CENTRE FOR EAST ASIAN CULTU. RAL STUDIES]	B6判 一一〇八頁	

F 月 刊 誌

誌 名	創刊・号数	判・頁数	定 価
月刊「国民同胞」 「国民同胞」合本 第一卷 第二卷 第三卷 第四卷 第五卷	昭和三十六年十一月創刊 昭和五十九年三月現在 二六九号	B 5 判 八頁	年間1、500円 共 二 各卷 二、二〇〇円 (含送料)
同	第一号	各卷四〇〇頁	
同	第二号		
同	第三号		
同	第四号		
同	第五号		

歴代天皇の御歌 —初代から今上陛下まで二千首—	小田村 寅二郎 陽太郎 (日本教文社)	四六判 四三八頁	一、七〇〇円
歌人・今上天皇 〈増補改訂〉	夜久 正 雄 (日本教文社)	四六判 三四四頁	一、五〇〇円
日本の感性	戸田 義 雄 (日本教文社)	四六判 三四六頁	一、二〇〇円
昭和史に刻むわれらが道統	小田村 寅二郎 (日本教文社)	四六判 三二四頁	一、三〇〇円



——日本への回帰——

(第19集)

昭和五十九年三月二十日発行

定価 六〇〇円

千 二五〇円

編者

大学教官有志協議会

社団法人 国民文化研究会

編集委員代表

小田 寅二郎

発行所

社団法人 国民文化研究会

東京都中央区銀座

七一〇一八柳瀬ビル

振替(東京) 六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替へいたします





